鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（50）

和田川及び波見川局部改良事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

下伊倉城跡
下伊倉遺跡

1989年３月

鹿児島県教育委員会

序　　文

この報告書は、鹿児島県教育委員会が一級河川肝属川支流和田川及び波見川局部改良工事に先だって、昭和62、63年度に実施した下伊倉城跡及び下伊倉遺跡の発掘調査の記録です。

今回の発掘調査では、下伊倉城の内濠・外濠跡、土塁の基礎部分、柱穴等をはじめ、弥生時代の溝状遺構や土器等が多数出土し、多大の成果を収めました。

本書は、鹿児島県の古代・中世の歴史の解明に貴重な手掛りを提供するものと考えており、地域の歴史の研究や文化財保護のために活用していただければ幸いです。

終わりに、この発掘調査に御協力くださった県土木部河川課、東串良町教育委員会並びに地元の方々に心から感謝いたします。

平成元年３月

鹿児島県教育委員会

教育長　濵　里　忠　宣

例　　言

1．本報告書は、一級河川肝属川の支流である和田川及び波見川局部改良事業に伴う下伊倉城跡・下伊倉遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査。報告書作成に当たっては、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏、同三木靖氏、鹿児島県古石塔研究会副会長河野治雄氏の指導・助言を得た。

3．プラントオパール分析については、宮崎大学農学部助教授藤原宏志氏に依頼した。

4．本書で用いたレベル数値は海抜高である。

5．報告書作成に係る実測、測量、レイアウト、挿図作成、写真撮影、図版作成、及び編集は、吉永・宮田が行った。

なお、執筆分担は下記のとおりである。

第1章、第3章、第5章	吉永　正史
第2章、第4章、第6章	宮田　栄二
付論1	三木　　靖
付論2	河野　治雄
付論3	藤原　宏志

目　　次

序　文
例　言 …… 3
第1章　調査の経過 …… 9
　第1節　調査に至るまで …… 9
　第2節　調査の組織 …… 9
　第3節　調査の経過 …… 10
第2章　遺跡の位置及び環境 …… 14
　第1節　位置と地形 …… 17
　第2節　遺跡周辺の遺跡と歴史的環境 …… 23
第3章　調査の概要 …… 23
　第1節　確認調査の概要 …… 23
　第2節　緊急発掘調査の概要 …… 28
第4章　土層 …… 31
第5章　下伊倉城跡の調査 …… 41
　第1節　調査の概要 …… 41
　第2節　歴史時代の遺構 …… 41
　第3節　その他の遺構 …… 51
　第4節　歴史時代の遺物 …… 51
　第5節　小結 …… 59
第6章　下伊倉遺跡の調査 …… 61
　第1節　下伊倉遺跡の概要 …… 61
　第2節　弥生時代の遺構 …… 61
　第3節　弥生時代の遺物 …… 69
　第4節　古墳時代の遺物 …… 73
　第5節　歴史時代の遺構 …… 74
　第6節　歴史時代の遺物 …… 74
　第7節　小結 …… 79

付論1　古石塔について …… 113

表　目　次

第１表　遺跡関連の遺跡 …… 18
第２表　遺跡周辺の中世城館跡 …… 20
第３表　ピット群１の計測表 …… 43
第４表　ピット群２の計測表 …… 43
第５表　下伊倉遺跡出土土器観察表 …… 73

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置の地形 …… 14
第２図　遺跡周辺の遺跡と中世城館跡等分布図 …… 15
第３図　遺跡周辺の地形と確認トレンチ配置図 …… 21
第４図　確認調査トレンチ土層断面図（１） …… 25
第５図　〃　（２） …… 27
第６図　〃　（３） …… 28
第７図　全面調査の調査範囲及びグリッド図 …… 29
第８図　基本土層柱状模式図 …… 31
第９図　下伊倉遺跡土層断面図 …… 33
第10図　下伊倉城跡土層断面図（１） …… 35
第11図　〃　（２） …… 37
第12図　下伊倉城跡実測図及び遺構配置図 …… 39
第13図　溝１平・断面図 …… 41
第14図　溝２平・断面図 …… 42
第15図　ピット群１、２及び古道平・断面図 …… 44
第16図　井戸状遺構平・断面図 …… 45
第17図　濠土層断面図 …… 47
第18図　塚平・断面図 …… 49
第19図　下伊倉城跡出土遺物（１） …… 52
第20図　〃　（２） …… 53
第21図　〃　（３） …… 55
第22図　〃　（４） …… 57
第23図　〃　（５） …… 58
第24図　溝状遺構１・２平・断面図 …… 62
第25図　溝状遺構１・２内遺物出土分布図 …… 63

第26図　溝状遺構２出土遺物 …… 64
第27図　遺物出土分布図（１） …… 65
第28図　〃　（２） …… 67
第29図　弥生時代の遺物（１） …… 70
第30図　〃　（２） …… 71
第31図　弥生時代の石器・軽石製品 …… 72
第32図　古墳時代の遺物 …… 73
第33図　歴史時代の遺構 …… 75
第34図　歴史時代の遺物（１） …… 77
第35図　〃　（２） …… 78

図　版　目　次

図版１　航空写真　西側上空から …… 81
図版２　（上）航空写真　東側上空から　（下）同左　北側上空から …… 82
図版３　（上）下伊倉城跡近景　東より　（下）同左　南より …… 83
図版４　（上）〃　（増水時）　東より　（下）同左　西側外濠 …… 84
図版５　（上）確認調査風景　（下）確認調査第６～９トレンチ …… 85
図版６　（上）確認調査第15－ｃトレンチ土層　（下）同左　第21トレンチ土層 …… 86
図版７　（上）〃　第23トレンチ土層　（下）同左　第20トレンチ土層 …… 87
図版８　（上）〃　第37トレンチ土層　（下）同左　第29トレンチ土層 …… 88
図版９　全面調査伐採作業風景 …… 89
図版10　全面調査発掘調査風景 …… 90
図版11　〃 …… 91
図版12　（上）下伊倉城跡土層　（下）溝１確認状況 …… 92
図版13　（上）溝１検出状況　（下）溝２検出状況 …… 93
図版14　（上）ピット群２検出状況　（下）古道検出状況 …… 94
図版15　（上）井戸状遺構断面　（下）西側外濠断面 …… 95
図版16　（上）西側内濠断面　（下）東側内濠断面 …… 96
図版17　（上）塚断面　（下）下伊倉城跡出土遺物（１） …… 97
図版18　（上）下伊倉城跡出土遺物（２）　（下）同左（３） …… 98
図版19　（上）同上（４）　（下）同左（５） …… 99
図版20　（上）同上（６）　（下）高山總繪圖（部分） …… 100
図版21　（上）下伊倉遺跡土層断面 …… 101
図版22　（上）溝状遺構１検出状況　（下）溝状遺構１内遺物出土状況 …… 102

図版23　（上）溝状遺構２検出状況　（下）溝状遺構１、２掘り下げ状況 … 103
図版24　下伊倉城跡遺物出土状況 …… 104
図版25　〃 …… 105
図版26　〃 …… 106
図版27　溝状遺構２出土遺物（１） …… 107
図版28　（上）溝状遺構２出土遺物（２）　（下）下伊倉遺跡包含層出土遺物（１） 108
図版29　下伊倉遺跡包含層出土遺物（２） …… 109
図版30　〃　（３） …… 110
図版31　下伊倉遺跡包含層及び表層出土遺物（１） …… 111
図版32　〃　（２） …… 112

第1章　調 査 の 経 過

第1節　調査に至るまでの経過

昭和60年度に県土木部河川課（鹿屋土木事務所）で一級河川肝属川の支流である和田川及び波見川の局部改良工事（幅約6mの拡幅改修工事）が計画された。

昭和61年4月、鹿屋土木事務所と東串良町教育委員会とで、下伊倉遺跡の取扱いについて協議が行われた。これに基づき同町では町文化財保護審議会に、当該文化財の取扱いについて諮問し、同年7月、東串良町文化財保護審議会から文化財を保護する方法を講じて欲しい旨の要望書が町教育委員会委員長に提出された。

昭和61年8月、県土木部河川課、鹿屋土木事務所、県教育庁文化課、東串良町教育委員会でその取扱いについて協議が行われた。その後数回の協議が行われ、その結果、事前に確認調査を実施し、遺跡の範囲・性格等を明確にした上で、遺跡の保護と開発との調整を図ることとなった。

確認調査は、県教育庁文化課が調査主体者となって昭和62年4月～5月に実施した。対象地の面積は約5400㎡である。

この確認調査の結果に基づいて、昭和62年6月、県土木部河川課、鹿屋土木事務所、県教育庁文化課とで協議が重ねられ、下伊倉城跡と弥生時代の包含層が確認された地区（下伊倉遺跡）については、緊急発掘調査を実施して記録保存を図ることとなった。緊急発掘調査は、県教育庁文化課が調査主体者となって昭和63年7月18日から実施した。

第2節　調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教育長	濵里　忠宣
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課長	吉井　浩一
調査企画担当者	〃	課長補佐	川畑　栄造（昭和62年度）
	〃	〃	奥園　義則（昭和63年度）
	〃	主幹	森田　齊（昭和62年度）
	〃	〃	立園多賀生（昭和63年度）
	〃	主任文化財研究員兼埋蔵文化財係長	立園多賀生（昭和62年度）
	〃	文化財研究員兼埋蔵文化財係長	吉元　正幸（昭和63年度）
調査担当者	〃	文化財研究員	吉永　正史
	〃	主査	中村　耕治（昭和63年度）
	〃	主事	宮田　栄二（昭和63年度）
	〃	〃	東　和幸（昭和62年度）

調査担当者	鹿児島県教育庁文化課	主事	井ノ上秀文（昭和63年度）
調査事務担当者	鹿児島県教育庁文化課	企画助成係長	濱松　巌（昭和62年度）
	〃	〃	京田　秀允（昭和63年度）
	〃	主査	京田　秀允（昭和62年度）
	〃	〃	平山　章（昭和63年度）
	〃	主事	川畑由紀子（昭和62年度）
	〃	〃	末永　郁代（昭和63年度）

なお、当遺跡の調査にあたっては、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏、三木靖氏、鹿児島県古石塔研究会副会長河野治雄氏の指導助言を得た。

また、東串良町教育委員会及び作業員として地元の方々の協力を得た。

第３節　調査の経過

１　確認調査

確認調査は、昭和62年４月20日から５月19日まで実施した。

４月20日（月）　確認調査の開始。プレハブ等の設営。発掘諸道具、機材等の搬入。作業員への作業内容の説明及び諸注意の伝達。第16、15－Ｃ、15－Ｅ、12、10、11、14トレンチの設定及び掘り下げ。第16トレンチにて土塁の版築様の基盤があり、その下位に古道様のものを確認。

４月21日（火）　第10、11、13、14、15－Ｃ、15－Ｅ、16トレンチの掘り下げ。第10トレンチでは内濠法面を土塊状のもので積み上げている。第11トレンチでは版築状の土塁基礎を確認。

４月22日（水）　第13、14、15－Ｃ、15－Ｅ、16トレンチの掘り下げ。第13トレンチにて塚は版築による盛り土であることを確認。第14トレンチでピット３個を確認。第16トレンチで内濠法面を確認。第19トレンチの設定及び掘り下げ。

４月23日（木）　第13トレンチの塚の土層断面実測。第11、12トレンチ土層実測準備。第15－Ｅトレンチで基盤層が砂層であることを確認。第９、４トレンチの設定及び掘り下げ。

４月24日（金）　第４トレンチ掘り下げ。田の床土の下位は粘土と砂層がやや不整合に堆積。第９トレンチでは第４トレンチと同様である。内濠の外側法面がつかめない。第６トレンチの設定及び掘り下げ。城内にある古石塔の調査。

４月27日（月）　外濠の法面確認のため第７～10トレンチを１ｍ幅で連続して設定し、掘り下げる。第14トレンチでのピットの平板実測。第21、23、24トレンチの設定。

４月28日（火）　第21トレンチで第５層上面で溝状遺構を確認し、西側へトレンチを拡張する。第23トレンチの第６層から壺形土器口縁部片出土。第23トレンチの設定。

４月30日（木）　標準土層の決定。灰色砂層を基盤層として14層に分ける。第21トレンチの３本の溝状遺構検出。第23トレンチの拡張。

5月1火（金）　第37トレンチの設定。第22、23トレンチ遺物検出作業。第21－Cトレンチの第7層より土器出土。

5月6日（水）　第21、22、23、37トレンチの掘り下げ。第37トレンチは沖積作用による堆積土か。

5月7日（木）　第21～23、37トレンチの掘り下げ。第16トレンチの古道様のものの広がり確認のため拡張する。

5月8日（金）　第21～23トレンチ基盤層までの掘り下げ終了。

5月11日（月）　第6トレンチで基盤層近くから湧水。第14、16トレンチ掘り下げ。土層実測及び埋め戻し作業。

5月13日（水）　土層実測及び埋め戻し作業。

5月14日（木）　土層実測及び埋め戻し作業。河口貞徳県文化財保護審議会委員よにる現地指導。藤原宏志宮崎大学農学部教授によるプラントオパール分析のための検体採取。

5月15日（金）　埋め戻し作業。河野治雄氏による古石塔調査。

5月18日（月）　埋め戻し作業。

5月19日（火）　埋め戻し作業。発掘諸道具等の点検及び搬出作業。確認調査を終了。

5月20日～7月24日　収蔵庫にて出土遺物の整理及び事業報告書作成作業。

2　緊急発掘調査

緊急発掘調査は昭和63年7月18日から10月31日まで実施した。

7月18日（月）　緊急発掘調査に着手。発掘諸道具等の搬入。作業員への諸注意・伝達。藪の伐採作業。

7月19日（火）　藪の伐採作業。

7月20日（水）　グリッドの設定。D－15・16区の表土剥ぎ。

7月21日（木）　D－11・12、D－7・8区の表土剥ぎ。

7月22日（金）　D－15・16区第2層までの掘り下げ。

7月25日（月）　D－15・16区第5層までの掘り下げ。

7月28日（木）　D－15・16区第5層まで、D－7・8区第6層までの掘り下げ。

7月29日（金）　D－11・12区溝の確認。D－7・8区第6層掘り下げ。弥生式土器片と磨製石鏃出土。

8月1日（月）　D－7・8区第6～7層掘り下げ。弥生時代中期の土器片出土。

8月2日（火）　D－7・8区第6～7層掘り下げ。遺物出土状況平板実測。

8月3日（水）　D－7・8区に第7層上部で溝状遺構を確認。D－11・12区拡張。

8月4日（木）　D－7・8区の溝検出作業。溝内より大形甕形土器片出土。D－11・12区表土剥ぎ。

8月5日（金）　D－11・12区、D－15・16区表土剥ぎ。

8月8日（月）　D－7・8区に第8層上部で2号溝確認。D－15・16区第6層掘り下げ。弥生式土器片出土。町文化財保護審議会委員現地研修。

8月9日（火）　D－7・8区2号溝検出作業。D－11・12区に第5層上面で3、4号溝確認。

8月10日（水）　D－7・8区2号溝検出作業。仮BMNo.1のレベル測定(3,665m)。

8月11日（木）　D－7・8区2号溝検出作業。

8月16日（火）　D－7・8区溝清掃、写真撮影。D－11・12区の溝検出作業。

8月17日（水）　D－11・12区の溝検出作業。5号溝を確認。

8月19日（金）　D－12区第6～7層掘り下げ。土器片出土。

8月23日（火）　D－11区5号溝検出作業。

8月24日（水）　D－11区5号溝検出作業。D－12区第6～7層掘り下げ。第D－15、16区遺物出土状況平板実測。

8月25日（木）　D－11区5号溝検出作業。D－15区表土～第7層までの掘り下げ。

8月26日（金）　D－11区5号溝の清掃、写真撮影。D－12区第7～8層掘り下げ。

8月29日（月）　D－7・8区2号溝1／20実測。D－11・12区実測準備。D－14～16区掘り下げ、遺物出土状況平板実測。

8月30日（火）　D－11・12区2号溝1／20実測。D－14～16区第6～7層掘り下げ。

8月31日（水）　D－14区第6～7層掘り下げ。D－16・17区掘り下げ。

9月1日（木）　D－7・8区の排土除去。D－11区第6～7層掘り下げ。D－14～16区平板実測。

9月2日（金）　D－7・8区の排土除去。D－14～16区第7～8層掘り下げ。D－11区第5～7層掘り下げ。

9月6日（火）　D－7・8区の排土除去。D－11・12区第5～7層掘り下げ。D－14～16区第8層掘り下げ。

9月7日（水）　D－7・8区の排土除去。D－11・12区第5～7層掘り下げ。D－14～16区第8層掘り下げ。

9月8日（木）　D－11・12区第5～8層掘り下げ。D－14区第8層掘り下げ。

9月9日（金）　C－7・8区排土除去。D－14区第8層掘り下げ。

9月12日（月）　C－7・8区表土～第6層掘り下げ。

9月13日（火）　C－7・8区第6～8層掘り下げ。1、2号溝検出。D－10、14区排土除去。

9月14日（水）　C－7・8区1、2号溝検出及び平板実測。D－14区排土除去。

9月16日（金）　C、D－7・8区1、2号溝の実測。C、D－10、D－13、14区表土剥ぎ。

9月19日（月）　C、D－9、10区表土剥ぎ。D－13、14区第5～6層掘り下げ。

9月20日（火）　C、D－9、10、13、14区第5～6層掘り下げ。

9月22日（水）　C、D－9、10、13、14区第6～8層掘り下げ。

9月26日（月）　D－13、14区第6～8層掘り下げ、C、D－9、10区表土剥ぎ。
9月27日（火）　D－6、9、10区表土剥ぎ。D－13、14区深掘り。土層写真撮影。
9月28日（水）　D－6区表土～第7層掘り下げ。D－9、10区表土～第5層掘り下げ。
9月29日（木）　D－6区第7層掘り下げ。D－9、10区第6～7層掘り下げ。D－19、20区内濠掘り下げ。
9月30日（金）　D－19、20区内濠掘り下げ。土層実測。
10月3日（月）　D－19、20区内濠掘り下げ。D－21区表土～第5層掘り下げ。
10月4日（火）　D－23～26区表土～第2層掘り下げ。C、D－9、10区平板実測。
10月5日（水）　D－23～26区排土処理及び表土剥ぎ。D－26、27区表土剥ぎ。D－19、20区内濠掘り下げ。
10月6日（木）　C、D－27、28、30～34区表土剥ぎ。道路部分は破壊されている。C－35、36区塚部法面伐採作業。
10月7日（金）　C－36区伐採作業。D－18区土塁及び西外濠掘り下げ。C－30～35区道路部分掘り下げ。B，C－38～40区トレンチ設定。
10月11日（火）　C、D－6～15区機械力による表土除去。
10月12日（水）　D－18、19区表土剥ぎ。D－19、20区内濠掘り下げ。
10月13日（木）　C、D－22～35区遺構検出作業。D－19、20区内濠土層実測。
10月14日（金）　C、D－22～35区遺構検出作業。C－17、18区外濠掘り下げ。
10月17日（月）　C－17、18区外濠掘り下げ。
10月18日（火）　C－17、18区外濠掘り下げ。
10月19日（水）　C－17、18区外濠掘り下げ及び土層実測。
10月20日（木）　D－22～35区遺構検出作業。C、D－22、23区古道及びピットを確認。
10月21日（金）　D－22～35区遺構検出作業。26、27区ピットを確認。
10月24日（月）　C、D－28区溝を確認。土層実測。濠部分の埋め戻し。C－22～27区。土層実測用深掘り作業。C－34区大形の掘り込みを確認。用地外に延びる。
10月25日（火）　C、D－28区溝の掘り下げ及び実測。土層実測。濠部分の埋め戻し。
10月26日（水）　C－26、27区ピットの検出作業及び実測。C、D－29区溝を確認。
10月27日（木）　C、D－29区溝の実測。C－28、29区土層実測。濠部分の埋め戻し。
10月28日（金）　土層実測。城跡周辺部の実測。濠部分の埋め戻し。
10月31日（月）　発掘諸道具等の点検、搬出。発掘調査を終了。

昭和62年11月1日（火）より県教育庁文化課重富収蔵庫において整理作業及び報告書作成作業を行った。

第２章　遺跡の位置及び環境

第１節　位置と地形

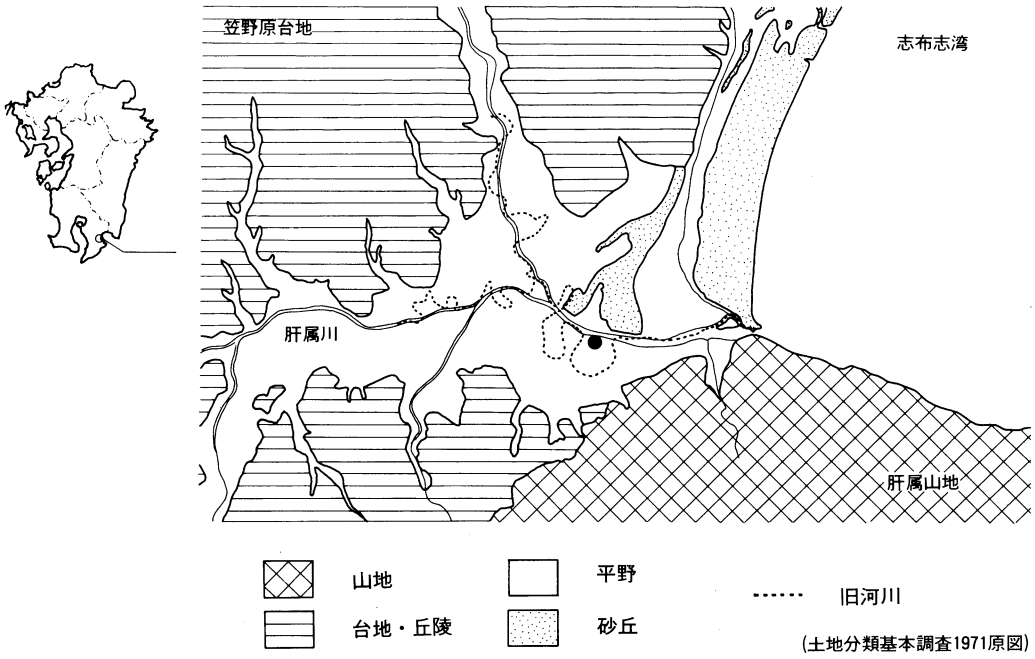
下伊倉遺跡及び下伊倉城跡は、肝属郡東串良町新川西下伊倉に所在する。

大隅半島のほぼ中央に位置する東串良町は、鹿屋市の東にあり、北に大崎町、西に串良町、南側は高山町に接し、東は志布志湾に面している。

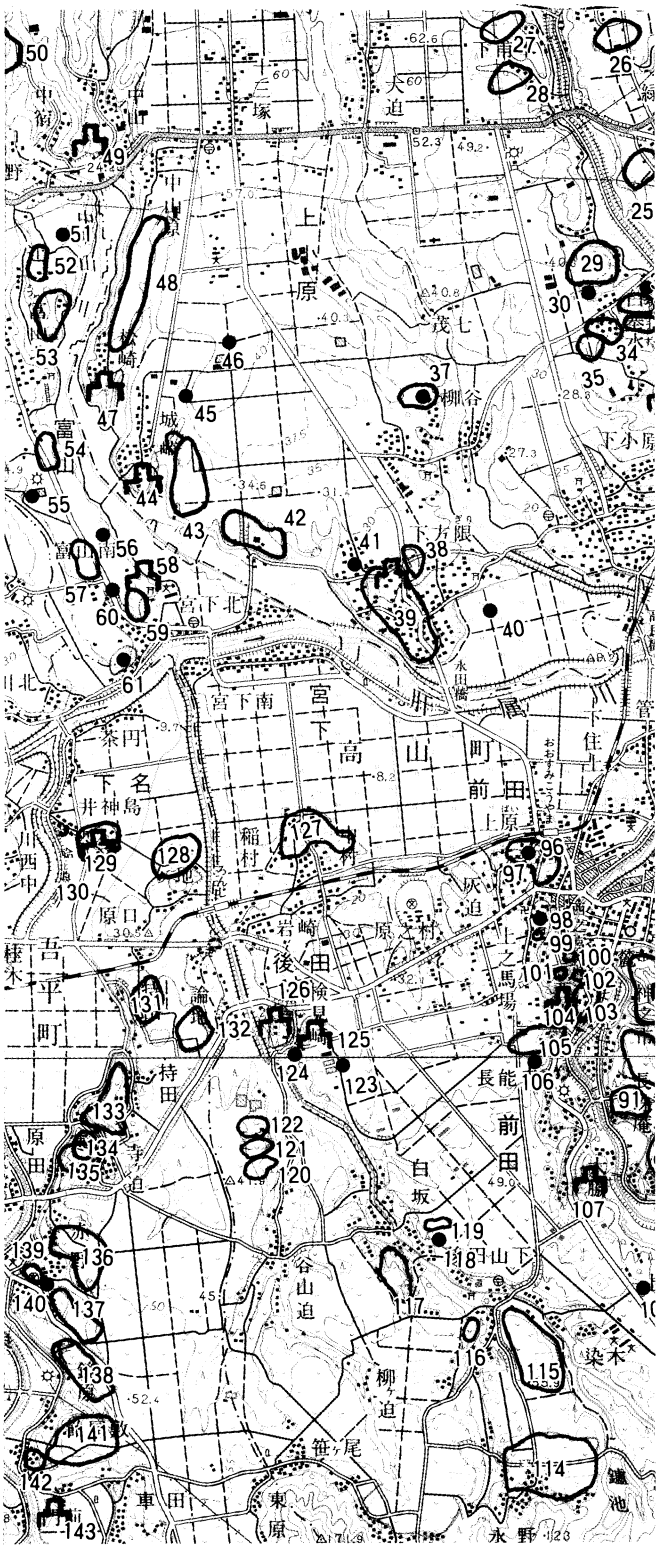
遺跡は東串良町と高山町の境界付近に位置し、遺跡の北側には肝属川が東流している。肝属川は高隈山地の御岳に源を発し、姶良川・高山川・串良川の支流と合流し、蛇行しながら東流している。そして志布志湾へと注ぎ、その流域には広大な肝属平野が形成されている。蛇行していた河川跡は現在もなお町界となり往時がしのばれ、下伊倉付近も大きく蛇行していた旧河川に囲まれた部分である。

遺跡付近は肝属川による自然堤防であり、下伊倉、川西、池之園等の集落はこの上に営まれている。遺跡周辺の地形は、北側には永吉台地と、串良川をはさみ笠之原台地が広がり、南側には肝属山地とその西側に新富台地がある。遺跡のすぐ北側には標高５～７ｍの旧期砂丘が北方向に伸び、その部分に集落が営まれ、古くは唐仁古墳群も存在している。また肝属川河口から北の志布志湾岸には新期砂丘が形成されている。

なお、下伊倉遺跡及び下伊倉城跡の標高は約３～４ｍであり、肝属川河口より約3.4kmの距離に所在している。



第１図　遺跡の位置と地形


中
塚
大
迫
上
原
茂七
柳谷
城
富
下方限
宮下北
宮下南
高
山
町
前
田
上原
稲村
岩崎
後田
検見
長能
前
田
白
坂
谷山迫
柳
迫
笹尾
東
原
永野
染木
鑪池
車田
茶円
名
下神
井
原口
吾
平
町
持
田
寺
迫
原
田
上之馬場
灰
迫
住
下
管
下小房

第２図

国土地理院発行　5万分の1地図使用

第２図　遺跡周辺の遺跡と中世城館跡

第２節　遺跡周辺の遺跡と歴史的環境

旧石器時代の遺跡は、東串良町・串良町・高山町ではまだ発見されていない。大隈半島中部地区においては隆帯文が出土した伊敷遺跡が知られるのみで、これまで明確な石器等の出土は知られていなかったが、最近鹿屋市榎崎Ａ遺跡で組石刃核・組石刃(注)が検出されている。

縄文時代の遺跡は、笠野原台地末端に位置し、早期石坂式が出土した古園遺跡（23）や、縄文後期の富ヶ前遺跡（26）があり、また境川上流に市来式土器や指宿式土器を出土する瀬戸宇字Ａ・Ｂ遺跡（111・112）や、その中流域に若干の遺跡が知られている。

弥生時代になると、遺跡数が増大し、多くの遺跡が存在している。そのうち、花牟礼遺跡（83）は、昭和24年東大の駒井和愛博士・八幡一郎氏等によって発掘調査が行われ、県下で初めて住居跡が検出された遺跡として研究史上著名な遺跡である。また、吉ケ崎遺跡（42）は、昭和52年に確認調査が実施され、２基の住居跡が重複して検出された。１号住居は火災を受けたもので、床面に密着した状態で甕形土器や壺形土器の完形土器が８点と磨製石斧２点、磨製石鏃３点が出土した。甕形土器は全て充実した脚台を有し、口縁部は逆Ｌ字状に外反し端部はわずかに凹むものの他に、端部をまるく納めるものもある。胴部上位に、三角突帯を二条廻らすものや、三条あるもの、あるいは三角突帯が付かないものもある。壺形土器は膨む胴部で、頚部はしまり大きく外反する口縁部にヘラによる暗文が施されたものや、長胴気味のあまり張らない胴部で、頚部がやや長く、口縁部は垂れ下がり気味に外反するものがある。これらのものは山ノ口式に含まれている。その他多くの遺跡は未調査であり、性格等は不明に近く、遺物が採集されているのみである。採集資料のなかには、下伊倉城跡内の完形壺形土器もある。

古墳時代になると、旧期砂丘上には前方後円墳６基を含む、総計132基からなる唐仁古墳群（９）が形成される。その中の１号大塚古墳は柄鏡式の前方後円墳であり、全長約185ｍと本県最大のもので竪穴石室内には凝灰岩製の舟形石棺が置かれている。昭和９年国指定史跡となっている。これと肝属川を隔てている塚崎古墳群（78）は、前方後円墳４基、円墳39基が現存しているが実際はもっと多かったと思われる。この他にも多くの墳丘を持つ古墳群が所在している。また、岡崎古墳群（21）の４号墳は、昭和60年調査が行われ、木棺と推定された主体部直上から壺１点と高坏10点が出土し、さらに周溝内に竪穴部を設けた地下式横穴墓が３基確認されている。また、上古原古墳群では古い樽型瓮が出土している。

歴史時代になると、肝付氏の居城である高山城（75）の他、下伊倉付近には曲之城（６）、堀込城（11）、別府ヶ城（12）、波見城（64）、和田城（67）など多くの中世城跡が存在している。特に、高山城は昭和22年国指定を受けているもので、城の規模は大きく、遺構の残存度も良好である。

注）鹿屋市榎崎Ａ遺跡
　　昭和63年４月から鹿児島県教育委員会において発掘調査を実施中である。

第１表　　遺跡周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	地形	時期	遺物等	備考
1	下伊倉 下伊倉城跡	東串良町新川西下伊倉	微高地	弥生・中生		本報告
2	舟塚	東串良町川東舟塚	沖積地	弥生中期	弥生土器・打製磨製石器	
3	安留	〃　〃安留	〃	〃 後期	〃	
4	役所	〃　〃役所	〃	〃 中期	甕形高坏等	
5	三十石	〃　〃三十石		弥生・古墳	成川式土器	
7	古市	〃		弥生・古墳	土師．奈良平安	
8	新川西	〃　新川西麦塚	沖積地	弥生	弥生土器	
9	唐仁古墳群	〃　川西	〃	古墳		地名表に弥生中期の麦塚遺跡がある。
13	堅田	串良町上小原岡崎堅田	〃	弥生	成川式	
16	宮ノ下	〃　〃　有里宮ノ下	〃	〃	石斧	
19	小塚	〃　〃　岡崎小塚		古墳	地下式横穴	
20	岡崎の上	〃上小原有里岡崎の上	台地	弥生	弥生土器	
21	岡崎古墳群	〃　有里岡崎	台地末端	古墳		
22	北田ノ上古墳	〃　〃　北田ノ上	〃	古墳		
23	古園	〃　岡崎古園	台地	縄文・弥生	石坂式	
24	上ノ馬場	〃　〃　上ノ馬場	〃	古墳	土師．成川式	
25	古柵	〃　〃　古柵	〃	弥生・古墳		
26	富ケ尾前	〃　有里富ケ尾	〃	縄・弥・古	縄文後期土器．土師	
27	牧原	〃　〃　牧原	〃	弥生・古墳		
28	平野上	〃　下小原平野上	〃	弥生		
29	白塞水上	〃　〃　白塞水上	〃	古墳		
30	フゾ山	〃　〃　白塞水	〃	古墳	石棺・直刀	地下式横穴
31	白塞水古墳群	〃　〃　〃	〃	古墳		円墳１基 地下式横穴１基
32	白塞水	〃　〃　〃	〃	古墳		
33	鍋池ノ上	〃　〃　鍋池ノ上	〃	弥生		
34	後藤迫	〃　〃　後藤迫	〃	弥生		
35	村迫	〃　〃　村迫	〃	弥生		
37	塚ノ下古墳群	〃　上小原塚ノ下	〃	古墳		円墳４基 前方後円墳（？）1基
38	銭亀岡	〃　〃　銭亀岡	〃	弥生	弥生土器	
39	上小原古墳群	〃　〃　下方限	〃	古墳	古式須恵器（楠形瓶等）土師・鉄器	前方後円墳１基．円墳21基・地下式横穴数基
40	栄田	〃　上小原栄田	低地	弥生	磨製石剣	
41	神ノ園	〃　〃　上ノ園	台地	弥生	山ノ口式．須玖式	
42	吉ケ崎	〃　〃　吉ケ崎	〃	弥生・古墳	住居跡．甕・壺・磨製石鏃	円墳１基
43	上小牧	〃　〃　上小牧	〃	縄・弥・古	縄早(条痕文系土器)	
45	アマガ塚古墳群	〃　〃　久保	〃	古墳		円墳４基
46	供養塚古墳群	串良町上小原平床	〃	古墳		前方後円墳（？）1基 円墳２基
48	松崎	〃　〃　松崎	〃	弥生		
50	上別府	〃　〃　上別府	〃	弥生		
52	辻古墳群	高山町富山辻	〃	古墳	古墳群	
54	今市	〃　〃　今市	〃	古墳	舟形出土品不明	
55	大塚原	〃　〃　大塚原	〃	弥生	打製石斧	
56	今市牧	〃　〃　今市牧	〃	弥生	弥生土器．石斧	
57	辺塚古墳群	〃　〃　辺塚	〃	古墳	古墳群	
59	宮ノ上　〃	〃　宮下宮ノ上	〃	古墳	〃	
	イヤの前　〃	〃　〃　イヤの前	〃	古墳	古墳	
60	前畑	〃　富山前畑	〃	弥生	弥生土器．石斧	
61	天神原	〃　宮下天神原	〃	弥生・古墳	弥生土器．石斧	
62	波見公園(裏)	〃　波見公園裏	丘陵	弥生	磨製石斧	
65	長谷	〃　〃　荒瀬長谷	〃	古墳	土師	
66	平後園	〃　〃　平後園	山腹	弥生	須恵器・磨製・打製石斧	
68	横溝	〃　野崎和田横溝	山麓	弥生中期	弥生土器・打製石斧	
69	津曲	〃　〃　津曲	沖積地	弥生	弥生大型壺	
70	西大園	〃　〃　西大園	台地末端	弥生	弥生土器	
72	上原	〃　〃　上原	〃	弥生中期	弥生土器・磨製石斧	Ｓ33住居跡発見
73	安野	〃　〃　安野	丘陵	弥生	弥生土器・磨製・打製石斧	
74	安田	〃　前田本城安田	山腹	弥生	弥生土器・磨製石斧	

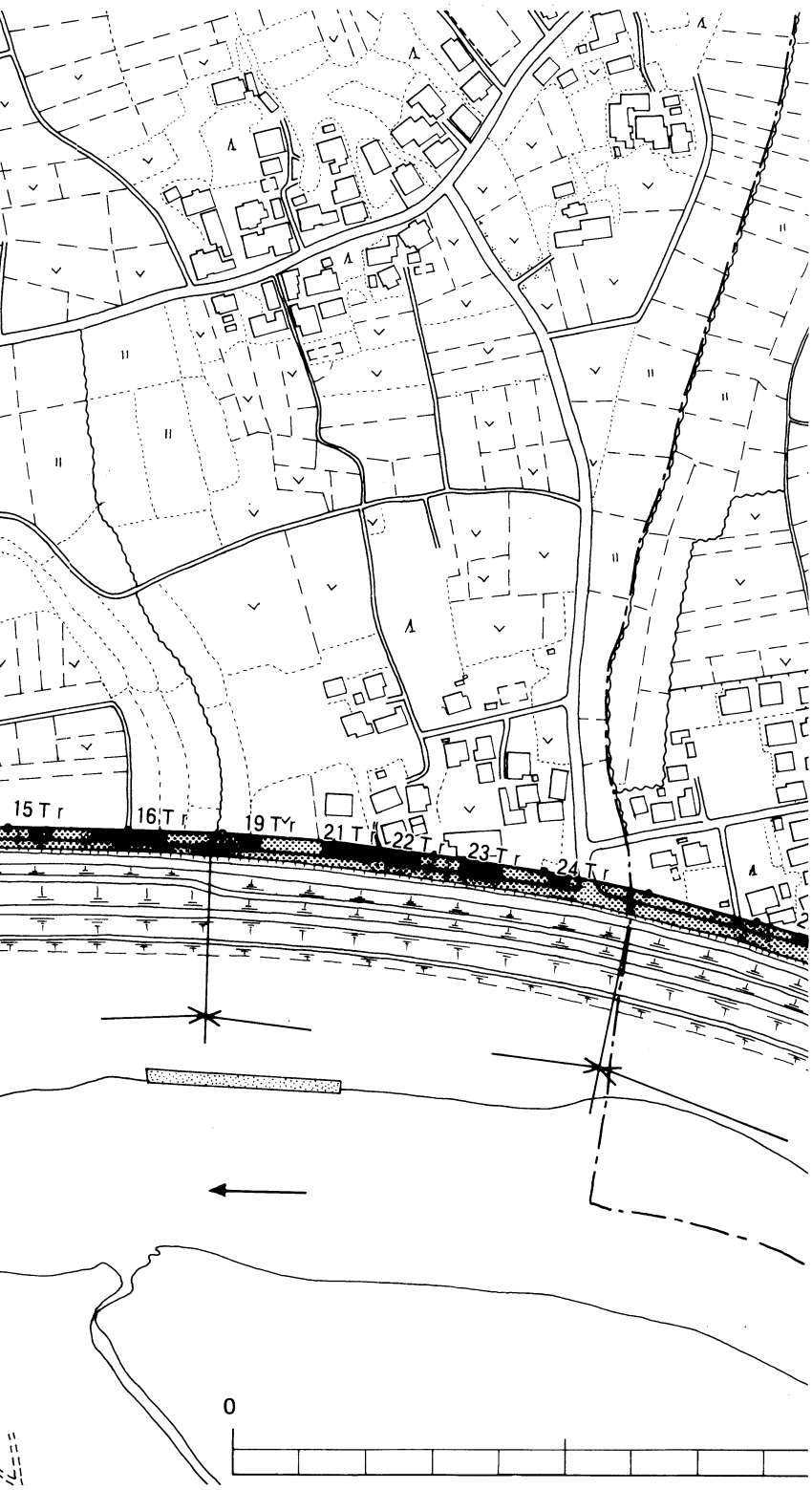
番号	遺跡名	所在地	地形	時期	遺物等	備考
78	塚崎古墳群	高山町野崎塚崎	台地末端	古墳	土師器	
79	塚崎	〃 〃 塚原	〃	弥生・古墳		
80	原	〃 〃 塚崎原	〃	弥生		
81	堀込	〃 〃 塚崎堀込	〃	弥生・古墳	土師器	
83	花牟礼	〃 新富花牟礼	〃	弥生	弥生中期・付近に円墳	住居跡(S24調査)
84	芋迫	〃 〃 〃 芋迫	〃	弥生・古墳	弥生土器・磨製石斧 土師器	
85	大戸原	〃 〃大戸原	〃	〃		S55調査
86	上永山	〃 〃上永山	〃	弥生	弥生土器・磨製石器	
87	横間土坑	〃 〃横間	〃	弥生・古墳		S24,29,30,31,36に調査 東横間,横間,西横間遺跡を含む
88	丸岡古墳群	〃 〃米山寺墓地	〃	古墳	古墳群	
90	川路	〃 〃川路	台地	弥生・古墳	土師	
91	長珠庵	〃 〃長珠庵	〃	古墳	〃	
92	中村園	〃 〃中村園	〃	弥生・古墳		
93	下永山	〃 〃永山	〃	〃 〃		
94	下住	〃 前田下住	沖積地	弥生	弥生土器	
95	内園	高山町前田三反内園	〃	弥生		
96	上ノ原遺跡	〃 〃上ノ原	台地末端	〃	地下式横穴	
97	上ノ原	〃 〃 〃		弥生・古墳		
98	前田下西	〃 〃下西方			弥生式横穴	
100	上西方	〃 〃 〃	台地末端	弥生・古墳		
101	堂園の上	〃 〃堂園の上	台地	弥生	弥生土器・石器	
102	前田西町 西宮神社	〃 〃西宮神社		〃	弥生式横穴	
103	軍原古墳群	〃 〃上大脇軍原	台地末端	古墳		
105	訪諏ノ上	〃 〃上西方訪諏ノ上	〃	弥生・古墳	弥生土器	
106	寺ノ上	〃 〃 〃 寺ノ上	〃	〃	〃 . 土師	
108	滝ノ上	〃 〃滝ノ上	台地	〃	弥生土器.磨製石斧.土師 須恵器	
109	本城入口	〃 〃本城入口	〃	弥生	弥生土器	
110	瀬戸宇治原	〃 後田瀬戸宇治原	〃	〃	弥生土器.打製石斧	
111	瀬戸宇治A	〃 〃 〃宇治	〃	縄文	市来式.指宿式土器 石匙.打製石斧	
112	〃 B	〃 〃 〃	〃	縄文・弥生	市来式.指宿式土器 磨製石鏃	
113	中原	〃 〃中原	山麓	弥生	弥生土器	
114	永野原	〃 〃永野原	台地	弥生・古墳	弥生土器.石包丁.石鏃.石鏃 磨製石斧.穀製庄具.鉢形土器	
115	山下	〃 〃山下	〃	〃 〃	土師	
116	道中原	〃 〃道中原	〃	縄・弥・古	〃	住居跡
117	瀬戸口原	〃 〃白坂瀬戸口原	〃	弥生・古墳	石包丁.石鏃(有茎磨製)	
118	山下ノ上	〃 〃山下ノ上	〃	縄文	石斧	
119	白坂	〃 〃白坂	〃	弥生	地下式横穴	
120	稲荷岡	〃 〃稲荷岡	〃	〃		
121	小牟田上	〃 〃小牟田上	〃	弥生・古墳	土師	
122	銭亀	〃 〃銭亀	〃	弥生		
123	検見崎	〃 〃検見崎	台地末端	古墳		
124	北後田古墳群	〃 〃稲村	〃	〃	かめ棺	
127	稲村.高塚	〃 〃稲村高塚	〃	弥生	弥生土器	
128	池山	吾平町下名論地池山	〃	縄文	塞ノ神式	
	池山古墳群	〃 論地池山	〃	弥生・古墳	成川式.土師	
129	井神島	〃 下名井神島	丘陵	弥生	弥生土器	
131	井牟田原	〃 麓井牟田原	台地	〃	成川式	
132	論地	〃 論地	〃	縄文・弥生	成川式	
133	霧島原	〃 麓霧島原	〃	弥生・古墳	成川式.須恵器.土師	
134	寺ケ迫古墳群	〃 〃寺ケ迫	〃	古墳		
135	三角原	吾平町麓三角原	〃	弥生・古墳	弥生土器.土師	
136	反田原	〃 〃反田原	〃	縄文・弥生	〃	
137	境原	〃 〃境原	〃	弥生・古墳	成川式土器.土師	
138	中尾	〃 上名中尾	〃	弥生・古墳	土師.須恵	
140	赤野原	〃 麓赤野原	〃	弥生	石斧	
141	鏡原上	〃 上名鏡原上	〃	〃	弥生土器.石斧	
142	鏡原	〃 〃 鏡原	〃	縄・弥・古	市来式.阿高式.成川式	
144	西山ノ上	高山町波見西山ノ上	〃	奈良～平安	須恵質風字硯	高山町歴民館保管

第２表　　遺跡周辺の中世城館跡等

番号	遺跡名	所在地	地形	時期	遺物等	備考
6	曲之城跡	東串良町新川西字曲之城	平地			
10	笹塚城跡	〃　〃　字笹塚	〃			
11	堀込城跡	〃　〃　字崩尾	〃			
12	別府ケ城跡	〃　小字別府ケ城	〃			
14	肝付氏古城跡	串良町岡崎字西ノ丸	〃	平安末期～		(別)西ノ丸居館
15	肝付氏古城跡	〃　下小原字園田	〃	戦国時代～永禄９年		(別)城ノ園
17	串良城跡	〃　岡崎字麓	台地端	文明２年～		(別)鶴亀城
18	地頭館仮屋跡	〃　〃　2088	台地下			町指定
22	岡崎城跡	〃　〃　字城ケ鼻	台地端	正平９年～応永18年	堀・空堀・土塁	(別)城ケ鼻
23	中村城跡	〃　〃　字竹之内	丘陵	南北朝	空堀	
36	白寒水城跡	〃　下小原字白寒水	台地端	南北朝初期～戦国期		
44	小原城跡	〃　上小原字城ケ崎	〃	南北朝初期		(別)城ケ崎城
47	松崎城跡	〃　〃　字松崎	〃	南北朝初期~		
49	中山城跡	〃　〃　字中山	〃	~南北朝初期		
53	富山城跡	高山町富山字堂迫	丘陵	弘安３年～天正８年		
58	宮下城跡	〃　宮下字堀内	丘陵平地	南北朝時代		
63	波見の陣跡	〃　波見字牟礼	山麓	弘安６年～永禄年間		
64	波見城跡	〃　〃　字轟	〃	弘安の頃～永禄時代		
67	和田城跡	〃　野崎字和田	〃	建武２年～永禄９年	肝属氏出城の一本丸，二の丸馬乗，堀割等現存	
71	天道山塁跡	〃　〃　字天道山	丘陵	戦国中期～天正２年		
75	高山城跡	〃　新富字本城	山頂丘陵	正平９年~観応２年一永禄９年	本丸，二の丸，大手門跡馬乗，茶湯跡	(別)肝付城，山之城本城，国指定
82	塚崎城跡	〃　野崎字塚崎	平地	南北朝～永禄年間		
89	弓張城跡	〃　新富字城山他	丘陵	正平５年～文禄９年		(別)麓ノ城
104	合戦田の陣	〃　前田字上西方	〃	永正３年～天正８年		(別)古城
107	御幣薗城跡	〃　〃　字大脇	〃	南北朝時代		(別)大脇城
125	堂園の陣	〃　〃　字長能寺	〃	永正３年～天正８年		
126	検見崎城跡	〃　後田字検見崎	平地	長元９年～永禄９年	空堀	
130	井上城跡	吾平町下名字井神島他	丘陵	正平年間～文明年間	〃．土塁	(別)末次城
143	松下城跡	〃　上名字西栫他	〃	戦国時代～江戸時代	〃　〃	発掘有
51	薬師寺跡	高山町富山辻				
76	本城磨崖仏	〃　本城	断崖		石仏２体判明	道隆寺址の西崖下
77	道隆寺跡	〃　〃	小丘		楚石，石燈籠磨崖仏等	(史)(町)S46.2.25
99	盛光寺跡	〃　前田上西方	台地末端			
139	赤野板碑	吾平町上名赤野			五輪塔	

参考文献
・「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」鹿児島県教育委員会　1983年
・「花牟礼（大戸原）遺跡」高山町教育委員会　1981年
・「鹿児島県市町村別遺跡地名表」鹿児島県教育委員会　1985年
・「岡崎４号墳・１号地下式横穴」串良町教育委員会　1986年
・「鹿児島県の中世城館跡」鹿児島県教育委員会　1987年
・「土地分類基本調査（鹿屋・志布志）」鹿児島県　1972年
・「東串良郷土史」東串良町
・「高山町郷土史」高山町

4 Tr
6 Tr
9 Tr
12 Tr
14 Tr



第３図　遺跡周辺の地形及び確認トレンチ配置図

37T.L
20m

第3章　調 査 の 概 要

第1節　確認調査の概要

1　調査の概要

確認調査は、濠によって囲まれた下伊倉城跡関係部分とその他の部分(埋蔵文化財包蔵地等)とに分け、さらに下記のように4地区に細分して調査を実施した。

第1地区　下伊倉城より東側の水田地帯。

第2地区　下伊倉城跡地区（外濠に囲まれた部分)。

第3地区　下伊倉城跡より西部のうち東串良町管内地区。

第4地区　下伊倉城跡より西部のうち高山町管内地区。

調査は2m×5mのトレンチを基本にしたが、調査対象地区（河川改修予定地区）内には波見川に隣接して東西に走る道路が北側にあるため、道路と平行になるように設定して掘り下げを行った。そのため、トレンチ幅が1.5mしかとれないものもあった。また状況に応じてトレンチの拡張を適宜行って調査を実施した。

トレンチの呼称は設定順位や位置等の煩雑を避けるため、畑地を一筆毎に東から番号を付して、トレンチを設定した畑地の番号を利用することにした。

調査の結果、第1地区においては、遺構及び遺物包含層は確認されなかった。また、水田に関する遺構も確認できなかった。第2地区においては、城跡に関する遺構（濠跡、土塁の基礎、柱穴等）が確認できた。第3地区においては、古墳時代に属する溝状遺構、弥生時代中期の遺物包含層が確認された。この地区は、遺跡地名表に掲載されている下伊倉遺跡に抱括されると考えられる。第4地区においては、沖積作用による堆積土で遺構及び遺物包含層は確認できなかった。

2　土　層

土層は第1地区、第2・3地区、第4地区でやや趣が異なっていた。

第1地区

第1層　表土で現耕作土である。

第2層　黄褐色粘質土層である。

第3層　暗青灰色粘質土層である。

第4層　明赤褐色土層で、上部の明赤褐色粘質土層（4a層）と下部のにぶい赤褐色砂質土層（4b層）とに細分できる。

第5層　黄褐色粘質土層である。

第6層　灰褐色粘質土層である。

第7層　暗灰色土層である。木の葉等の有機物を含む層と砂層とが互層をなしている。

第8層　灰白色砂層である。この層は透水層となっており、この地区での基盤層として取り扱った。

第２～３地区

第１層　表土で現耕作土である。第２地区では現耕作土（１ａ層）、城造成土（砂質で硬質）（１ｂ層）、城造成土（やや軟質）（１ｃ層）、黒色土（旧表土と考えられる）（１ｄ層）に細分できる。

第２層　茶褐色土層である。この層は第２地区のみで観察され他地区では削平されている。

第３層　灰赤褐色火山灰土層である。開聞岳噴出物の暗紫ゴラに対比できる。

第４層　黒色土層である。一部削平されているところがある。

第５層　暗赤褐色土層である。黒色土に赤点粒子を含む層で、場所により赤褐色を呈する部分がある。

第６層　黒色土層である。弥生時代の遺物を包含している。

第７層　暗灰褐色土層である。弥生時代の遺物を包含している。

第８層　黒色粘質土層である。

第９層　黄褐色土層である。上部の黄褐色粘質土層（９ａ層）と下部の明黄褐色砂質土層（９ｂ層）とに細分できる。この層は赤ホヤ火山灰に対比できる。

第10層　灰色粘質土層である。

第11層　灰褐色粘質土層である。

第12層　淡黄色土層である。上部の淡黄色粘土層（12ａ層）と下部の淡黄色軽石混土層（12ｂ層）とに細分できる。

第13層　灰褐色土層である。上部の明褐色砂礫層（13ａ層）と灰色砂礫層（13ｂ層）とに細分できる。

第14層　灰白色砂層である。この地区ではこの層を基盤層として取り扱った。

第４地区

この地区の土層は第２～３地区と色調はさほど変化はないものの、土の質は沖積作用による堆積ためか砂質の傾向にある。

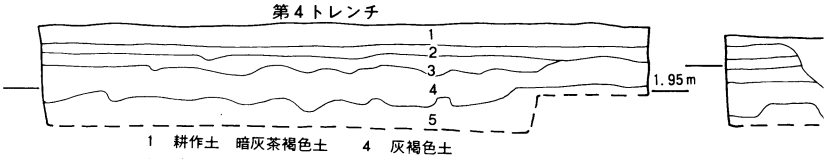
３　確認調査の結果

１　溝状遺構　第21－Ａ、Ｂトレンチにおいて、第５層に掘り込まれた溝状遺構が３本確認された。幅0.9～2.1ｍ、深さ約30㎝を測るものである。埋土中からの遺物の出土がなかったため時期が確定できないが古墳時代以降のものと考えられる。

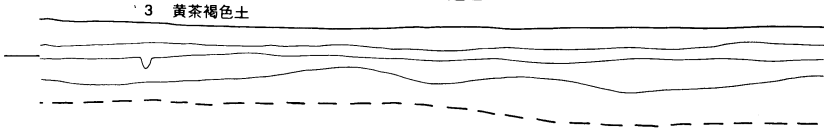
２　濠　跡　下伊倉城跡に伴うものである。内堀が第９、12及び16トレンチにおいて法面が確認された。第９及び12トレンチでは幅約17㎝を測る。深さは湧水のため確認できなかった。

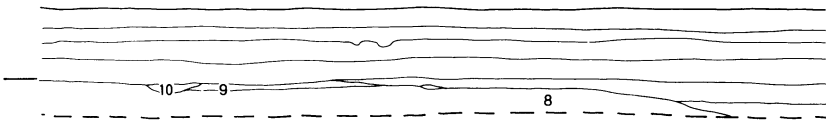
３　土　塁　下伊倉城に伴うものである。すでに調査対象区内の土塁は削平されてはいるが、第16トレンチで土塁の基礎と考えられるものが確認できた。

第４トレンチ

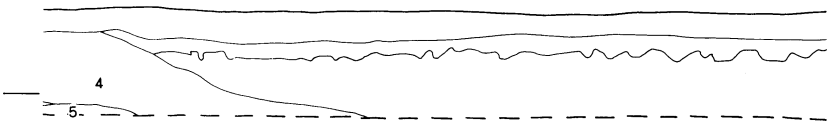


1　耕作土　暗灰茶褐色土
2　暗茶褐色土
3　黄茶褐色土
4　灰褐色土
5　明灰茶褐色土



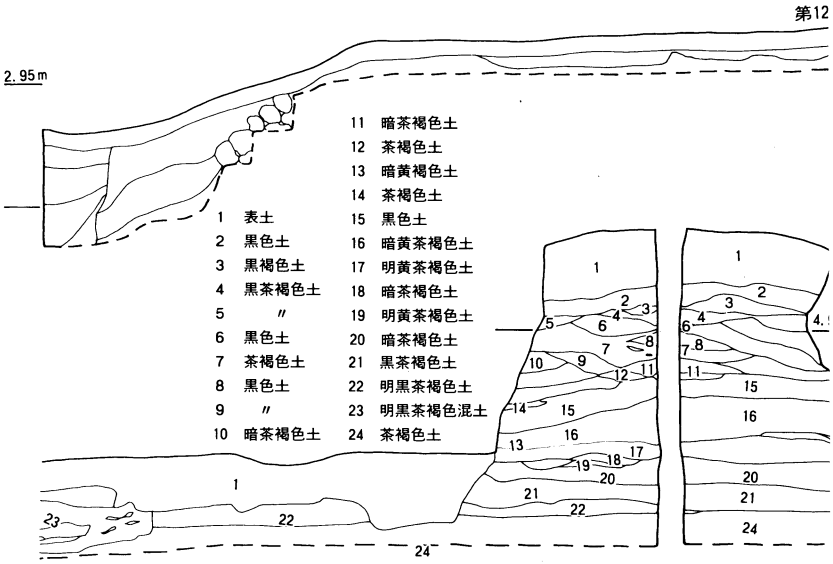


1　茶褐色土
2　灰茶褐色粘質土
3　灰褐色粘質土
4　灰褐色粘質土
5　黄褐色砂層
6　灰茶褐色粘質



1　茶褐色土
2　灰茶褐色粘質土
3　灰褐色粘質土
4　黄茶褐色砂
5　灰色グライ

第12



1　表土
2　黒色土
3　黒褐色土
4　黒茶褐色土
5　〃
6　黒色土
7　茶褐色土
8　黒色土
9　〃
10　暗茶褐色土
11　暗茶褐色土
12　茶褐色土
13　暗黄褐色土
14　茶褐色土
15　黒色土
16　暗黄茶褐色土
17　明黄茶褐色土
18　暗茶褐色土
19　明黄茶褐色土
20　暗茶褐色土
21　黒茶褐色土
22　明黒茶褐色土
23　明黒茶褐色混土
24　茶褐色土

第6～9トレンチ

1　茶褐色土
2　灰茶褐色粘質土
3　灰褐色粘質土
4a　茶褐色粘質土
4b　灰褐色やや砂質土
5　暗茶褐色砂層
6　灰茶褐色粘土
7　暗灰褐色有機質粘質土
8　灰色砂層

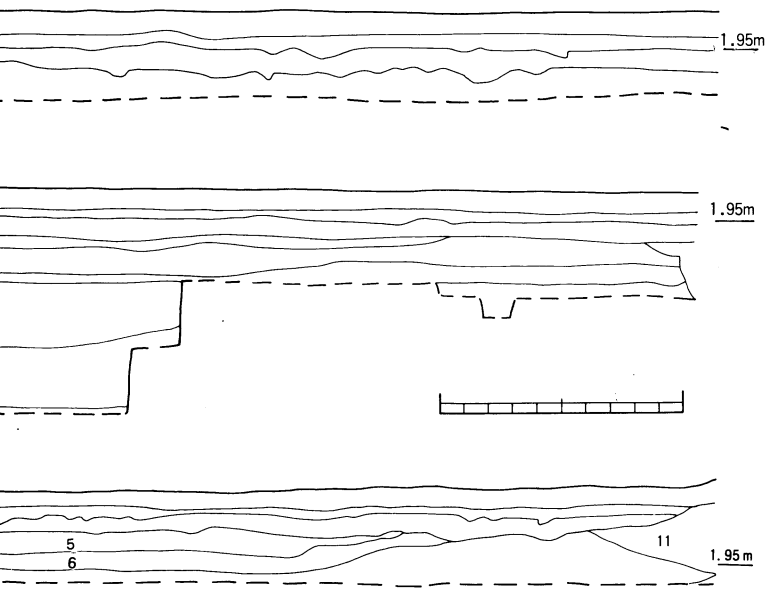
7　灰茶褐色
8　明茶褐色（粘質）
9　砂層
10　灰色グライ
11黄茶褐色砂

レンチ

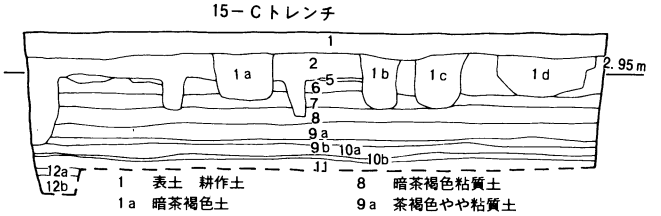
第14トレンチ

1a　表土
1d　黒褐色土
2　茶褐色土
3　灰褐色土
4　黒色土
5　黒褐色土
6a　黒色土
6b　暗茶褐色土
7　暗灰茶褐色土
8　暗茶褐色粘質土
9　黒褐色土
10　黄褐色土

第4図　確認調査士層実測図（1）

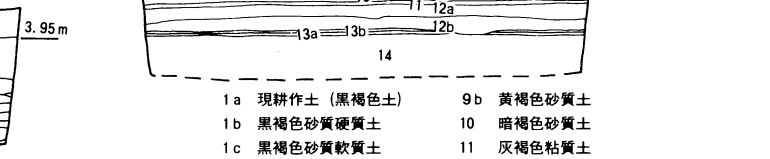


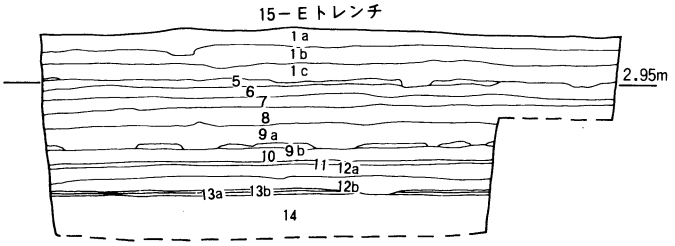
15－Ｃトレンチ



1	表土　耕作土	8	暗茶褐色粘質土
1a	暗茶褐色土	9a	茶褐色やや粘質土
1b	茶褐色土	9b	黄褐色砂質土
1c	茶褐色土	10a	暗褐色砂質土
1d	茶褐色土	10b	黄灰褐色粘質土
2		11	灰褐色粘質土
5	暗褐色赤点粒子混硬質土	12a	乳白色（粘質）土
6	黒色やや粘質土	12b	乳褐色砂礫土
7	暗灰茶褐色硬質土		

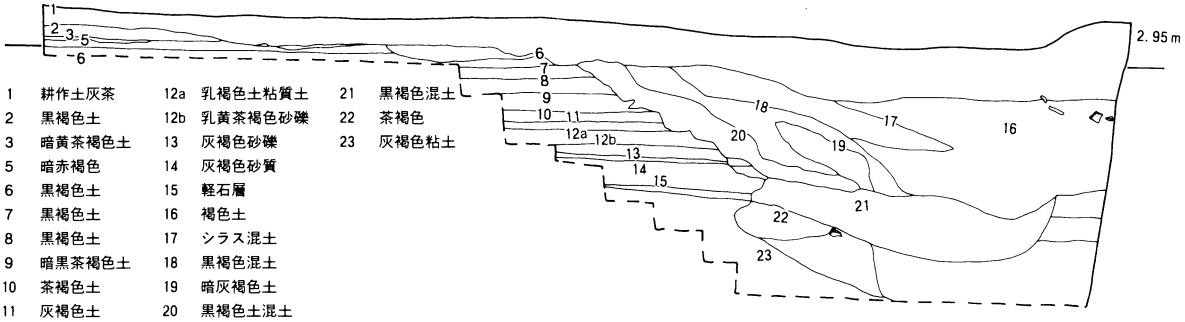
15－Ｅトレンチ





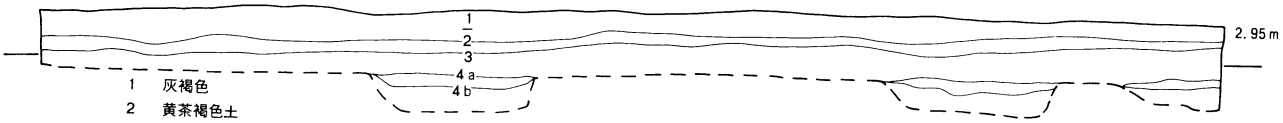
1a	現耕作土（黒褐色土）	9b	黄褐色砂質土
1b	黒褐色砂質硬質土	10	暗褐色砂質土
1c	黒褐色砂質軟質土	11	灰褐色粘質土
5	黒褐色赤点粒子混硬質土	12a	乳白色（粘質）土
6	黒色やや粘質土	12b	乳褐色砂礫土
7	暗灰茶褐色硬質土	13a	黄褐色粘質土
8	暗茶褐色粘質土	13b	灰褐色礫層
9a	茶褐色やや粘質土	14	灰色砂層

第16トレンチ



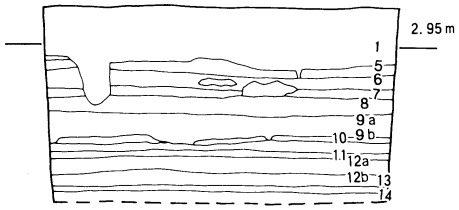
1 耕作土灰茶
2 黒褐色土
3 暗黄茶褐色土
5 暗赤褐色
6 黒褐色土
7 黒褐色土
8 黒褐色土
9 暗黒茶褐色土
10 茶褐色土
11 灰褐色土
12a 乳褐色土粘質土
12b 乳黄茶褐色砂礫
13 灰褐色砂礫
14 灰褐色砂質
15 軽石層
16 褐色土
17 シラス混土
18 黒褐色混土
19 暗灰褐色土
20 黒褐色土混土
21 黒褐色混土
22 茶褐色
23 灰褐色粘土

第21—A・B



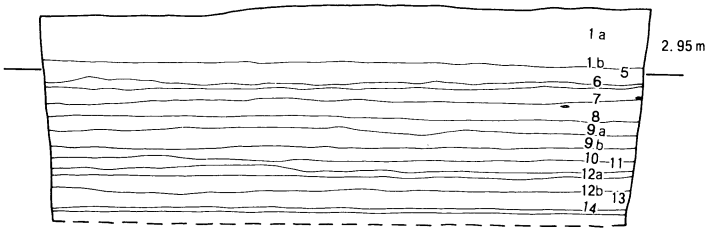
1 灰褐色
2 黄茶褐色土
3 暗黄茶褐色土
4a 暗茶褐色土
4b 黒褐色土

第21トレンチ



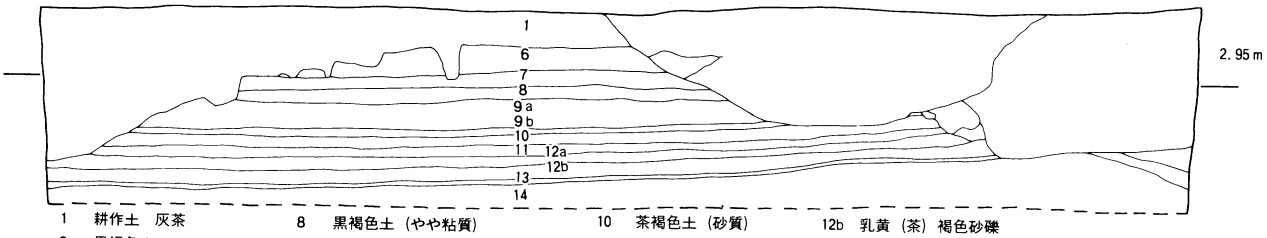
1 茶茶褐色（表土）
4 灰褐色硬質土
5 赤茶褐色硬質土（赤点粒子を多く含む）
6 黒色土やや硬質土
7 暗（黒）褐色土
8 暗黒褐色
9a 茶褐色土
9b 黄褐色砂質土
10 灰茶褐色粘質土
11 灰褐色粘質土
12a 乳白色粘質土
12b 乳褐色砂礫
13 褐色砂礫
14 灰褐色砂層

第22トレンチ



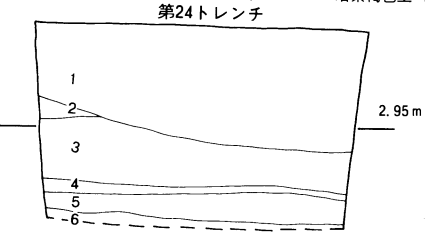
1a 現耕作土 灰茶
1b 旧耕作土 灰茶
5 暗赤褐色（赤点粒子を含む）
6 黒褐色土
7 黒褐色土（砂質 硬質）
8 黒褐色土（やや粘質）
9a 暗（黒）茶褐色（やや粘質）
9b 暗茶褐色土（砂質）
10 茶褐色土（やや砂質）
11 灰褐色土（粘質）
12a 乳褐色粘質土
12b 乳黄（茶）褐色砂礫
13 灰褐色砂礫
14 灰褐色砂質

第23トレンチ



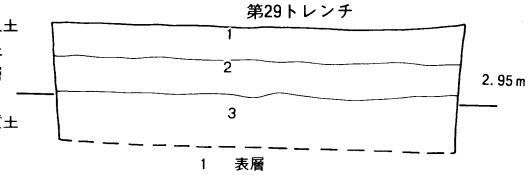
1 耕作土 灰茶
6 黒褐色土
7 黒褐色土（砂質 硬質）
8 黒褐色土（やや粘質）
9a 暗（黒）茶褐色（やや粘質）
9b 暗茶褐色土（砂質）
10 茶褐色土（砂質）
11 灰褐色土（やや砂質）
12a 乳褐色粘質土
12b 乳黄（茶）褐色砂礫
13 灰褐色砂礫
14 灰褐色砂質

第24トレンチ



1 覆土瓦礫混入土
2 茶褐色粘質土
3 暗茶褐色砂層
4 黒褐色土
5 暗茶褐色砂質土
6 灰色砂層

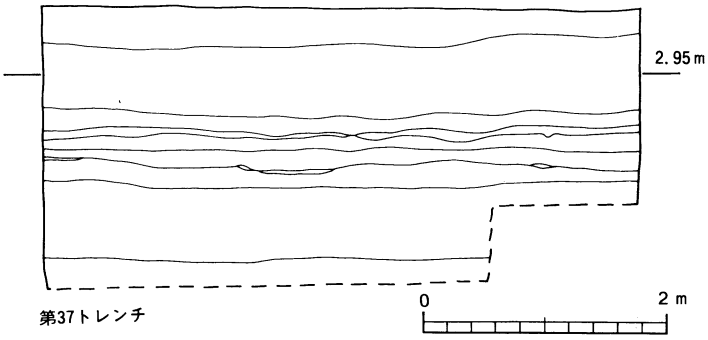
第29トレンチ



1 表層
2 暗黄茶褐色土
3 黄茶褐色土

0

第５図　確認調査士層実測図（２）



第６図　確認調査士層実測図（３）

４　柱　穴　　第14及び15－ｃトレンチにおいて、柱穴と考えられるピットが確認された。径が20～30cm、深さ20～30cmを測る。

５　塚

下伊倉城内にある塚（東串良町教育委員会により唐仁古墳群139号墳、指定外７号墳の標柱が立てられている。）は、人工によるものであることは確認できたが、時期については確認できなかった。

第２節　緊急発掘調査の概要

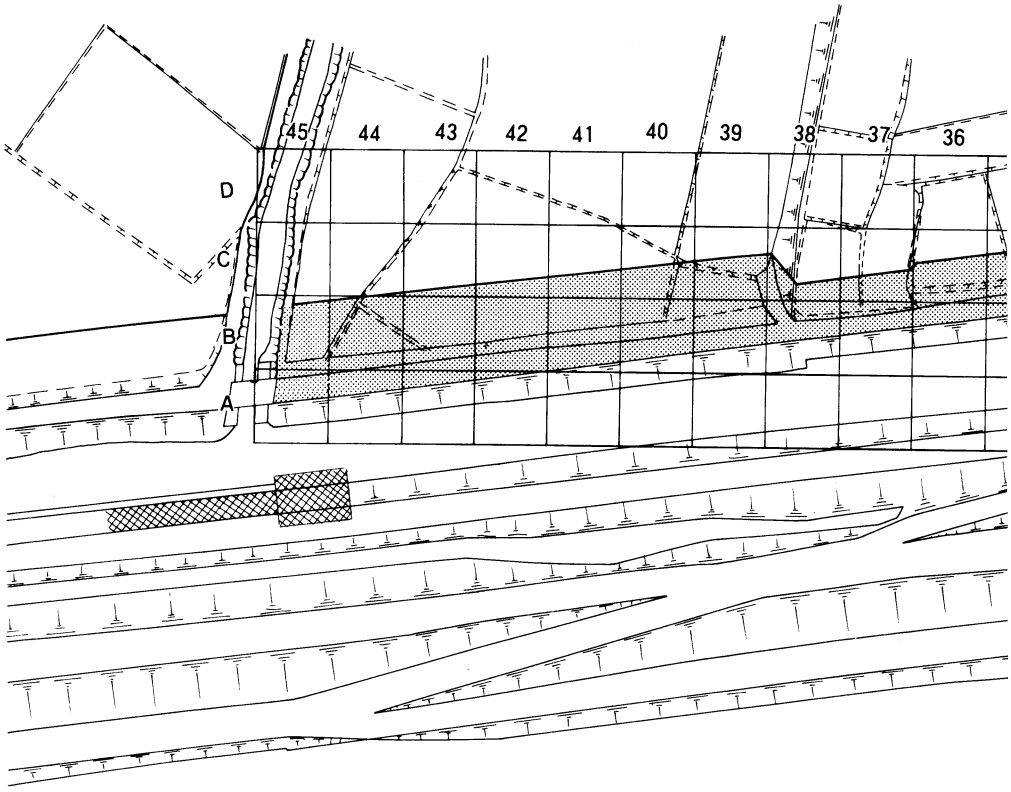
確認調査後、県文化課と河川課（鹿屋土木事務所）とで協議を行い緊急調査の対象となったのは、下伊倉城跡部分と弥生時代の遺物包含層が確認された地区（下伊倉遺跡）で新川西橋から高山町と東串良町との町境までの約450 mの改修工事予定地域である。

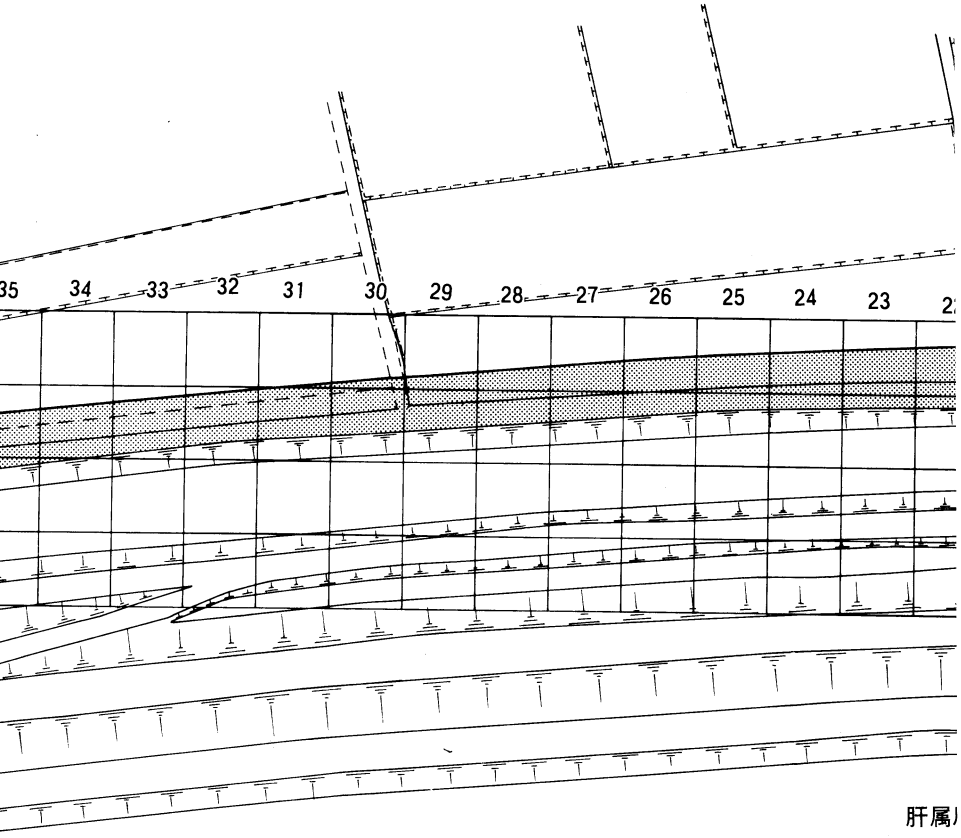
グリッドは、工事実施計画地域が大きくカーブしているため、任意に設定した。仮の基準点を下伊倉城内にある古石塔（Ｃ－18、19区）の東側２mのところに設定してグリッドを組んだ。

グリッドの基準線はＮ－23°－Ｅである。グリッドの呼称は北側からＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄとし、高山町との町境の西側から１、２、３、とし、Ａ－１区、Ｂ－２区と呼称することとした。

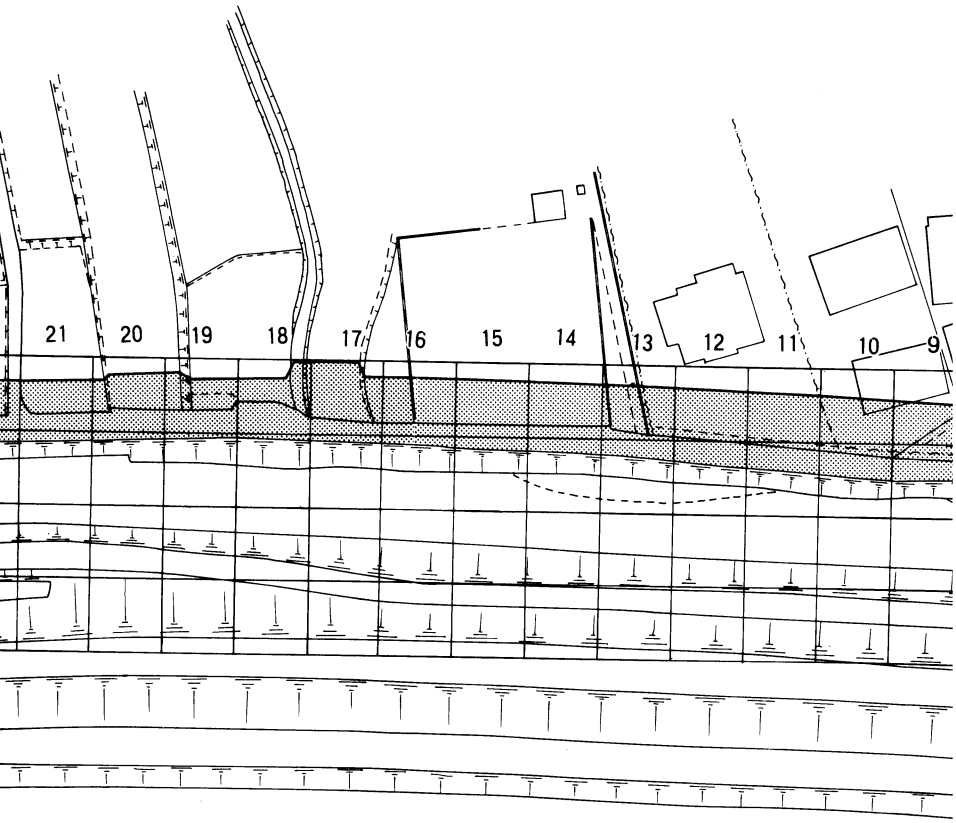
その結果、西地区のＣ、Ｄ－６～16区において第５層に堀り込まれた溝が３本、第７層に堀り込まれた溝が１本、第８層に堀り込まれた溝が１本と計５本の溝が検出され、第６～８層から弥生時代中期の土器片が出土した。東地区は下伊倉城跡にあたるところである。西側の内濠（Ｃ、Ｄ－17区）、外濠（Ｃ、Ｄ－19、20区）は現存しており、その深さは確認できたが、東側の濠（Ｂ、Ｃ－38、39区）は確認調査時と同様、水田開析のためか検出できなかった。土塁は、予定範囲内においてはすでに削平されていた。土塁の基礎と考えられる部分もＤ－12区で一部観察されたのみである。Ｂ、Ｃ－30～38区の道路部分はすでに道路建設の際に遺構面よりも下位まで削平されていた。しかし、Ｃ、Ｄ－29、28区からはそれぞれ溝が１本ずつ計２本検出された。Ｃ、Ｄ－26、27及び23区からはピットが検出されたものの建物跡の想定はできなかった。Ｃ、Ｄ－23区では古道跡が１本、Ｃ－34区では井戸状遺構が１ヵ所検出された。Ｂ～Ｄ－35、36区の塚は土層観察等により古墳時代前後に構築されたものと推定される。

城跡の調査は、その全体からみれば確認調査的なものとなったため、その全体像をつかむまでにはいたらなかった。

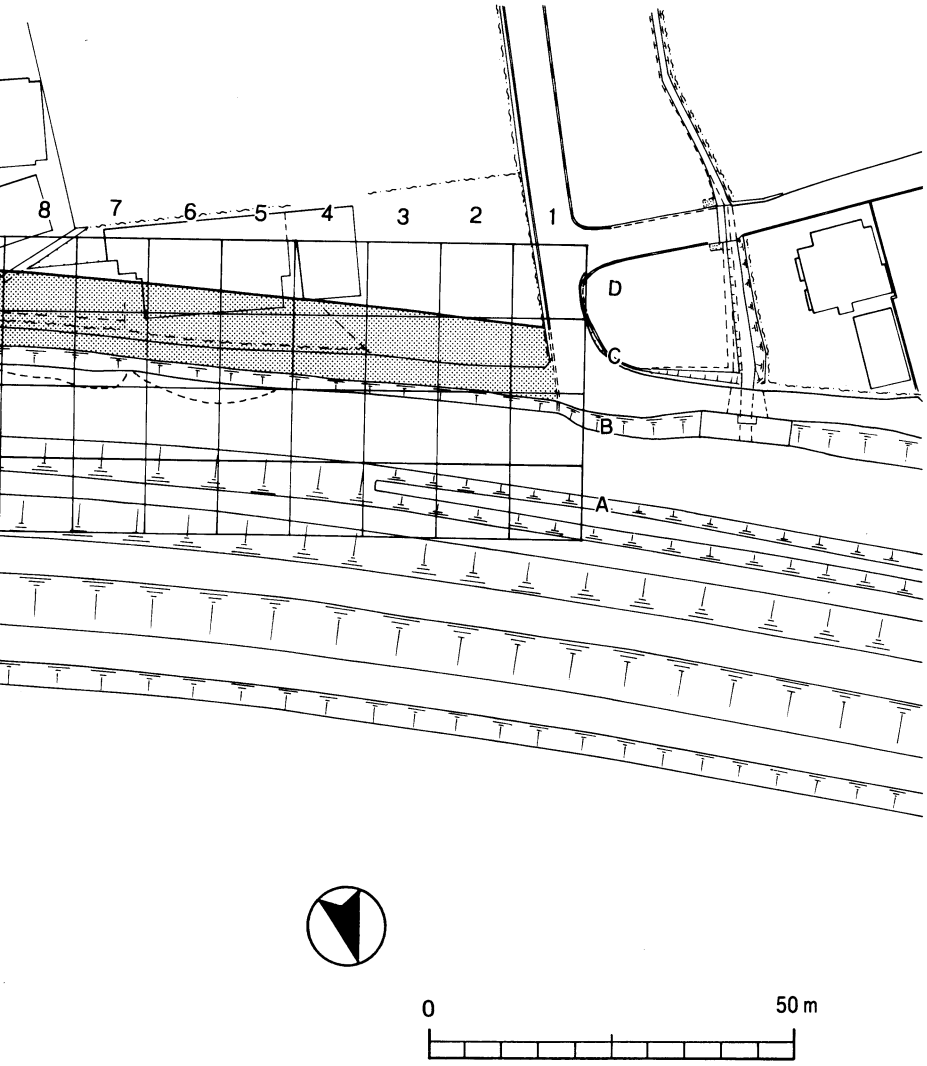

45
44
43
42
41
40
39
38
37
36
D
C
B
A



第７図　全面調査の範



囲及びグリッド図


8
7
6
5
4
3
2
1
D
C
B
A
0
50 m

第４章　土　　層

下伊倉城跡及び下伊倉遺跡は、一級河川である肝属川の河口から約3.4km上流の右岸の小丘陵に立地しており、下層には白色砂層が存在している。土層は次のとおりである。

第Ⅰ層　暗赤褐色土層。耕作土

第Ⅱ層　黄褐色粘質土層。マンガンの沈澱がみられる。

第Ⅲ層　暗青灰色粘質土層。

第Ⅳ層　明赤褐色粘質土層（Ⅳａ）と、にぶい赤褐色砂質土層（Ⅴｂ）層とに区分できる。

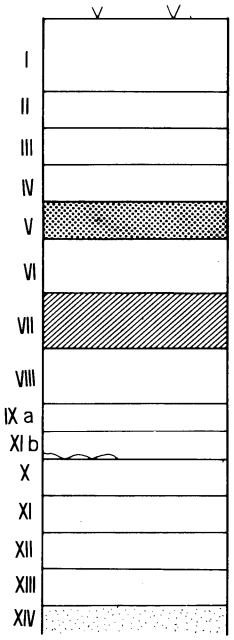
ただし、第Ⅱ層から第Ⅳ層は確認調査において、１地区（下伊倉城跡の東側低地部）で認められているが、今回面調査を実施した下伊倉遺跡及び下伊倉城跡では若干異なり次のようになる。

第Ⅱ層　茶褐色土層

第Ⅲ層　灰赤色火山灰層（暗紫ゴラ）

第Ⅳ層　黒色土層

第Ⅴ層　黒色土層。赤褐色の点状粒子が多量に混在し、硬くよく締まっている。



第８図　基本土層柱状模式図

第Ⅵ層　黒色土層

第Ⅶ層　黒褐色土層。弥生時代の遺物包含層である。

第Ⅷ層　黒褐色粘質土層。硬く締まっている。

第Ⅸa層　黄褐色粘質土層

第Ⅸb層　明黄褐色砂質土層。この下には部分的に砂質が強い部分がある（第Ⅸc層）。

第Ⅹ層　灰色粘質土層。水分を多く含んでいる。

第Ⅺ層　灰褐色粘質土層。水分を多く含んでいる。

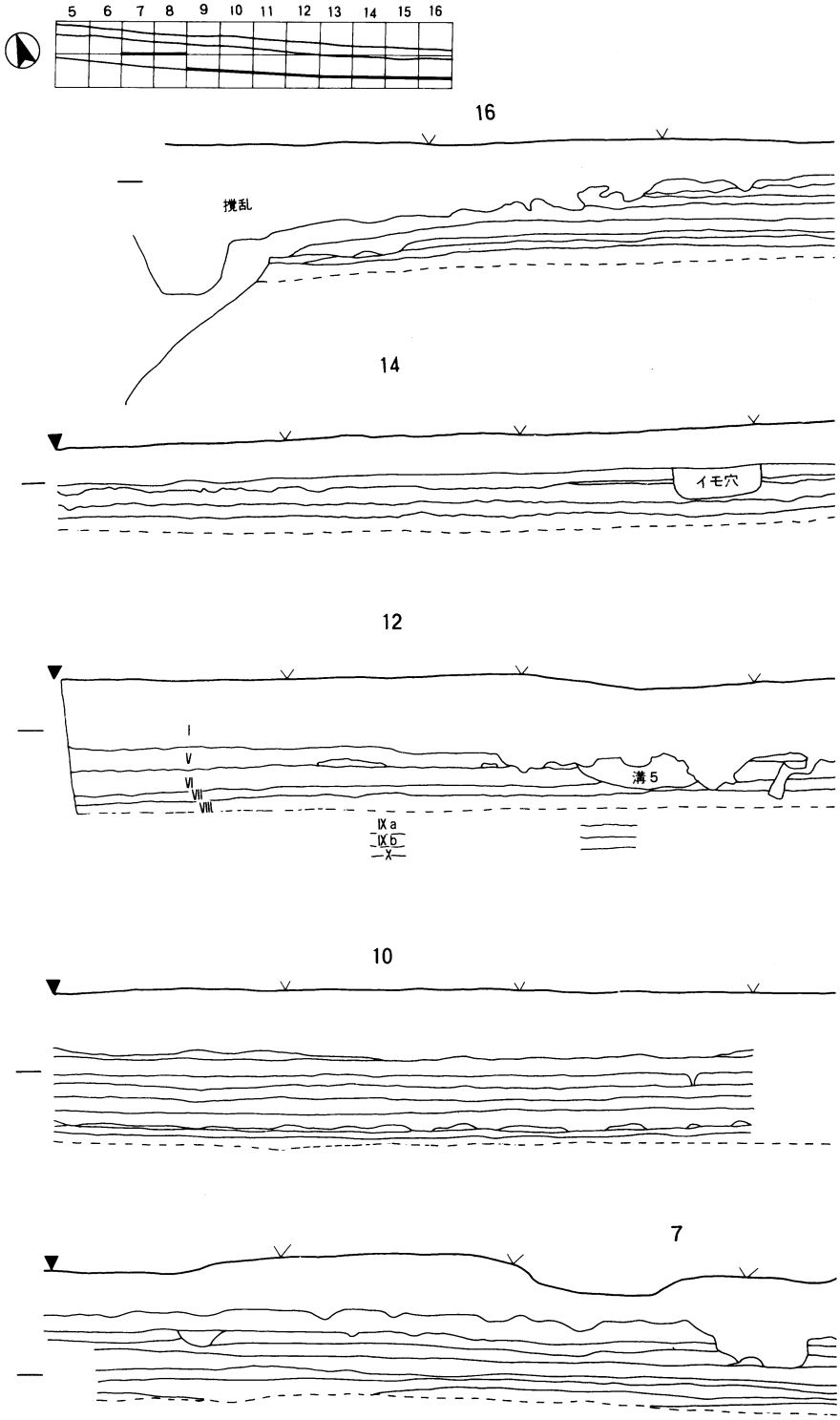
第Ⅻ層　淡黄色粘土層。下半は淡黄色軽石混土層（第Ⅻb）になる。

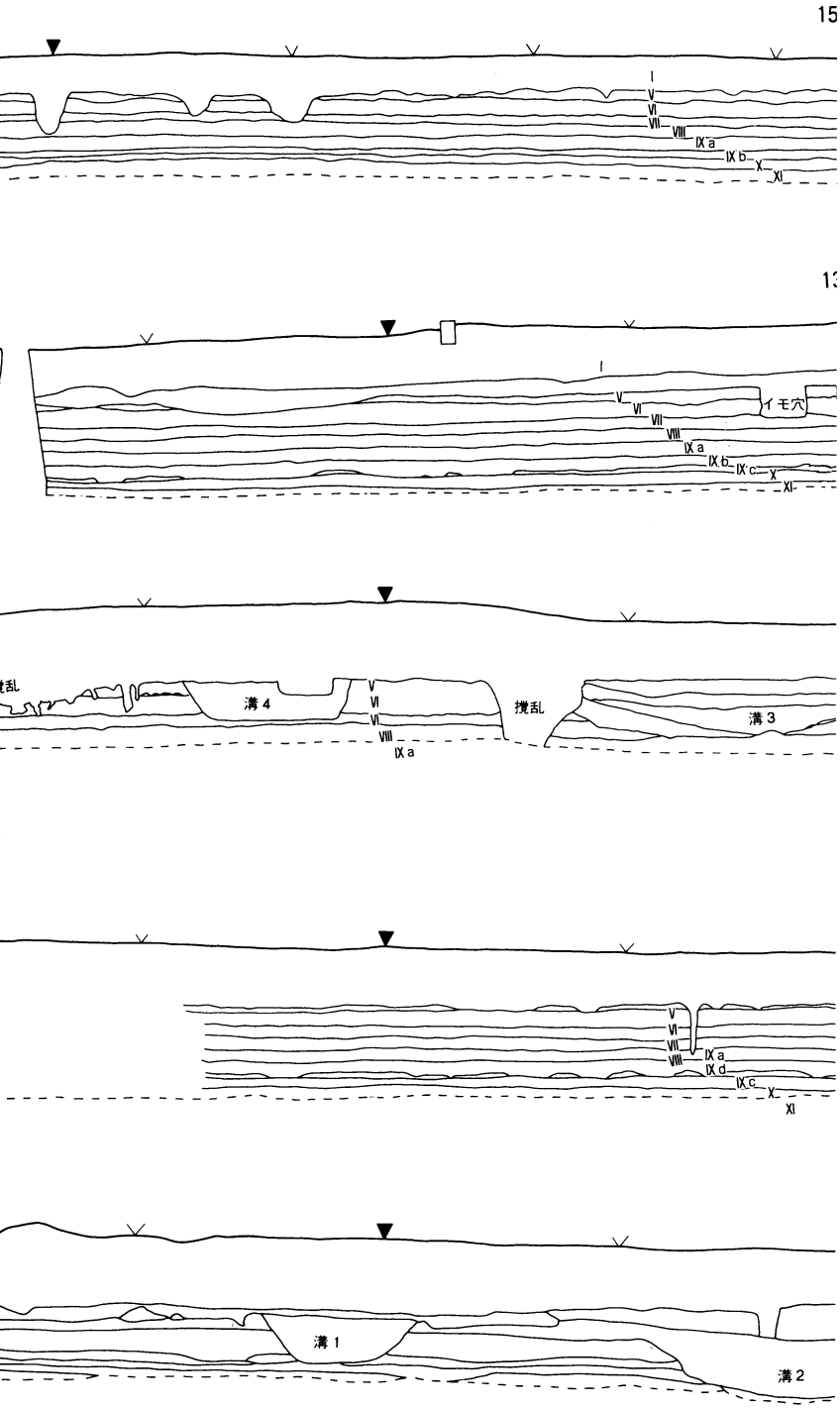
第ⅩⅢ層　明褐色砂礫層。下半は灰色砂礫層（第ⅩⅢｂ）に細分できる。

第ⅩⅣ層　灰白色砂層

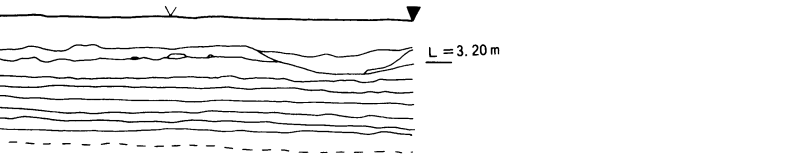
以上のような層位は、周辺部も含め順序立てているが、全面調査を実施した部分についてみると、下伊倉遺跡及び下伊倉城跡の土層の大部分は表土の下が第Ⅴ層となっており、以下の層はほぼ同厚で、且つ、ほぼ水平に近い状態で堆積していた。

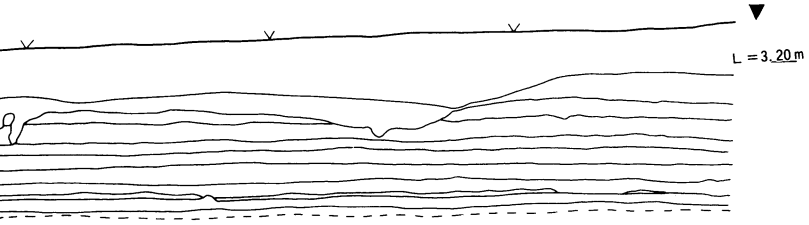
土層断面図は６・７区はＣ・Ｄ区の境を、８区から以降は調査区域の南側壁面を実測している。ただし、下伊倉城跡の濠の部分についてはその限りではない。第５章を参照されたい。


5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16
16
攪乱
14
イモ穴
12
I
V
VI
VII
VIII
溝5
IXa
IXb
X
10
7

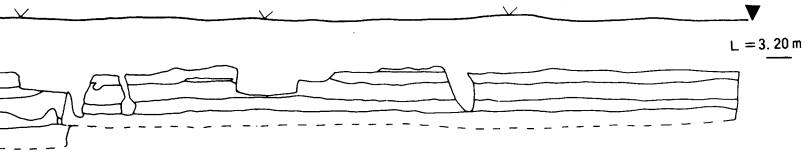


第９図　下伊倉遺跡土層断面図

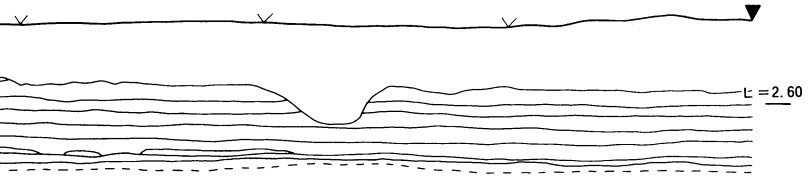

L =3.20m


L =3.20m

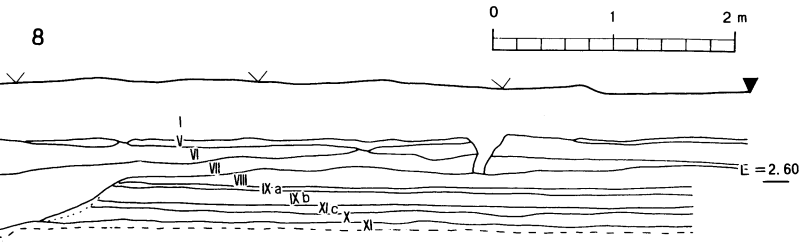
11


L =3.20m

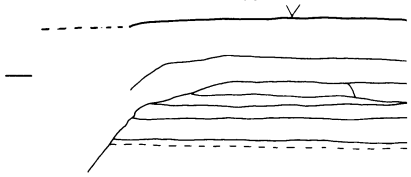
9


L =2.60

8

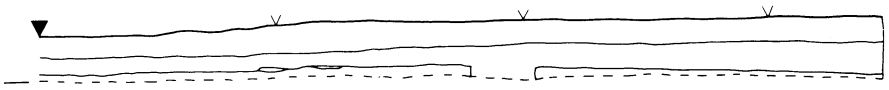

0
1
2 m
I
V
VI
VII
VIII
IX a
IX b
XI c
X
XI
L =2.60

19

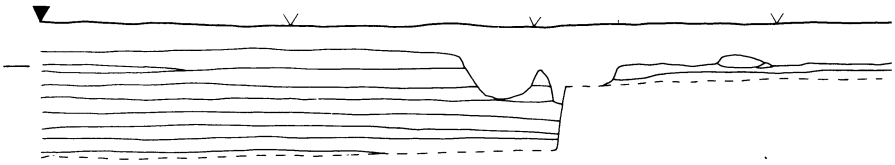


内堀

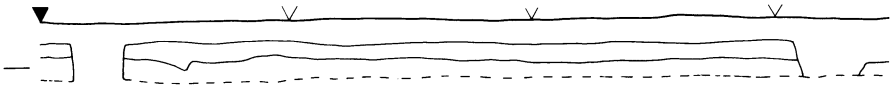
22



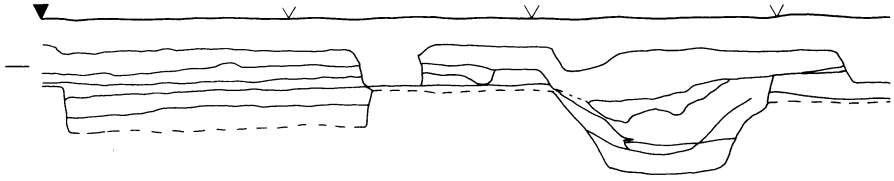
24

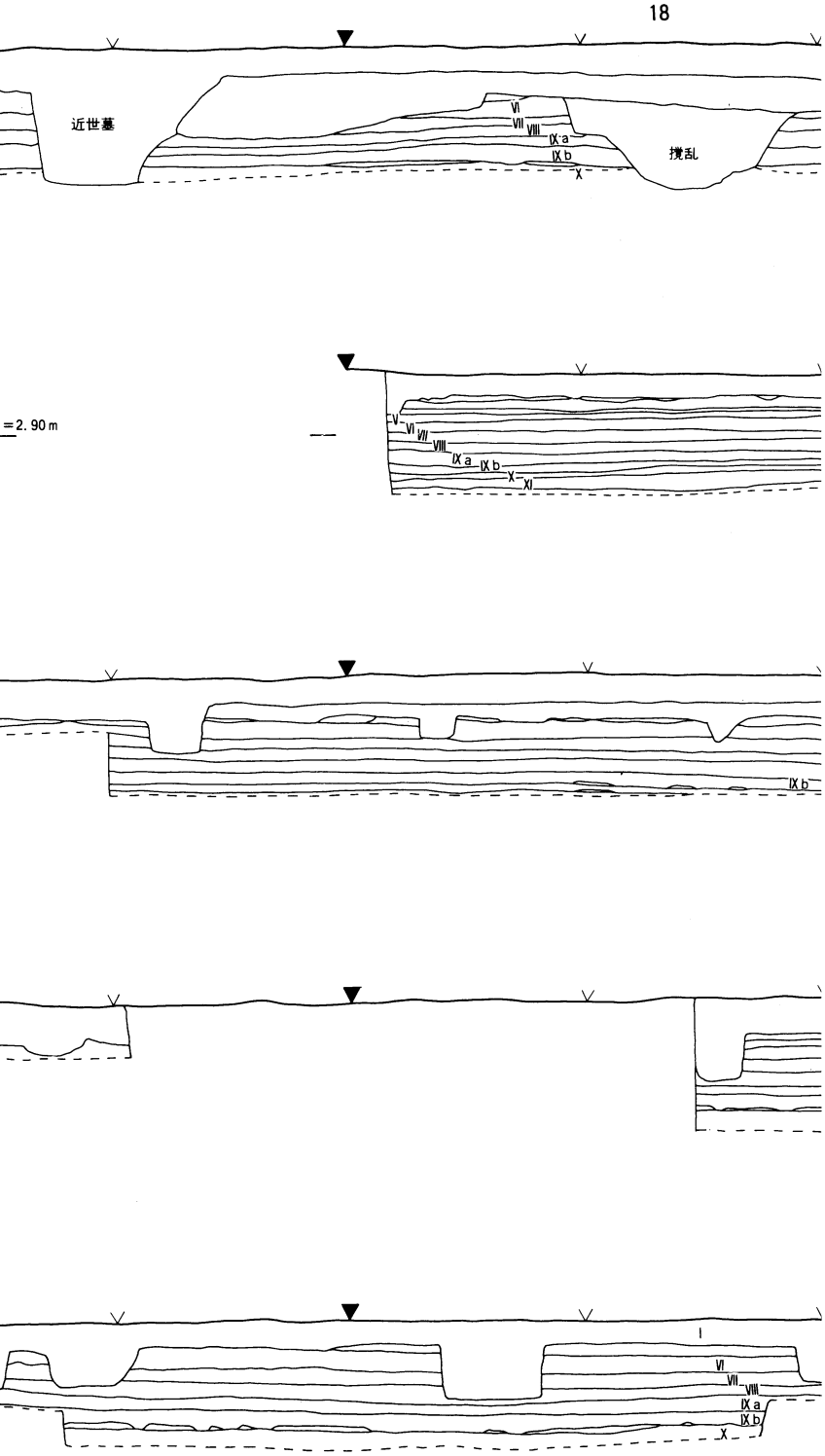


26

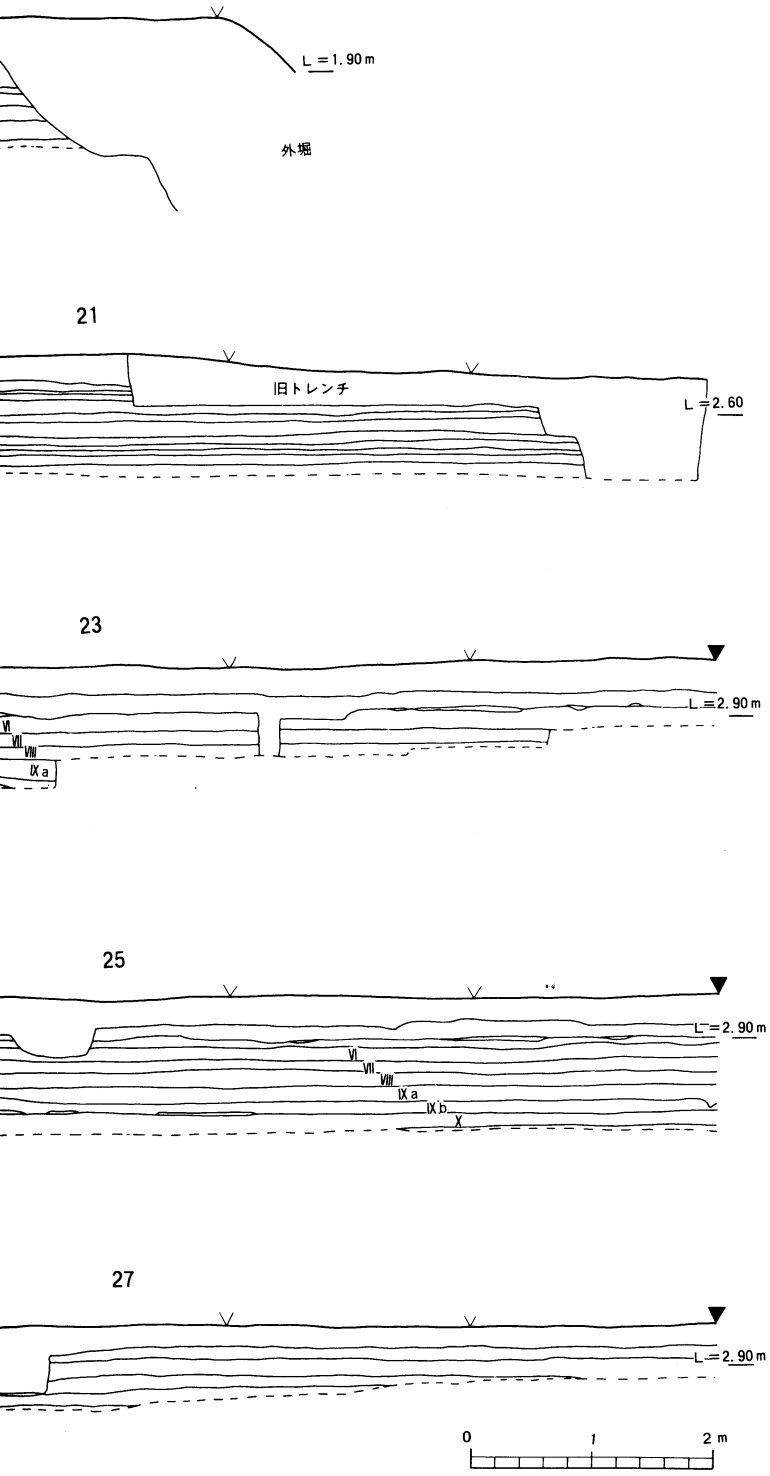


28

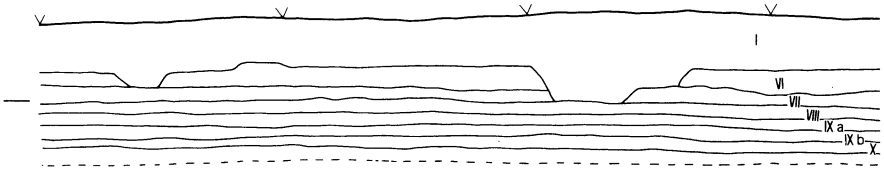




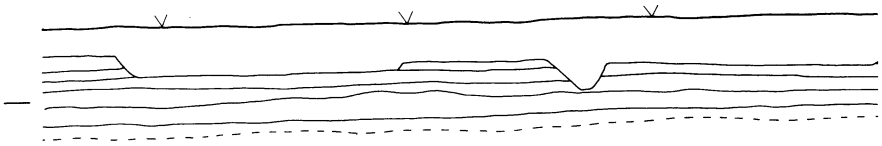
第10図　下伊倉城跡土層断面図(1)


L＝1.90m
外堀
21
旧トレンチ
L＝2.60
23
L＝2.90m
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ
Ⅸa
25
L＝2.90m
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ
Ⅸa
Ⅸb
Ⅹ
27
L＝2.90m
0
1
2m

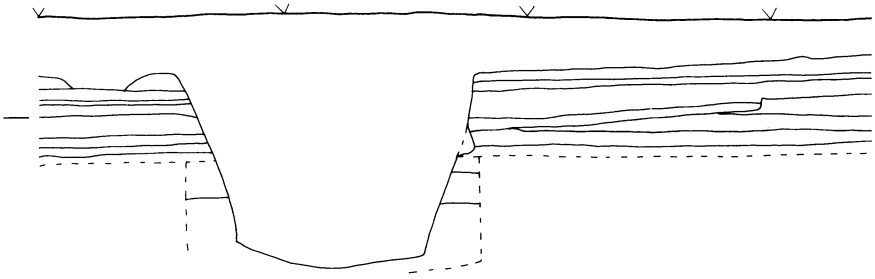
30

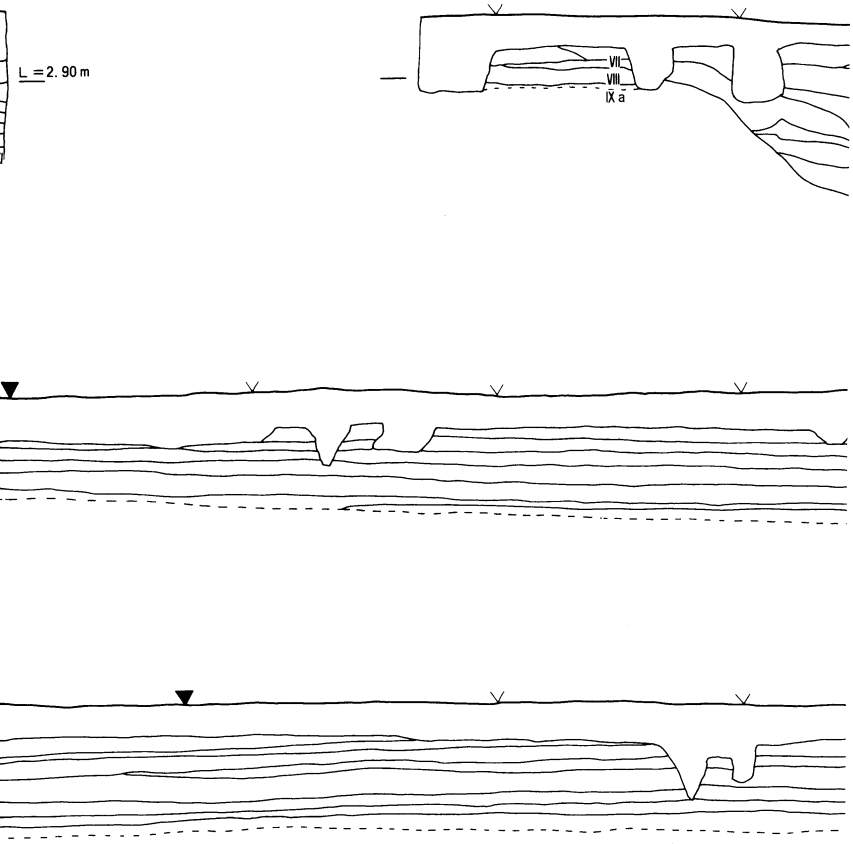


32



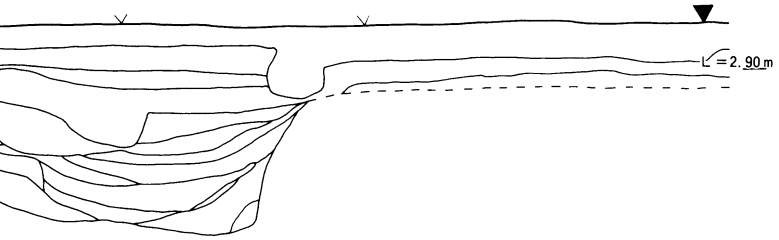
34



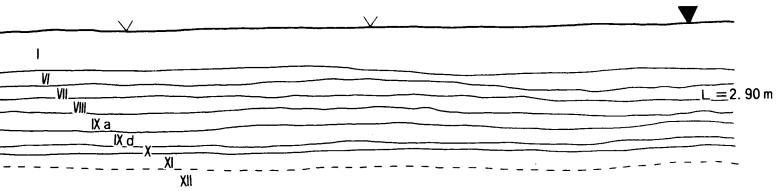


第11図　下伊倉城跡土層断面図(2)

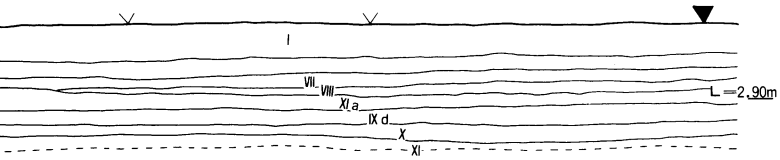
29


L=2.90m

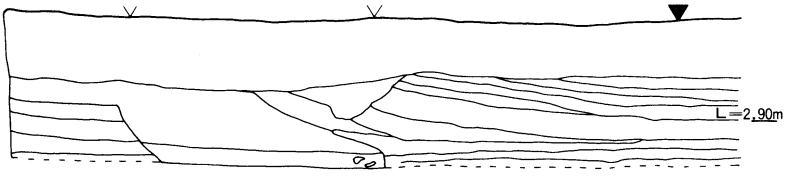
31


I
VI
VII
VIII
IX a
IX d
X
XI
XII
L=2.90m

33


I
VII
VIII
XI a
IX d
X
XI
L=2.90m

35


L=2.90m

0
1

C
B
A
D
45
44
43
42
41
40
39
38
37

第12図　下伊倉城跡遺構配置図

内濠
外濠
土塁
土塁
古道
ピット群1
古石塔
24
23
22
21
20
19
18
17
50m

第５章　下伊倉城跡の調査

第１節　調査の概要

実施した調査地は調査対象地区の東側に当たり、下伊倉城跡の城内部分である。西側の内濠（C、D－17区）、外濠（C、D－19、20区）は現存している。東側の濠（B、C－38、39区）は確認調査時と同様検出できなかった。土塁は予定範囲内においてはすでに削平されていた。土塁の基礎と考えられる部分もD－21区で一部観察されたのみである。B、C－30～38区の道路部分はすでに道路建設の際に遺構面よりも下位まで削平されていた。しかし、C、D－29、28区からはそれぞれ溝が、１本ずつ計２本検出された。C、D－26、27及び23区からはピットが検出されたが建物跡の想定はできなかった。C、D－23区では古道跡が１本、C－34区では井戸状遺構が１ヵ所検出された。B～D－35、36区の塚は土層観察等により古墳時代前後に構築されたものと考えられるものである。

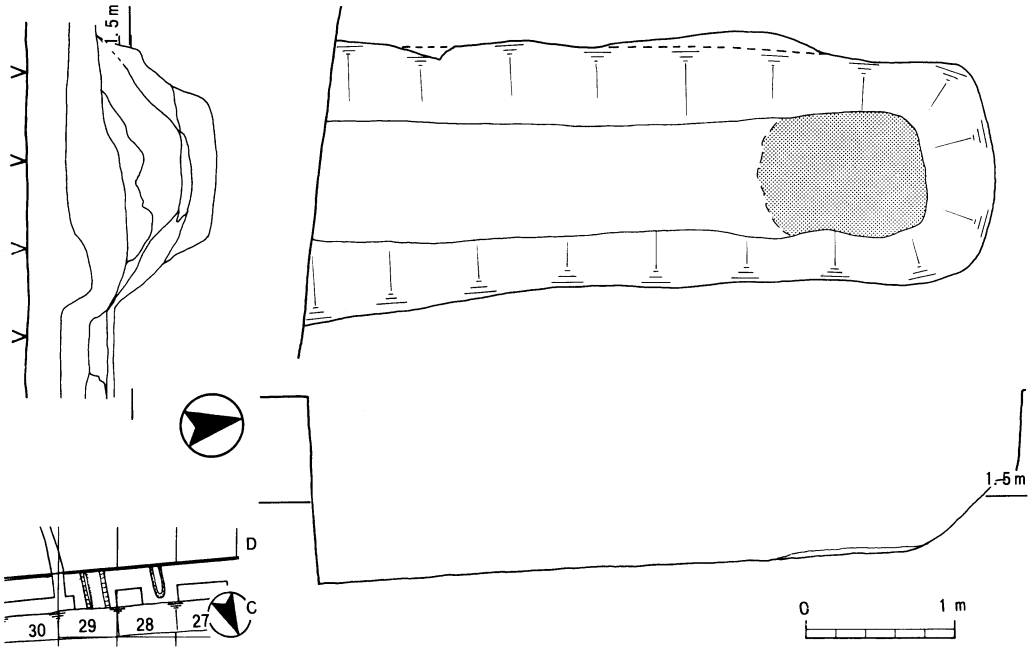
城跡の調査は、その全体からみれば確認調査的なものとなったため、その全体像をつかむまでにはいたらなかった。

第２節　歴史時代の遺構

１　溝　１

C、D－28区で確認、検出されたものである。第Ⅴ層前後まで城面の調整が行われ、第Ⅵ層から掘り込まれているものである。方向はほぼ南北で、北側部が端部となる。

幅1.5～1.8m、深さ0.5～0.7mを測り、断面は逆台形状を呈している。



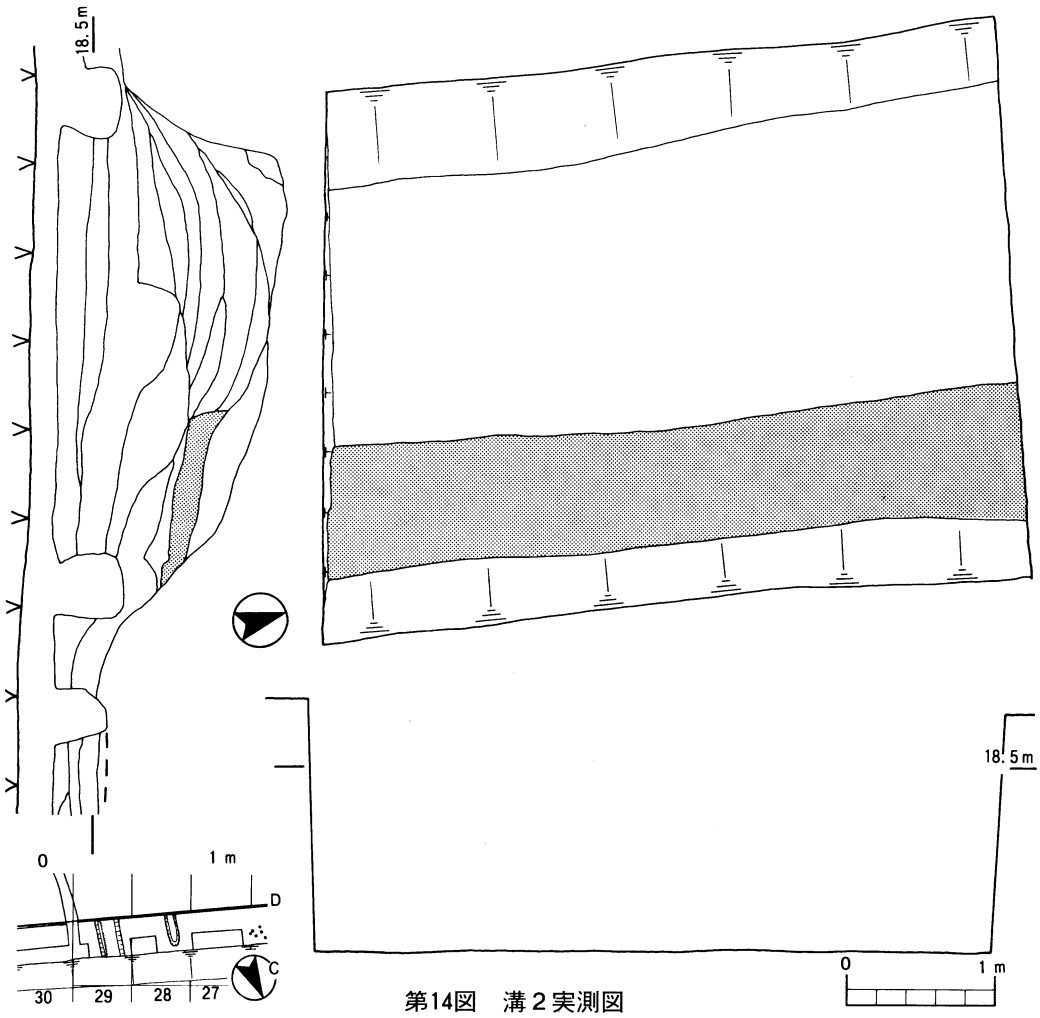
第13図　溝１実測図

床面は南側へ緩傾斜している。床面の北端部に、固く締まった部分がみられた。南側は調査地区外に延びており、その性格はつかめなかった。埋土中から少量の陶磁器片が出土した。

2　溝　2

D－29区で確認、検出されたものである。第Ⅴ層前後まで城面の調整が行われ、第Ⅵ層から堀り込まれているものである。方向はほぼ南北にとる。

幅3.7m、深さ0.5～0.7mを測り、断面は逆台形状を呈していて、床面は西側へ傾斜している。溝の中位の東側には通路と想定される固く締まった部分がある。ここの表面には、水成作用によると考えられる薄い砂層が観察された。埋土中からは少量の陶磁器片の他、火熱を受けたと考えられる軽石や花崗岩片が出土した。溝は北、南へそれぞれ延びているが、南は地区外、北側は川の開析で破壊されているため、その性格はつかめなかった。



第14図　溝２実測図

3　ピット群１

Ｄ－23区において４個確認、検出されたものである。ピットは第Ｉｂ層から掘り込まれていたものと考えられるが、埋土と第Ｉｂ層との色調が酷似していたため第Ⅵ層上面で確認、検出された。

径19～20cm、深さ19～27cmを測るものである。ピット２からは茶釜の破片が出土した。これらのピットからは建物跡を想定することはできなかった。

第３表　ピット群１計測表

ピットNo.	径　(cm)	深さ (cm)	ピット間の距離	(cm)
Ｐ　１	２０	１９	Ｐ１－Ｐ２	７８
Ｐ　２	１９	１７	Ｐ２－Ｐ３	２６８
Ｐ　３	１９	２７	Ｐ３－Ｐ４	３９６
Ｐ　４	２０	２０	Ｐ４－Ｐ１	１８２

4　ピット群２

Ｃ、Ｄ－26、27区において６個確認、検出されたものである。第Ⅴ層前後までの城面の調整が行われ、ピットと第Ｉｂ層から掘り込まれていたものと考えられるが、埋土と第Ｉｂ層の色調が酷似していたため第Ⅵ層上面で確認、検出された。

径18～32cm、深さ11～33cmを測る。ピット６からは根石状のものが２個出土した。これらのピットからは建物跡を想定することはできなかった。

第４表　ピット群２計測表

ピットNo.	径　(cm)	深さ (cm)	ピット間の距離	(cm)
Ｐ　１	２０	１６.５	Ｐ１－Ｐ２	１０２
Ｐ　２	２０	２５.５	Ｐ２－Ｐ３	１２２
Ｐ　３	２０	１１	Ｐ３－Ｐ４	１４２
Ｐ　４	３２	３３	Ｐ４－Ｐ１	３３
Ｐ　５	１８	２３.５	Ｐ３－Ｐ４	１３０
Ｐ　６	２２	２０.５	Ｐ４－Ｐ１	１３８

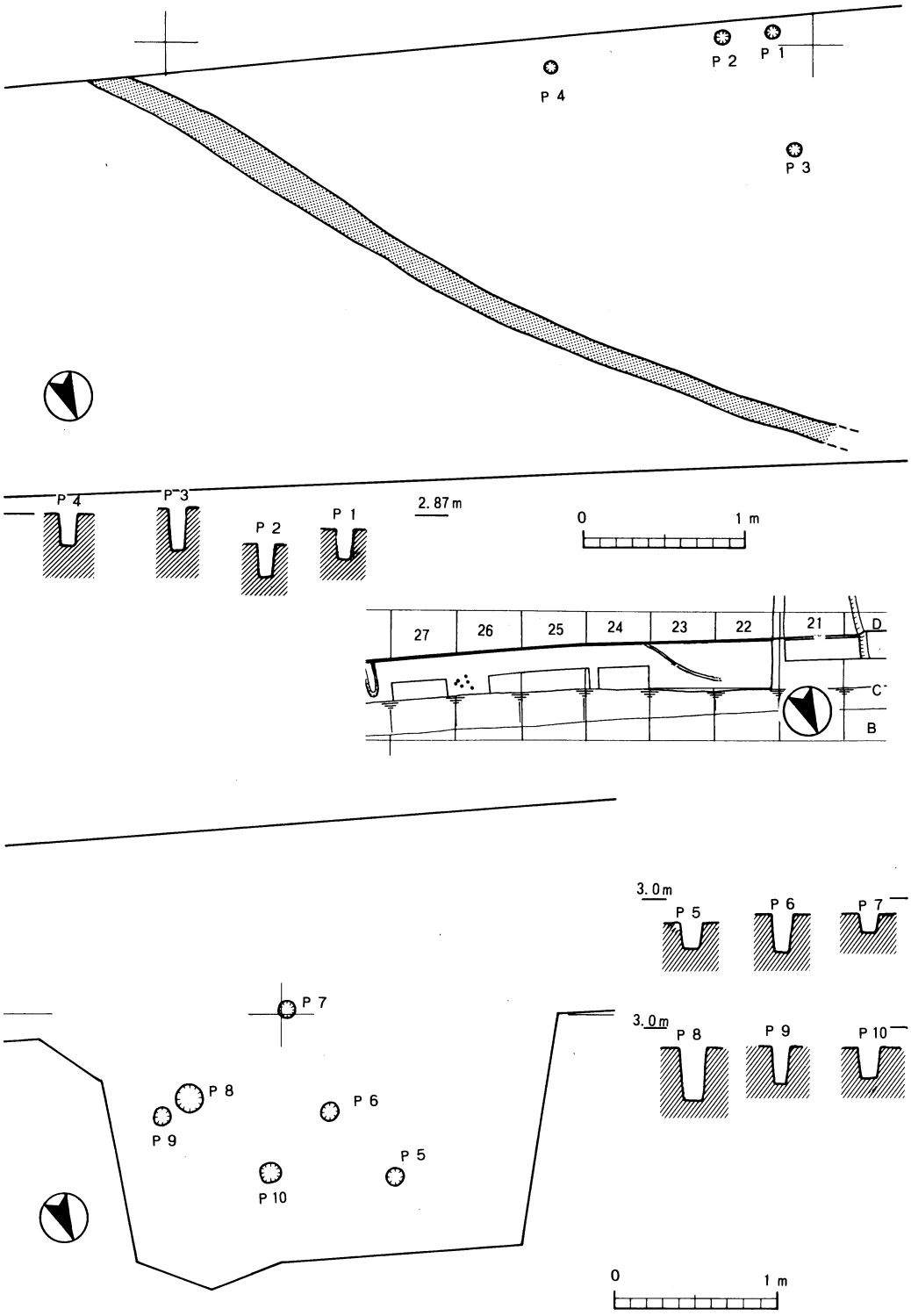
5　古　道

Ｃ、Ｄ－23区において確認、検出されたものである。第Ⅵ層上部まで城面の調整が行われ、第Ⅵ層上面で第Ⅴ層が一部固く締まっている。南東から北西の方向を示し、南東部は地区外へ延びる。北西部は削平ないしは撹乱のため消失している。

幅23～50cmを測るが、50cm前後あったものと考えられる。城の造成面での検出ではあったが、古道の上部及び周囲からの遺物の出土はなかった。このため、古道の明確な時期については不明である。

6　井戸状遺構

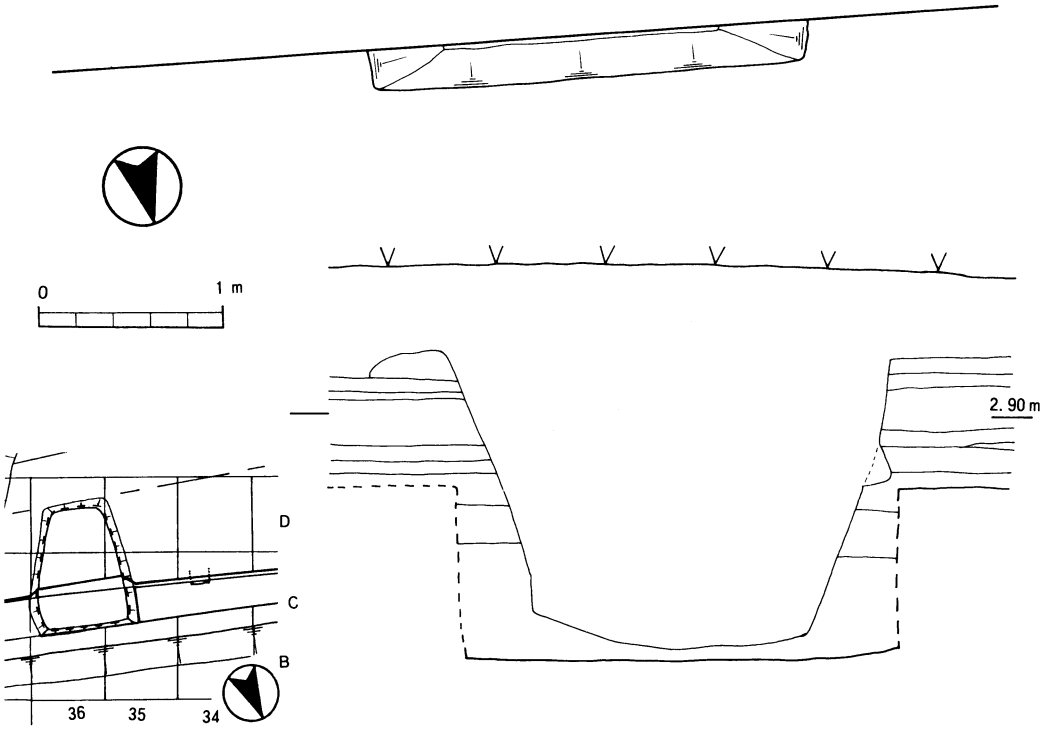
Ｃ－34区において確認、検出されたものである。第Ⅵ層まで城面の調整が行われ、第Ｉｂ層



第15図　ピット群及び古道実測図

から掘り込まれている。遺構のほんの一部が確認、検出されたもので、その大半は地区外である。平面形は方形ないしは長方形をなしているものと推定される。

一辺は2.35mを測るもので、断面は逆台形状を呈している。床面は基盤層の白色砂層まで達してはいるが、湧水面までは達していないため、井戸としての機能は持っていないものと考えられる。



第16図　井戸状遺構実測図

7　濠

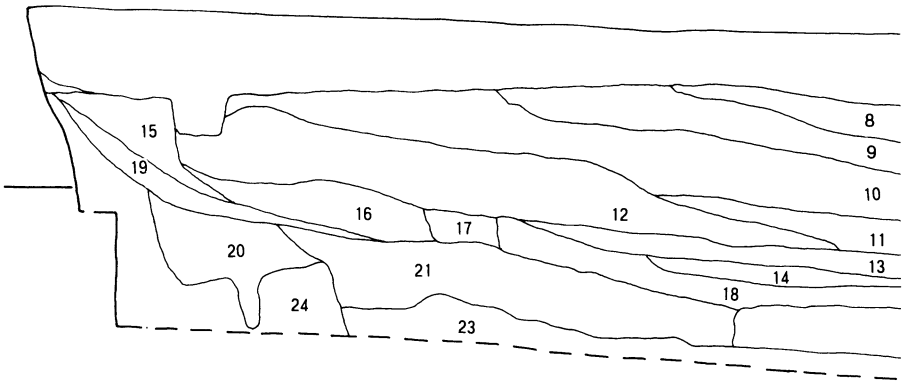
1）　西側外濠

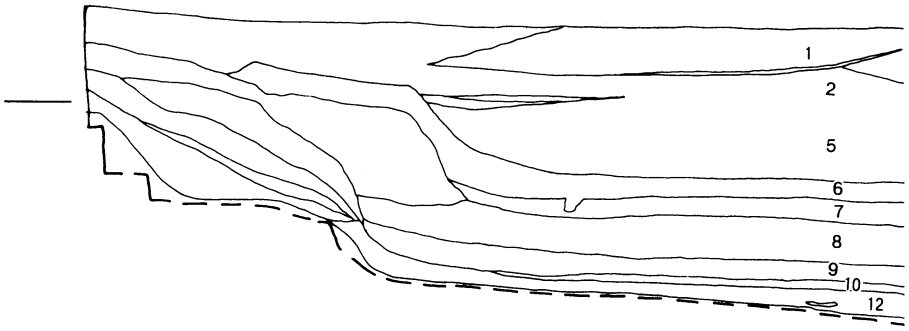
西側外濠はD－17区以南に現存しているもので、現存幅は約11mを測る。

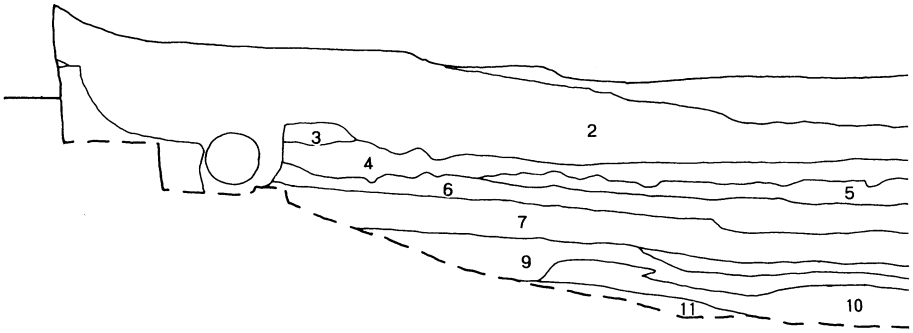
調査の結果、幅約20mを測る旧河川状のものを利用して、幅13m、深さ2.6mの濠を構築していることが確認された。埋土は下部では砂層であるが、上部は後に水田として利用されていたため粘質土がグライ化している。濠の最下部は湧水面の層と同じレベルである。

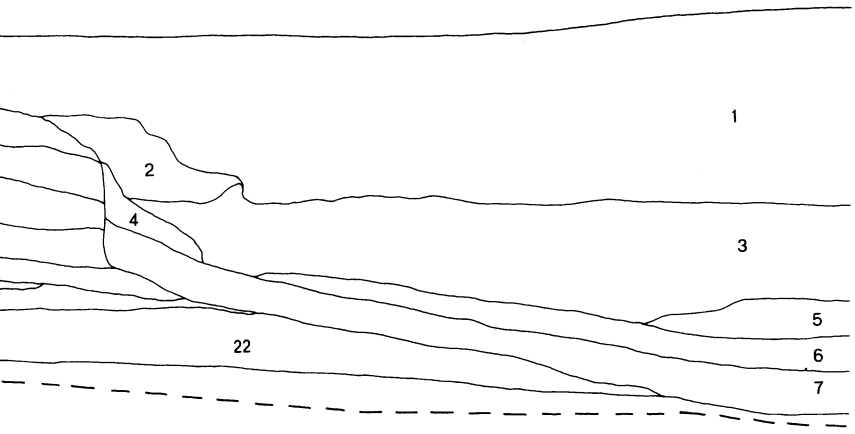
2）　西側内濠

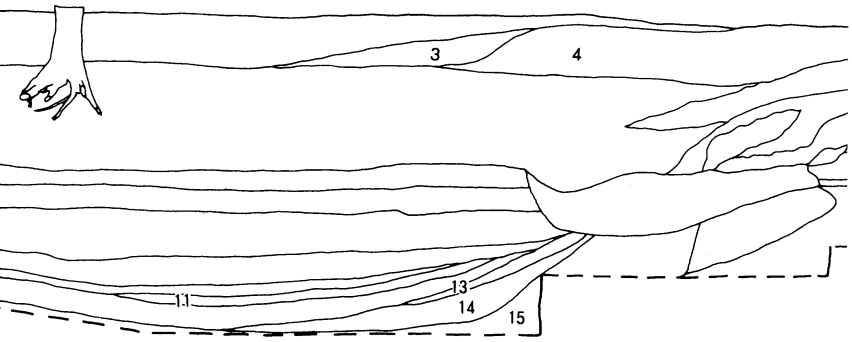
西側内濠もD－19、20区以南に現存しており、一部は埋め立てられているもので、現存幅約12mを測る。

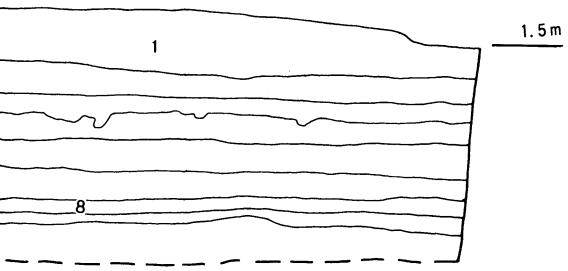

15
19
8
9
10
16
17
12
11
20
21
13
14
18
24
23


1
2
5
6
7
8
9
10
12


2
3
4
6
5
7
9
11
10



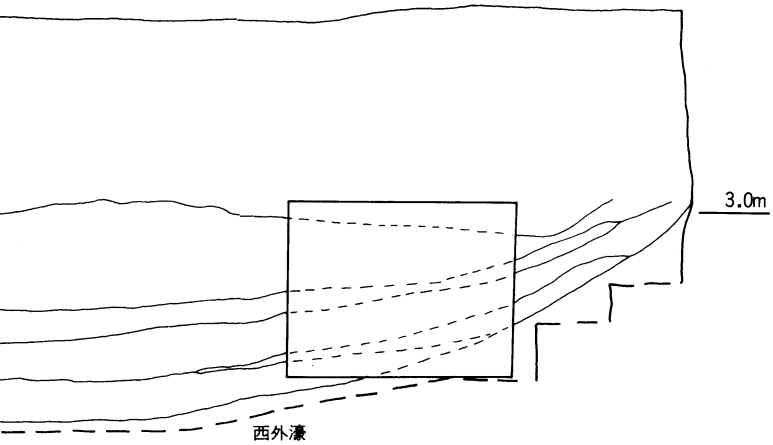




東内濠

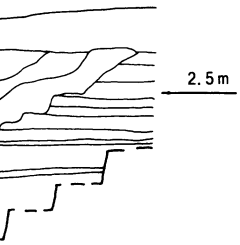
1	シラス覆土	7	
2	表土	8	
3	暗灰色	9	
4	灰茶褐色粘土	10	
5	明灰茶褐色粘土	11	
6	灰褐色粘質土		

第17図　濠土層実測図



西外濠

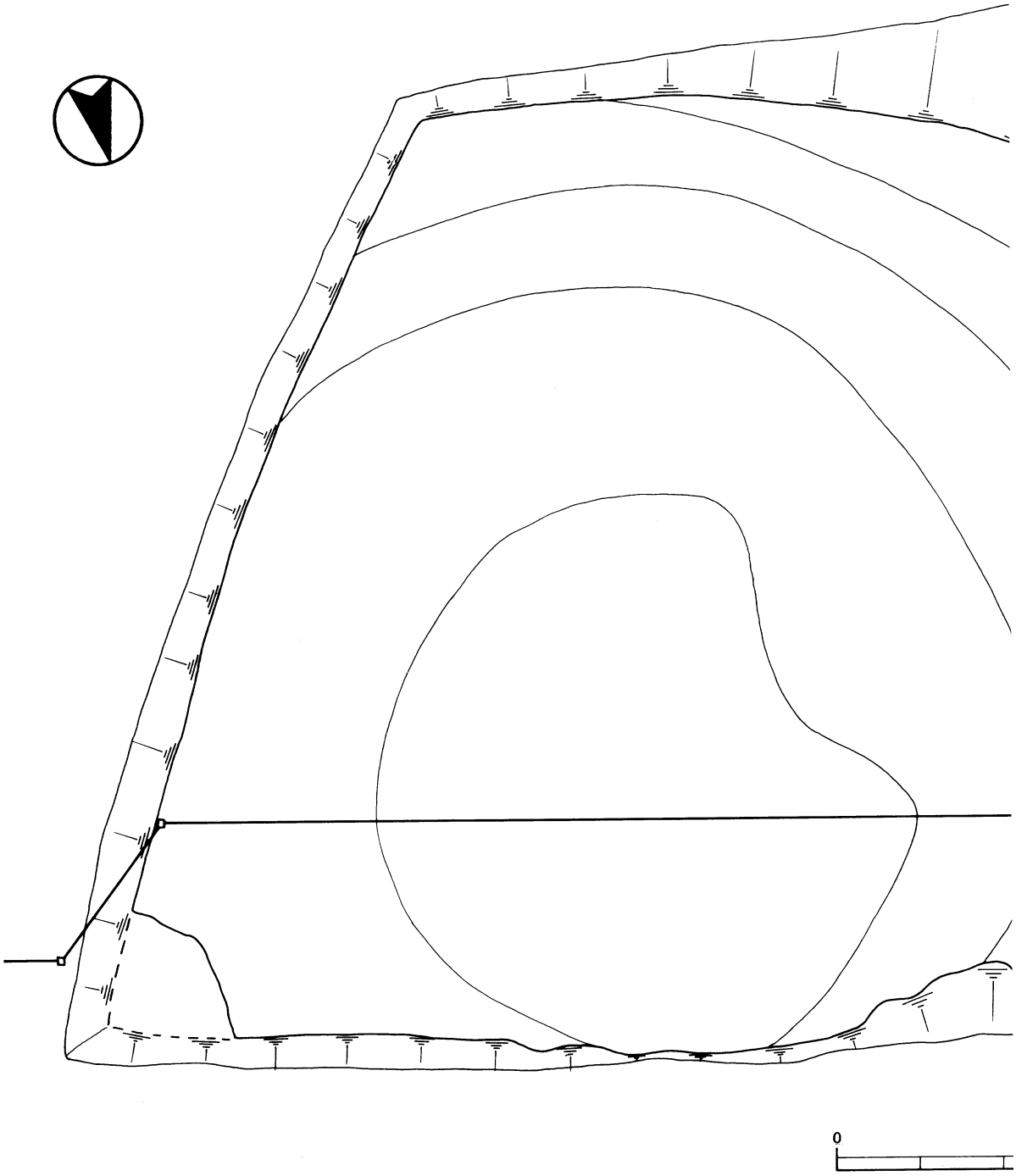
1 瓦礫混土
2 黄褐色土
3 灰褐色粘土
4 明灰褐色粘質土
5 黒褐色砂質土
6 灰褐色粘土
7 灰褐色粘質土
8 褐色砂
9 暗褐色砂
10 黄褐色粘土混黒色砂
11 黒色砂
12 暗褐色砂質土
13 黒褐色砂
14 褐色砂
15 茶褐色砂
16 盲色砂混茶褐色砂
17 白色砂
18 暗褐色砂
19 黒褐色砂
20 褐色砂質土
21 白色砂と黒色砂の互層
22 粘土ブロック混灰色砂
23 白色砂
24 黄褐色粘質土



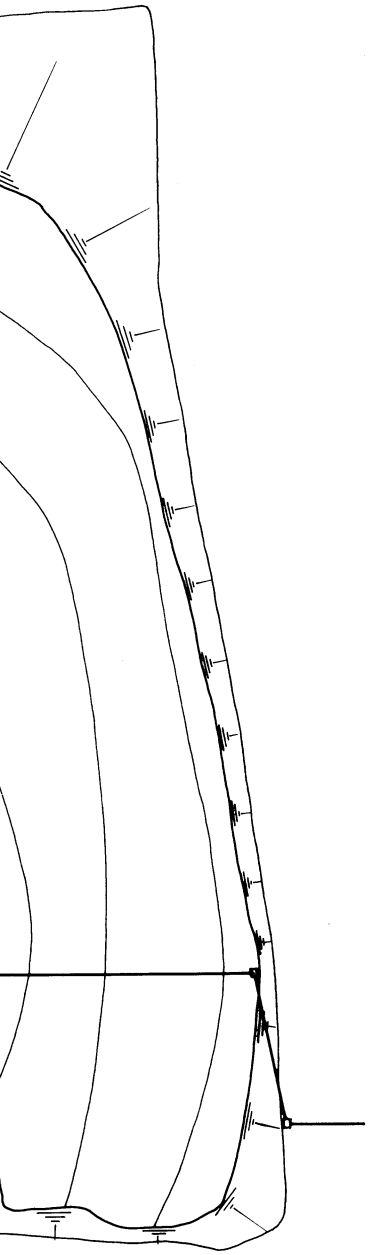
西内濠

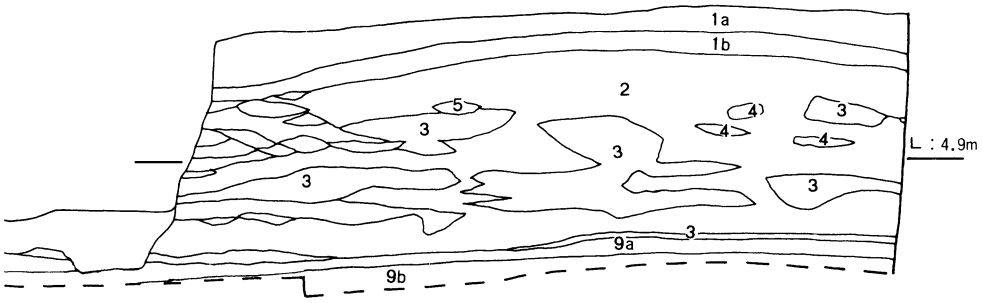
1 シラス覆土
2 腐植物
3 黒褐色混土
4 明茶褐色土
5 明灰褐色土
6 暗灰褐色土
7 灰褐色砂
8 暗茶褐色粘土
9 明灰褐色砂
10 暗茶褐色粘土
11 明灰褐色粘土
12 灰褐色粘土
13 明灰褐色土
14 黒褐色砂
15 白色砂

灰褐色砂質土
灰褐色砂質土
灰褐色砂
暗灰褐色粘質土
暗灰褐色砂

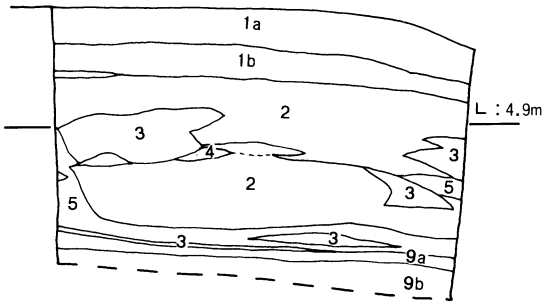


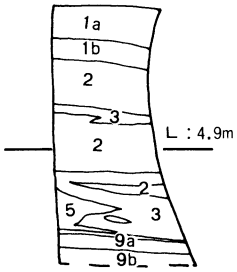
第18

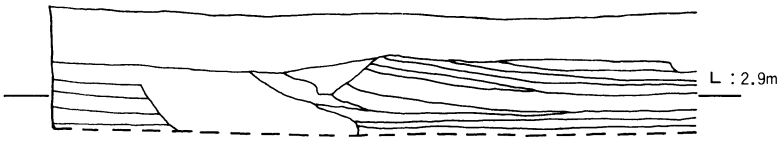




1a　表土
1b　黒褐色軟質土
2　黒褐色土
3　暗黒茶褐色土
4　暗灰茶褐色
5　黒色土
9a　暗茶褐色土
9b　黄褐色砂質土







1 m

図　塚実測図

調査の結果、濠の一部は埋められていたものの、幅15.4m、深さ2.9mを測るものであることが確認された。濠の最下部は湧水面と同じレベルである。

3）　東側内濠

B、C－38区以東に存在すると想定されるものであるが、確認調査時に西側法面のみ確認できたものであり、緊急発掘調査でも同様であった。

調査の結果、法面角度は約15度で東へ掘り込まれている。最下部は湧水面と同じレベルである。埋土は下部で砂層であるが、上部は後に水田として利用されているため粘質土がグライ化している。

4）　東側外濠

B、C－38区以東に存在すると想定されるものであるが、確認調査及び緊急発掘調査時でも確認できなかった。

第3節　その他の遺構

塚

B～D－35、36区に現存しているものである。工事予定地区内について調査を行った。この塚は、東串良町教育委員会によって唐仁古墳群139号墳指定外7号墳の標柱が立てられている。以前は円形を呈していたものと考えられるが、現存の平面形は畑地拡張や河川改修に伴う道路開削等により台形状を呈し、現況では南北約12.1m、南側約9m、北側約14.3m、高さ約2.2mを測る。

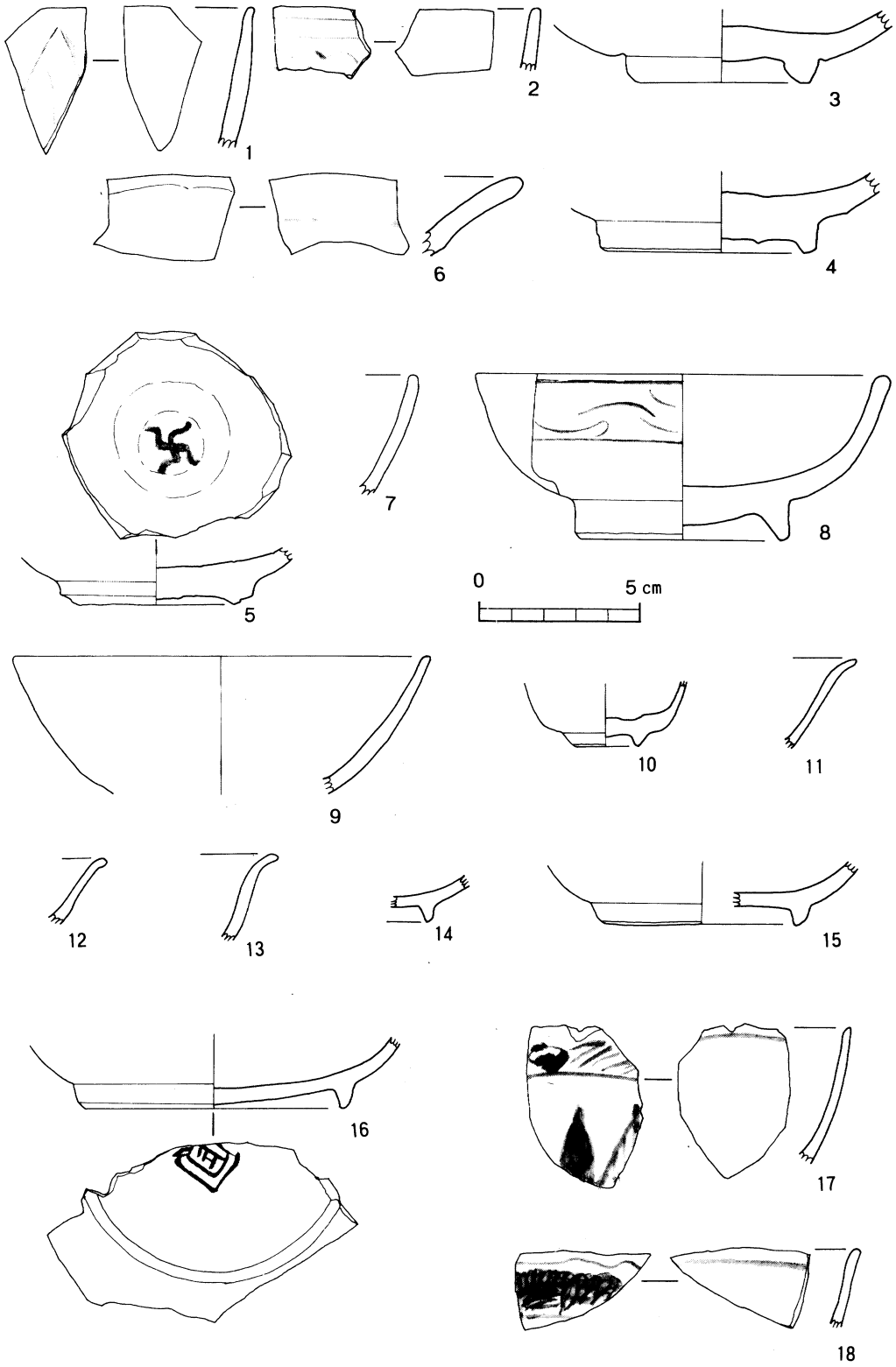
塚の西側における断面で、2.3mの幅で粘質の第Ⅵ～Ⅸ層の部分を掘り上げて、版築状に構築していることが判明したが、古墳時代前後明確な構築の年代は判明しなかった。

第4節　歴史時代の遺物

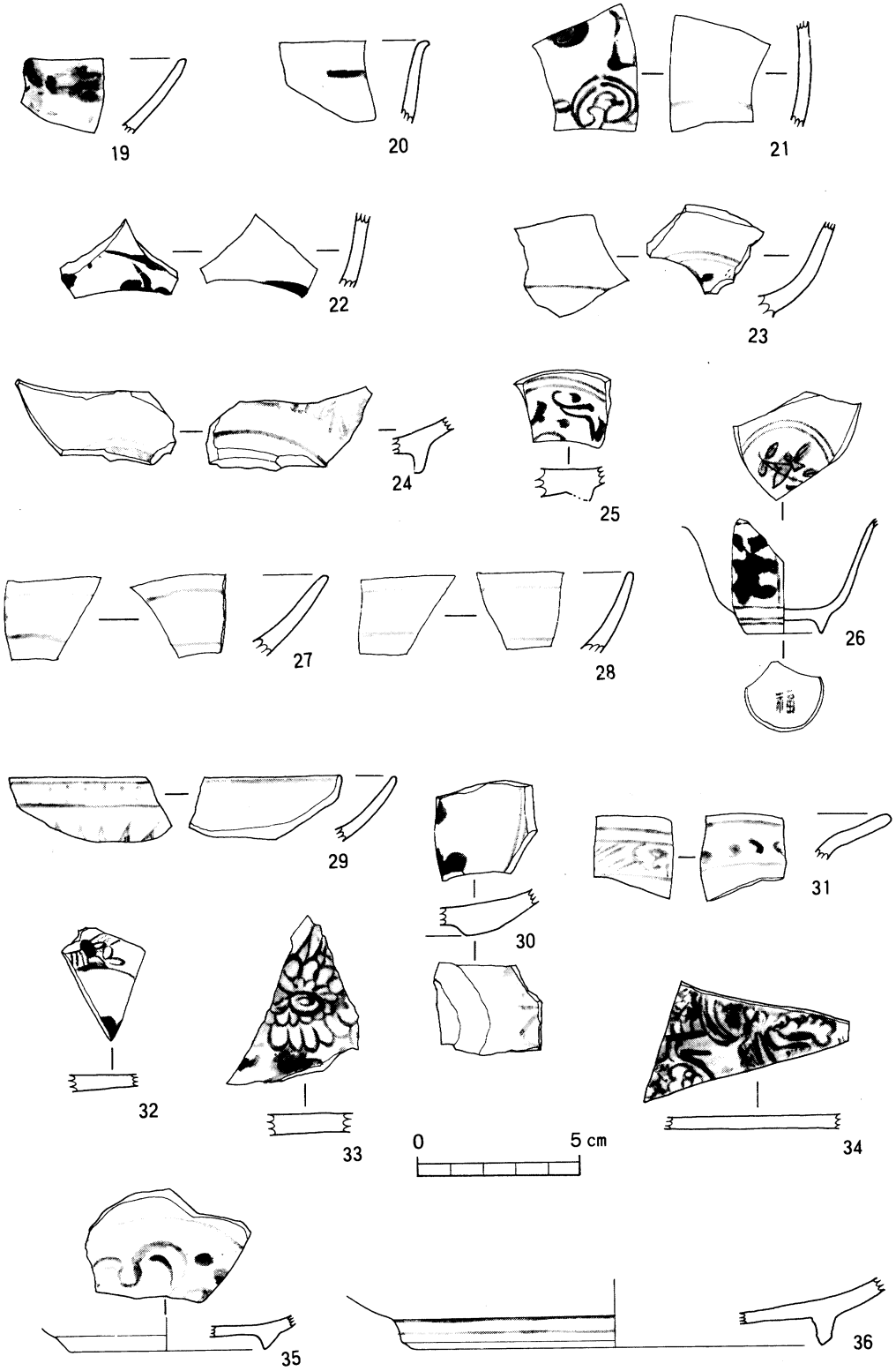
1～53が歴史時代の遺物である。出土した箇所は溝2と表土である。

1　青　磁

青磁は碗と稜花皿である。すべて表土からの出土である。1、2が碗の口縁部片、3～5が碗の底部片である。1は碗の口縁部片である。口縁部はわずかに外反する。外面には広幅の鎬連弁文を施している。色調は灰緑色を呈する。2は口縁上部に沈線を施し、連弁幅がやや狭く、花弁がやや不揃いのものである。口唇部は若干球縁状となっている。色調は灰緑色を呈し、口唇部では一部茶褐色を呈する。3は高台付近で土見せを行っている。高台はヘラ削り出しである。火熱が強かったためか、土見せ部分は暗赤茶褐色を呈する。4は高台の畳付け付近まで釉が掛かる。見込み中央には「卍」文を陽刻している。高台はヘラ削り出しである。色調は暗灰緑緑色を呈している。5は高台畳付け付近の一部で土見せを行っている。高台はヘラ削り出しである。焼成が不完全なためか、上釉は灰白色、胎土は明茶褐色を呈する。6は口縁部から腰部にかけての稜花皿の破片である。口縁部は緩やかなカーブで稜花を作り出している。口縁内面には沈線を陰刻している。色調灰緑色を呈している。



第19図　歴史時代の出土遺物（1）



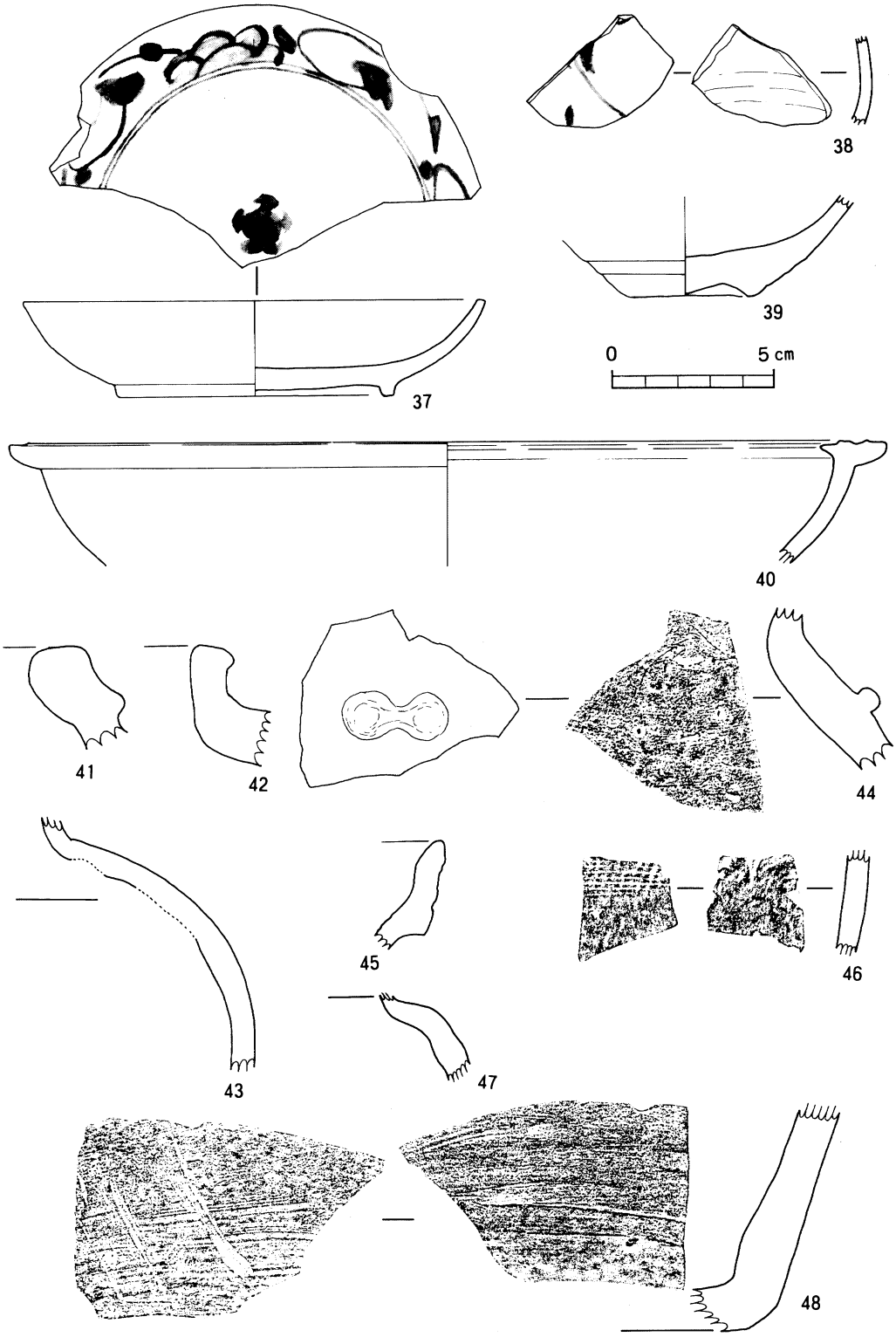
第20図　歴史時代の出土遺物（2）

2　白　磁

白磁は碗と皿である。表土と溝２の埋土からの出土である。７～10が碗で、10は小型のものである。７はやや薄手に作られたもので、外面に水挽痕が残る。焼成が不完全なためか、色調は灰青色を呈する。口唇部では釉が剥落している。８は口縁部がやや直口気味のもので、復元口縁径12.9cm、復元器高5.2cm、復元高台径6.7cmを測る。外面は口縁部に２状の沈線とその沈線間に唐草文様を陰刻している。見込みには圏線状のものが陰刻されている。９は薄手の碗形のもので、復元口縁径は13cmを測る。外面に水挽痕が若干残る。色調は灰白色を呈する。10は高台径２cmを測る小型小杯である。見込みには重ね焼きのため釉を掻きとっている。色調は白色を呈する。11～13は端反形の皿の口縁部片である。14～16は皿の底部片である。15の復元高台径が6.5cm、16が8.5cmを測る。16の高台内には呉須で幾何文が描かれている。色調は13、15が不純物のためか黒い斑点がみられる。11が灰白色、他は白色を呈する。

3　染　付

染付は碗、皿、瓶である。すべて表土中からの出土である。17は碗形を呈し口縁部に幾何文、胴部から腰部にかけて蕉葉文が描かれている。18は口縁部が若干端反り、口縁部に幾何文が描かれている。17、18の口縁部には圏線が１条描かれている。17には粗い貫入がはいる。色調は17はやや灰色味を帯び、18はやや青味を帯びる。19はやや直線的に開く口縁部片である。外面に草花文が描く。20は端反りの口縁部片であり、横線を薄い呉須で描いたものである。21、22は草花文が描かれた胴部片がある。23は腰部の破片で、見込みに草花文が描かれたものである。24は胴部に蕉葉文が描かれた底部片である。高台に圏線を２条、見込みにも文様が描かれているが詳細は不明である。25は見込みに吉祥文の人形寿字文が描かれた底部片である。高台際に圏線が１条描かれている。やや粗い貫入がみられる。26は端反りの小杯である。胴部に区画が施され、草花文が描かれている。高台際には２条の圏線が描かれている。見込みには２条の圏線が描かれ、中央に草花文が描かれている。また高台内には「福」字が描かれている。27～30は碁筒底を有する皿の口縁部片である。27、28は内外面に２条の圏線が描いてある。色調はやや緑味を帯びている。また、やや粗い貫入もみられる。29は外面の口縁部に波文を、胴部に蕉葉文が描いてある。内面には口縁部に１条、見込みに２条圏線が描かれ、幾何文が配してある。30は底部片である。底部近くに蕉葉文が描かれている。底部近くは無釉である。見込みには草花文が描いてある。色調は燃焼が不完全なためか、上釉が白濁している。31は稜花皿の口縁部片である。口縁部内面には波文を、外面には連点文が描いてある。32は見込みに草花文が描かれた底部片である。粗い貫入が入る。33は見込みに菊花文が描かれた底部片である。焼成、発色共に良い、34は飛龍文ないし玉取り獅子文が描かれたものと考えられる底部片である。見込みの上釉は細かな発砲がみられる。35は復元底部形6.2cmを測る。玉取り獅子が描かれた底部片である。焼成が不完全なためか、胎土はやや吸水性があり、色調は白濁しており、高台内では釉が完全に溶融していない。36は復元底部形13.2cmを測るものである。焼成が不完全で白濁していて文様等は不明である。37はくらわんか手のものであると考えられる。復元口径14.4cm、



第21図　歴史時代の出土遺物（3）

器高３cm、復元底部形8.6cmを測るものである。

4　陶　器

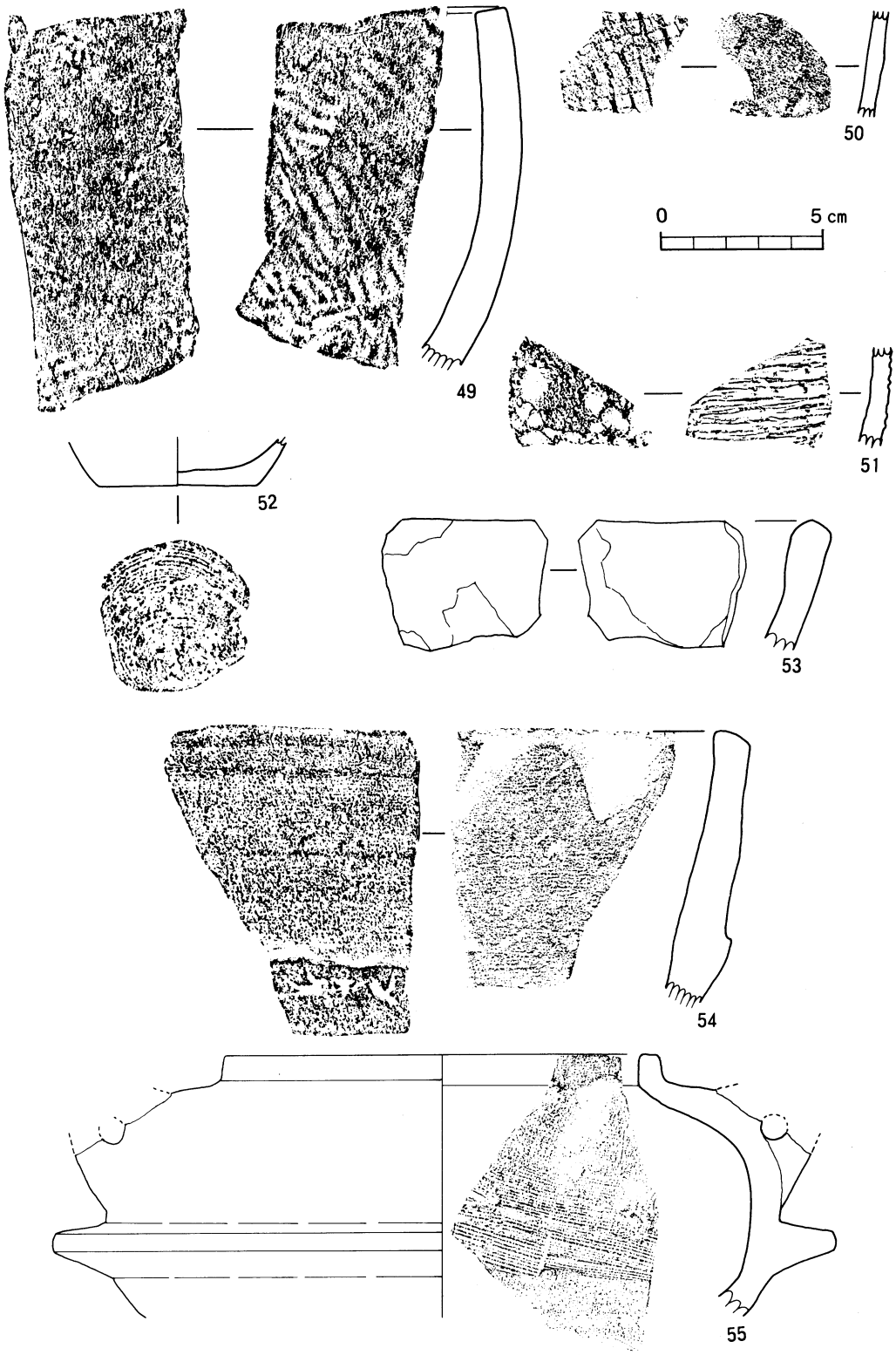
陶器は、碗、鉢、甕、壺、摺鉢等である。すべて表土中からの出土である。39は唐津焼き碗の底部片で、高台径3.8cmを測る。緑灰色の釉を薄くかけたもので、底部近くは土見せが行われている。見込みには目土が３ヵ所見られる。高台はヘラ削り出しで、片高台である。胎土は砂粒を多く含む。40は復元口縁径27.6cmを測る鉢の口縁部片である。無釉であるが、胎土には鉄分を多く含むためか、吹き出し釉が斑点状に見られる。口唇部はほぼ水平で凹線が２条めぐり、内側は稜線状となる。色調は暗茶褐色を呈する。41は甕の口縁部片である。頚部に１条の凸帯をめぐらされ、それ以下に暗緑色の釉が内外にかけられている。凸帯以上の口縁部は無釉である。胎土に小礫を含む。42は備前焼の壺の口縁部片である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口唇部は玉縁状となる。無釉であるが、頚部に自然釉がかかっている。内外面の色調は暗茶褐色を呈する。43はやや薄手の耳付き壺の肩部片である。外面に水挽痕を残し、内面には剥落がみられる。色調は暗茶褐色を呈する。44はやや厚手の耳付き壺の肩部片である。肩部にくらべ口縁部は薄く、やや直口気味である。色調は外面暗褐色、内面灰色を呈する。無釉であるるが、自然釉が薄くかかっている。45は備前焼摺鉢の口縁部片である。口縁はほぼ垂直に立ち上がるもので、３条の凹線がめぐらされている。口縁部下は稜線状となる。無釉であるが、自然釉がかかっている。色調は暗茶褐色を呈する。46は胴部破片である。外面に横位の櫛描文を残し、内面には同心円叩きを残している。無釉であるが、自然釉が一部にかかっている。内面は無釉で、黒褐色を呈する。48は甕の底部片である。内外面には擦痕を残す。色調は外面茶褐色、内面灰色を、断面では茶褐色を呈する。49は鉢の口縁部片である。焼成が不完全なため須恵質を呈す。内外面に叩き痕が残っている。色調は赤褐色を呈する。

5　須恵器

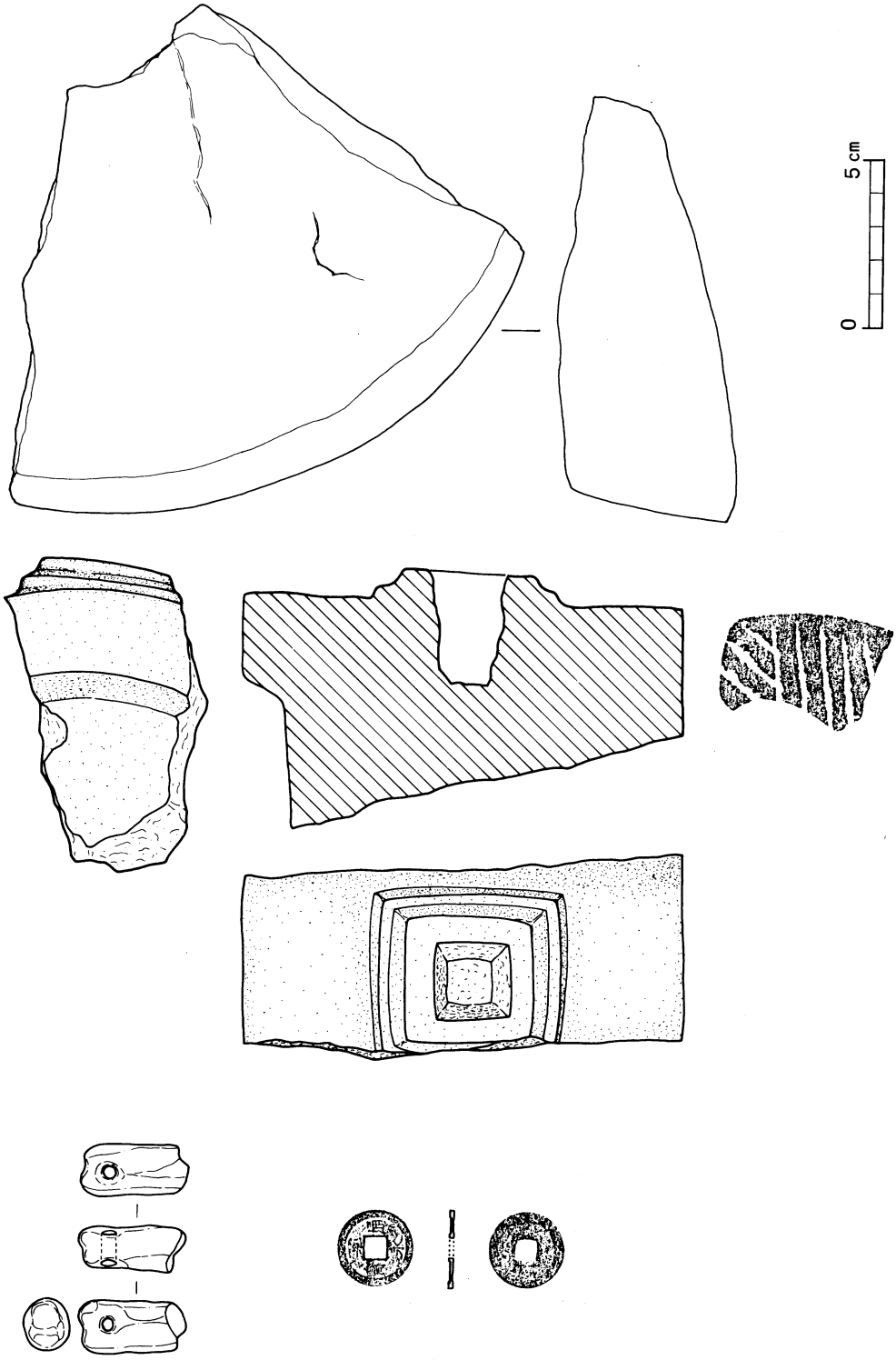
50、51は須恵器片である。50の外面は格子叩き、内面は同心円叩きが残っている。51は外面が平行叩きである。内面は剥落している。共に暗灰色を呈する。

6　土師器

52は土師器皿である。灯明皿としての利用が考えられる。底部径4.9cmを測る。底部は糸切り底である。色調は茶褐色を呈する。53は土師器の鉢ないし盤の口縁部片である。口縁は直口気味で口唇部に向かってやや厚くなる。色調は茶褐色を呈する。54は甕の口縁部片である。やや内湾気味に開く。外面には横位のハケ調整が施されており、ススの付着がみられる。色調は外面が黒褐色、内面茶褐色を呈する。



第22図　下伊倉城跡の出土遺物（4）



第23図　下伊倉城跡の出土遺物（5）

7　瓦　器

55は瓦器質の羽釜の破片である。復元口縁径13.6cmを測り、高さ0.8cmの口縁部は垂直に立ち上がり、口唇部は平坦となる。胴部には幅1.8cmの鍔状の凸帯が巡らされている。肩部には取っ手が付いている。

8　その他の遺物

56は土師質の双孔棒状土錘の破片である。直径1.4cmの円柱状の端部に径4㎜の孔をもつものである。57は古銭である。径2.3cmを測る「寛永通寶」である。58は茶臼である。下伊倉城内からの表採遺物である。59は石臼の破片である。下伊倉城内での表採遺物である。上臼（雌臼）であり、下面には副溝が刻まれ、側面には方形の挽手の穴（一辺2.4cm、奥行き3.3cm）がある。砂岩製で丁寧な調整がみられる。60は五輪等の水輪の一部である。凝灰岩製である。塚の上部で採集したものである。大きさは不明である。

第5節　小　結

鹿児島県内における中世城館跡の考古学的な調査は諸開発等にともなって、昭和50年代頃から行われるようになった。加栗山遺跡（川上城跡[1]）、上ノ城跡[2]、村原（栫ノ原）遺跡（尾守ヶ城跡[3]）、平泉城跡[4]、中尾田遺跡（片城跡の一部[5]）、廻城跡[6]、苦辛城跡[7]、平山城跡[8]、鹿児島（鶴丸）城本丸跡[9]、城山山頂遺跡[10]、横川城跡[11]等である。

今回の調査は一級河川肝属川の支流である波見川及び和田川の河川改修に伴う調査であった。このため、60,000㎡の広さをしめる下伊倉城跡のうち調査を実施したのは全体からみてわずかなものである。

遺構について

遺構は溝、ピット、古道、濠、塚、井戸状遺構等が確認検出された。溝1は通路ないし排水溝としての性格も考えられるが一部だけの調査のため不明である。溝2は溝1と較べてやや大きく深いため曲輪を分ける空堀状のものの性格が考えられるものである。ピットは建物跡を想定できる検出の状況ではなかった。古道は城面での検出ではあったが、明確な時期を把握するまでにはいたらなかった。濠は西側外濠が旧河川を利用して構築したものであることが確認できた。しかし、東側の濠については後世に水田として開発、利用されているため濠の法面は内濠の西側法面のみであった。井戸状遺構は湧水面までの掘り込みではなかったため、ある種の軍事施設や貯蔵施設等のものを考えねばならないだろう。塚は古墳としての可能性が強いものであるが、今後の再調査がまたれる。

遺物について

遺物の出土量もさほど多くはなかったが各種のものがある。出土遺物の種類は青磁、白磁、染付、備前焼、土師器、羽釜等である。これらのうちあるものは中国からのものもある。日本産のものでは備前焼き等の県外産のものもある。時期を知るものは青磁、白磁、備前焼の摺り

鉢であろう。青磁では鎬蓮弁文のものが14世紀頃のもの、稜花皿及び白磁の皿が15世紀後半から16世紀の年代が考えられている[12]。染付等でも蕉葉文、人形壽字文等が見られ碁筒底等の器形から16世紀の年代が考えられる。備前焼摺鉢も口縁部が長く肥厚するものであり、備前摺鉢の編年のⅣ～Ⅴ期に属し[13]、南北朝から江戸時代初期の年代が考えられる。

以上のことから、一部14世紀のものが含まれるが、主体は16世紀のものである。下伊倉城の築状時期については文献等の資料が少ないためはっきりしないが、この時期に利用されていたことは把握できるものである。なお、城内にある古石塔の銘にある永録９年はこの付近一帯に勢力を持っていた肝付氏が島津氏との争いにより肝付氏の居城である高山城が落城した年でもある。下伊倉城跡からの焼けた軽石の出土等から肝付氏の勢力傘下にあって落城したものであろうことが考えられる。

また、下伊倉城の旧態は高山総絵図（高山町立歴史民俗館所蔵）をみると大きく蛇行した肝属川が描かれており、今に残る二重の濠と併せて三重に囲まれた鹿児島県下においては数少ない平城である。

今回の調査は、全体に対して一部の調査であり、確認調査的なものであったためその全体像を把握するまでには至らなかったが、これを契機にこの城に対する研究が進んでいくものと考える。

参考文献

1）　鹿児島県教育委員会　「加栗山遺跡」　鹿県埋文報（16）　1981

2）　加世田市教育委員会　「上ノ城遺跡」　加世田市埋文報（２）　1980

3）　〃　「村原（栫ノ原）遺跡」　加世田市埋文報（１）　1977

4）　大口市教育委員会　「平泉城跡」　大口市埋文報（１）　1982

5）　鹿児島県教育委員会　「中尾田遺跡」　鹿県埋文報（15）　1981

6）　河口貞徳、本田道輝　「廻城」　1984

7）　鹿児島県教育委員会　「苦辛城跡」　鹿県埋文報（27）　1983

8）　川辺町教育委員会　「平山城跡」　川辺町埋文報（１）　1984

9）　鹿児島県教育委員会　「鹿児島（鶴丸）坂本丸跡」　鹿県埋文報（26）　1983

10）　国分市教育委員会　「城山山頂遺跡」　国分市埋文報（２）　1985

11）　横川町教育委員会　「横川城跡」　横川町埋文報（１）　1987

12）　大橋康二　「15・16世紀における日本出土の青花磁に関する編年試案（11）」白水８　1981

13）　伊東晃他　「焼締古陶の雄」日本陶磁全集10　1977

第６章　下伊倉遺跡の調査

第１節　下伊倉遺跡の概要

前年度の確認調査で弥生時代の遺物包含層が検出されたＣ、Ｄ－５区から16区までの範囲について緊急発掘調査を実施した。調査地は、現に使われている農道とこれに平行する拡幅計画地部分からなるが、初めに、現農道南側の拡幅計画地部分から調査を開始した。その後、農道部分の調査に移った。

グリットは10ｍを一区画としているが、調査範囲がカーブしており、Ｃ区とＤ区を区別して呼称することは、当該調査ではさほど意味をなさないところから、下伊倉遺跡の調査区は東西の５～18区というグリット呼称で記述することにする。

下伊倉遺跡の層位は第４章でふれたように、表層の下は第Ⅴ層であり第Ⅱ～Ⅳ層はない。第Ⅴ層上面では歴史時代の溝状遺構が四本検出された。弥生時代の遺物は第Ⅶ層を主体として、ほぼ全面に確認された。遺物は２ヵ所の集中部が認められた。また弥生時代の溝状遺構が二本検出され、その１つからは土器片が多量に出土した。

今回調査を実施した部分は微高地の縁辺部にあたるわずかな面積であり、遺跡の主要部は南側に広がると推定される。

第２節　弥生時代の遺構

弥生時代の遺構として溝状遺構が二本検出された。両者は共に調査区域の西側で８区に隣接して検出された。またわずかではあるが、南側で切り合っている状況が確認され、若干の時期差を有しているものと考える。

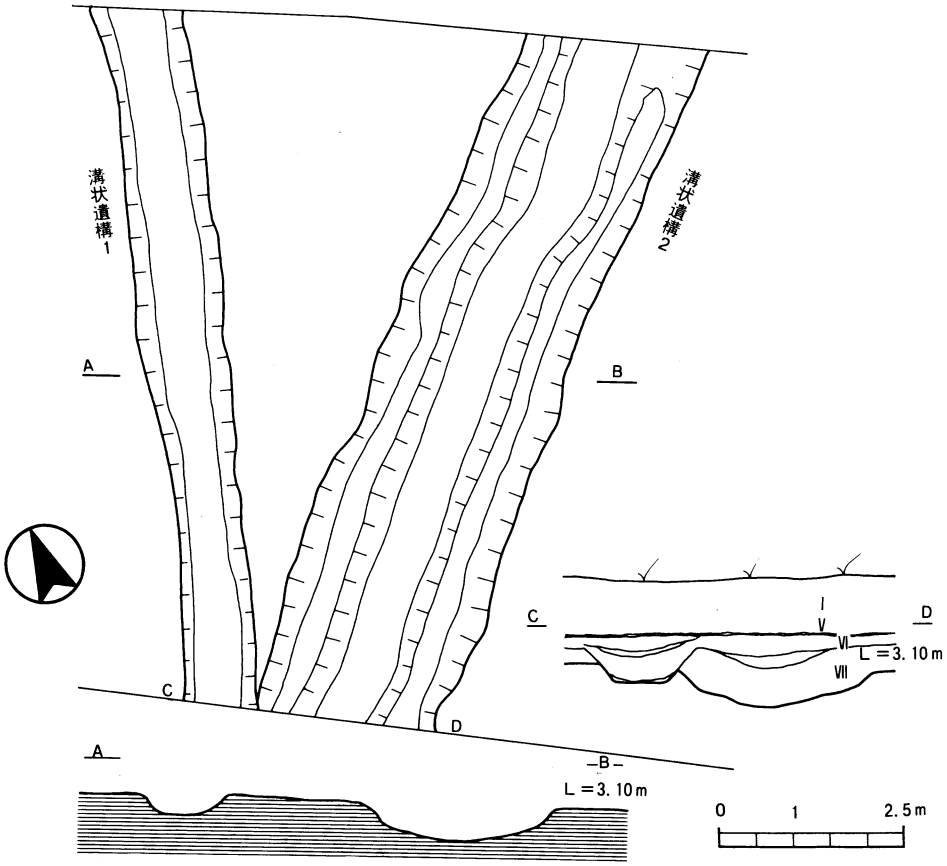
溝状遺構１（第24・25図）

７・８区で検出された。幅は約100～120cm、検出面からの深さは約25cmを測るが、土層断面から観察すると掘り込み面からの深さは約40cmである。溝の下面はほぼ平坦であり、側面の立ち上がりも丸みを帯びず直線的である。方向はほぼ南北方向に走り、調査区域の南側で溝状遺構２と接し、切り合い関係にある。埋土の大部分は第Ⅵ層の黒色土であり、最下面に第Ⅶ層の暗褐色土層がみられる。黒色土の上にはレンズ状に灰色コラが堆積していた。

埋土中から26点の遺物が出土した。遺物は全て土器片で、甕形土器の破片等が認められたが細片のため図化できなかった。出土土器の胎土及び焼成は周囲の第Ⅶ層から出土したものとほとんど大差は無く、ほぼ近接あるいは同時期に近いものと思われる。

溝状遺構２（第24・25図）

溝状遺構１に近接した位置で８区で検出された。埋土は第Ⅶ層暗褐色土層であり、上層の第Ⅵ層黒色土との間には赤褐色硬質土がレンズ状に堆積しているのが認められた。溝底面に近い部位では砂質が強くなり、軽石の小礫が多く混在しており、当時水が流れていた状況を示していた。検出面からの深さは約50cmと溝状遺構１よりはかなり深く、第Ⅺ層灰褐色粘質土層まで掘り込まれていた。土層断面を検討したが掘り込み面は把握できなかった。溝底面は凹レンズ



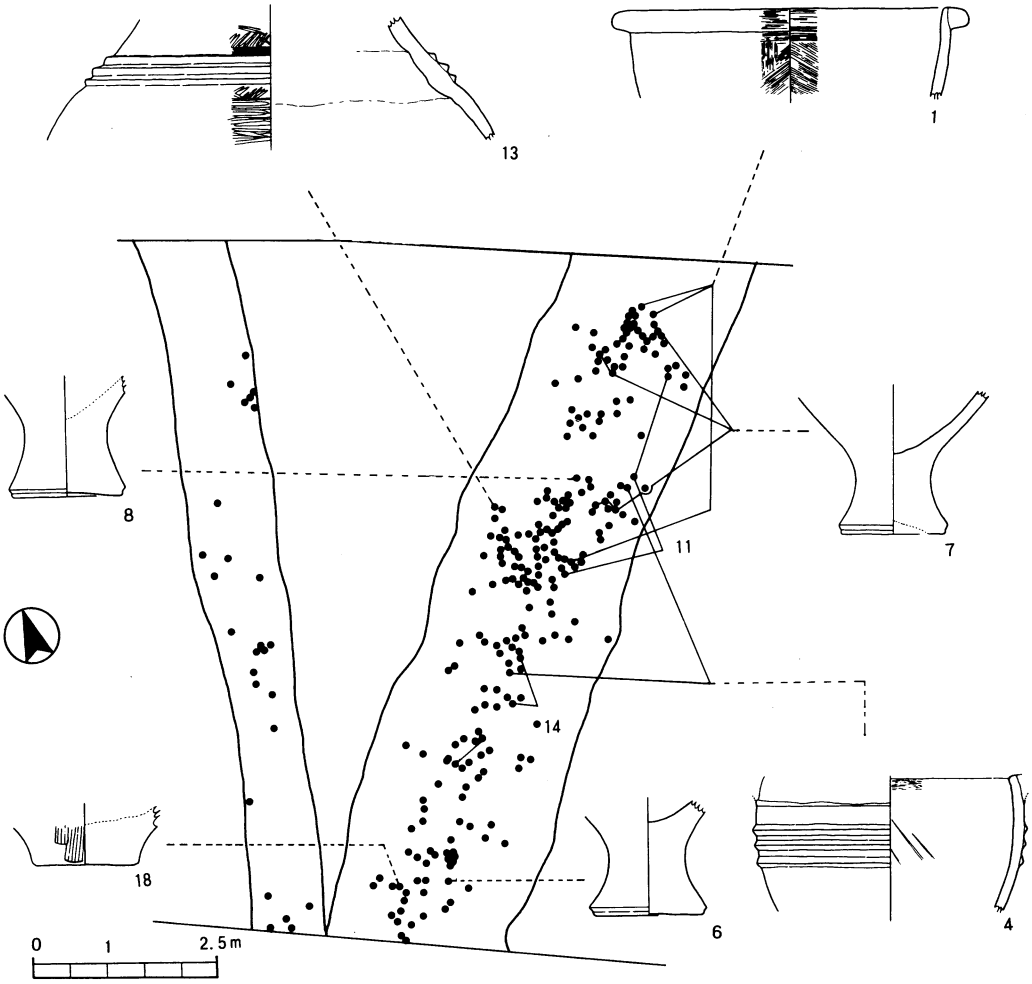
第24図　溝状遺構１・２平・断面図

状に丸味を帯び、両側でやや平坦になり、その後なめらかに立ち上がる。溝幅は約2.5mであり、南南西方向に伸びている。南側では溝状遺構１に切られている。溝状遺構１と同様に南側方向に深くなっている。

出土遺物

溝状遺構２からは237点の遺物が出土した。遺物は甕形土器と壺形土器であり第25図に示すとおりの接合関係が得られている。

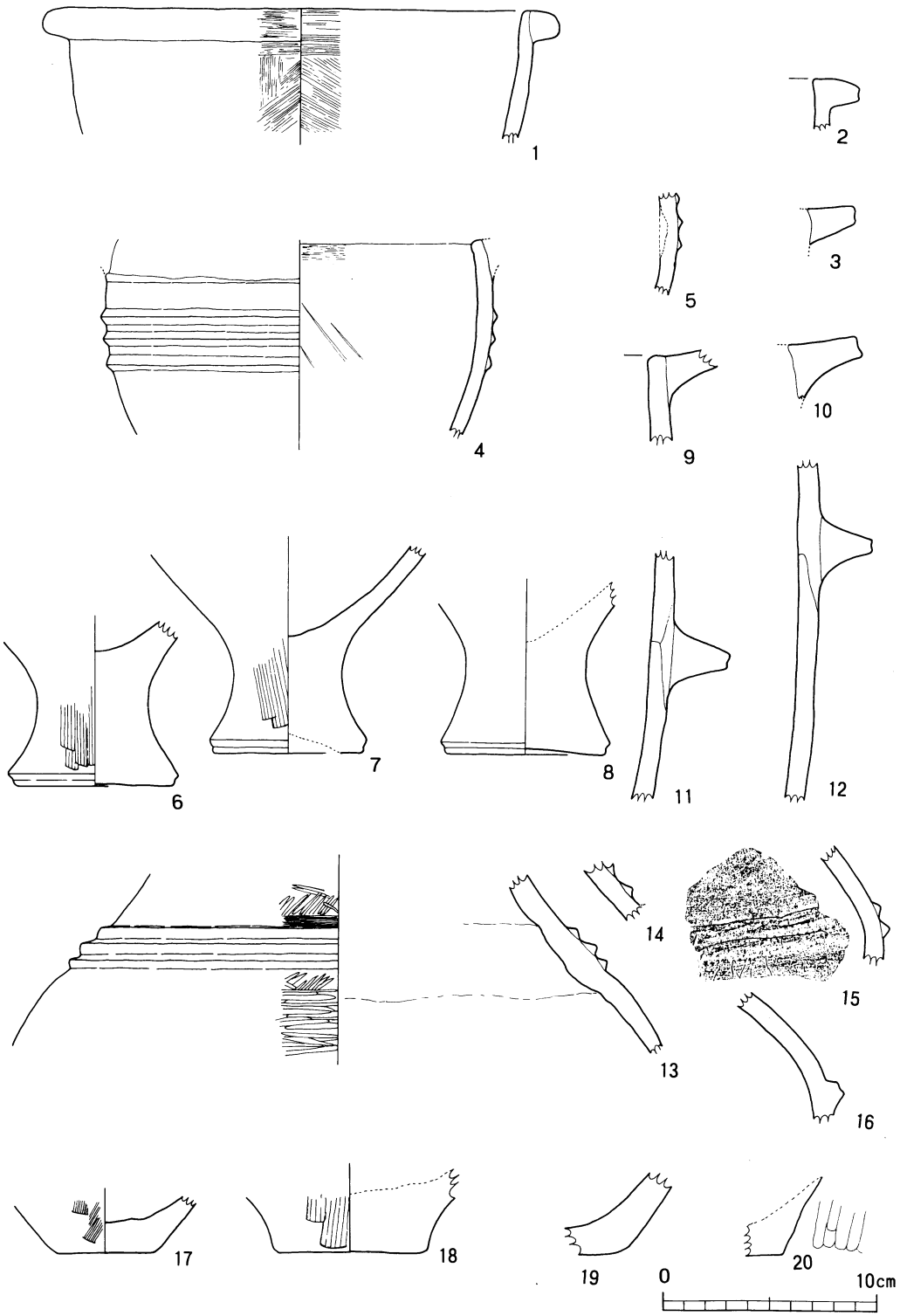
第26図１～８は甕形土器である。１は復元口縁径24cmで、口縁部は逆Ｌ字状に外反し、端部は丸味を帯びる。内外面ともハケ目調整が施されている。２はやや垂れ下がり気味の逆Ｌ字状口縁をもつもので、端部はやや凹む。３は口縁端部が接合面より離れたものである。４はやや丸味を帯びる胴部上位に三角突帯を三条廻らし、逆Ｌ字状に外反する口縁端部は接合面から取



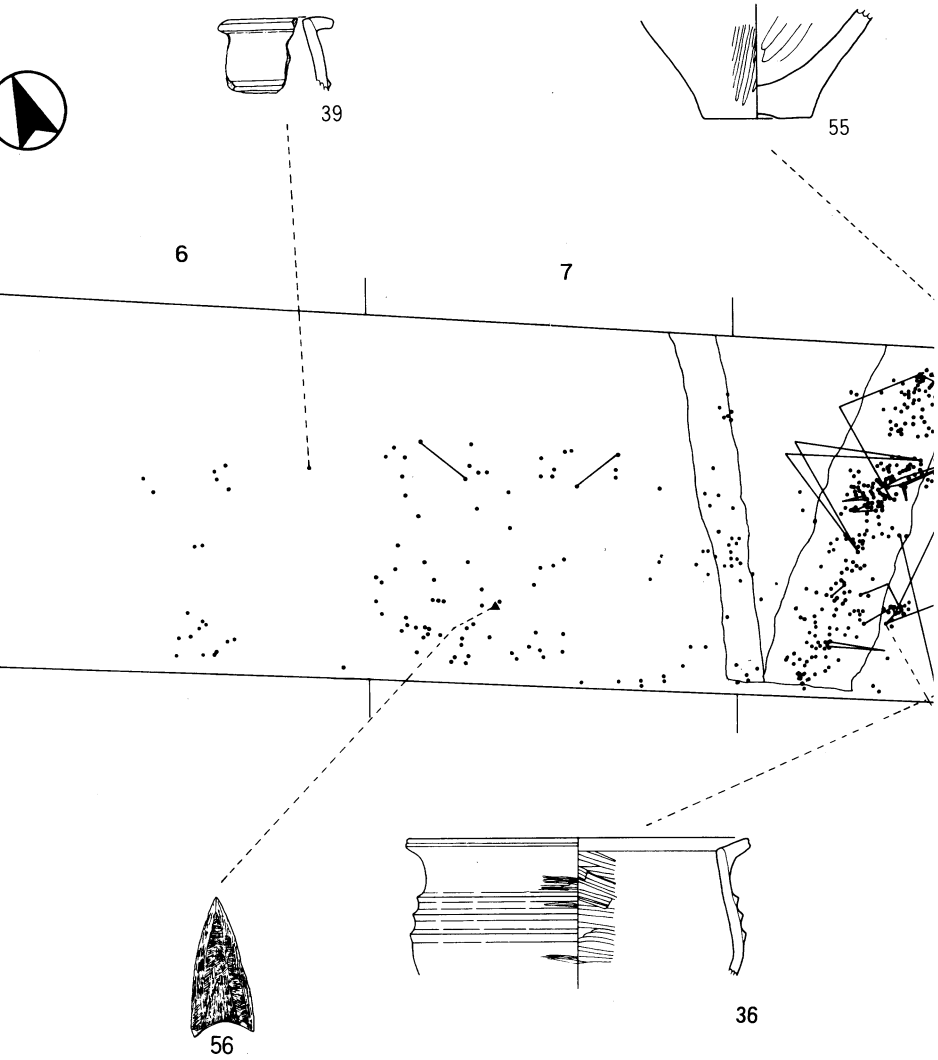
第25図　溝状遺構１・２内遺物出土分布図

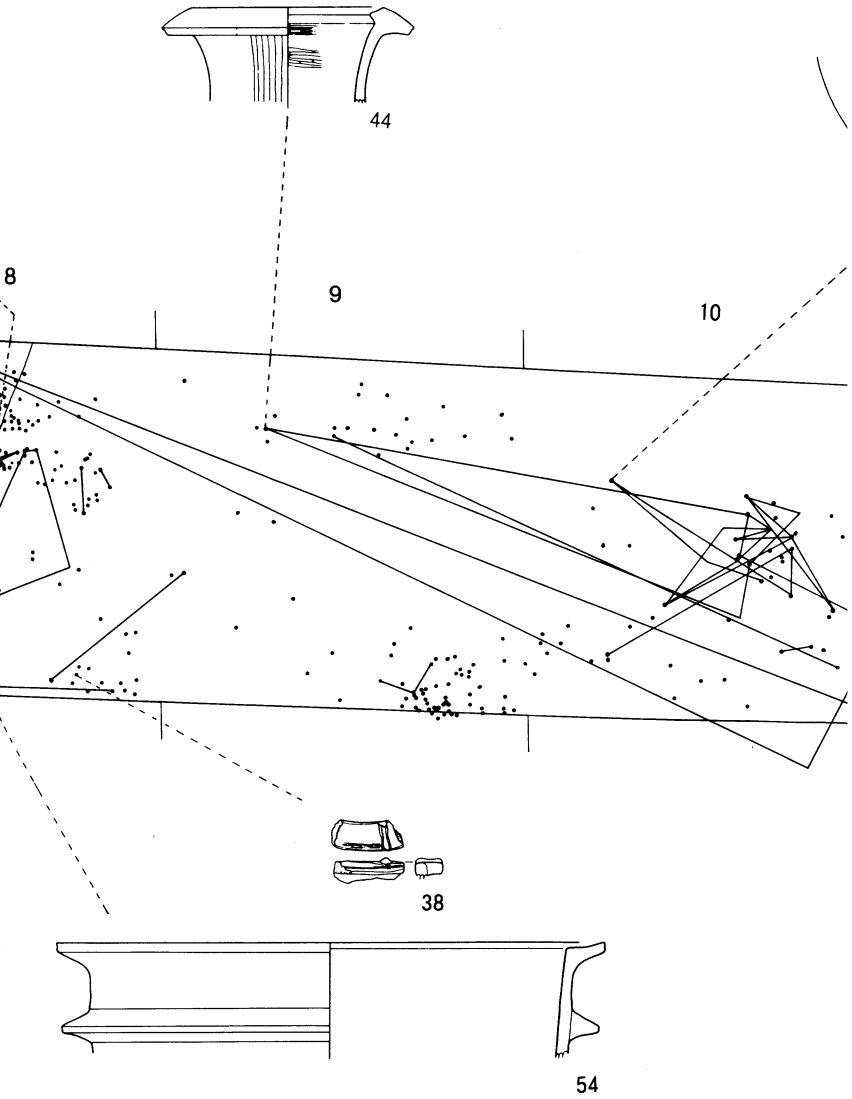
れている。器面調整は内外面ともハケ目調整が施される。５も胴部上位に三条の三角突帯を廻らすものである。６～８は甕形土器の底部で全て充実した脚台である。６は底部径7.5cmを測り、底面は平坦である。裾の端面は凹線が施される。器面調整はハケ目調整である。７は底部径７cmを測り、裾の端面状況及び器面調整は６と同様である。８は６・７と異なり底面は平坦でなく、やや上げ底となる。裾の端面は同様に凹線状となる。９～12は大型甕形土器であり、同一個体と思われるものである。口縁部は直口気味から逆Ｌ字状に外反し、口縁部の下位には断面台形状突帯を廻らす。口縁部端部及び突帯端部は凹む。器面調整は内外面ともナデ調整及びハケ目調整が施される。

13～20は壺形土器である。13は頸部に三条の三角突帯を廻らすもので、外面は横位及び斜位のヘラミガキによる細かい調整が施される。内面には輪積み痕が観察される。14も三角突帯を廻らす頸部である。15は胴部に二条の三角突帯を廻らすもので、器面調整は内外面ともナデ調整である。16は胴部に一条の断面台形突帯を廻らすもので、その突帯端面は凹む。内外面ともナデ調整である。17～20は壷形土器の底部であり、17は薄手で直線的に立ち上がり、18は厚手であり、外湾気味に立ち上がる。共にハケ目調整が施されている。

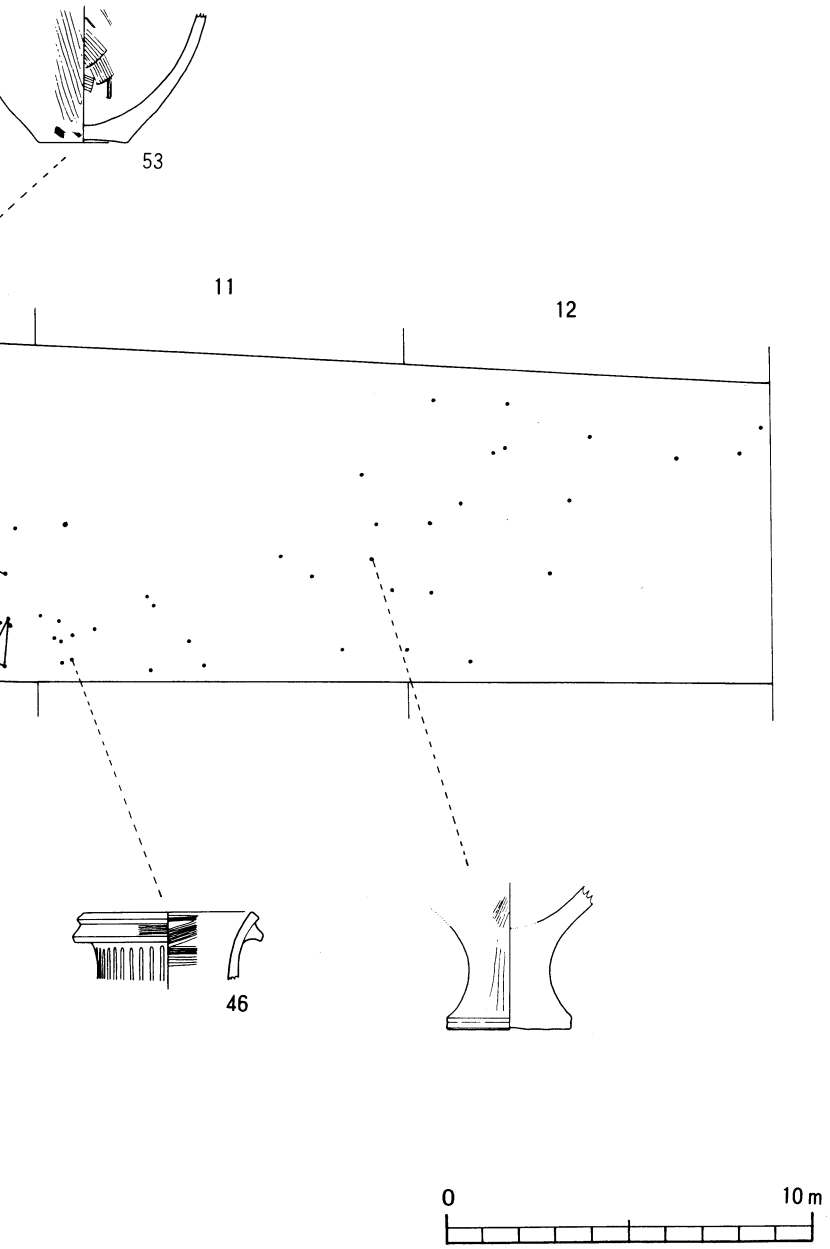


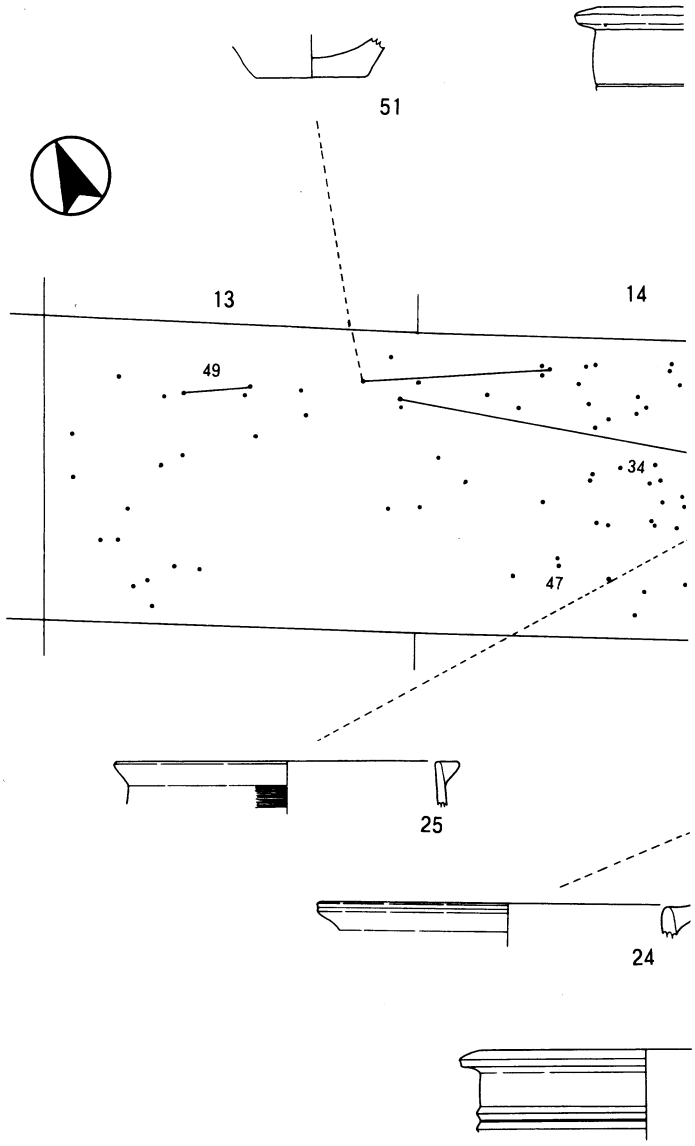
第26図　溝状遺構２出土遺物

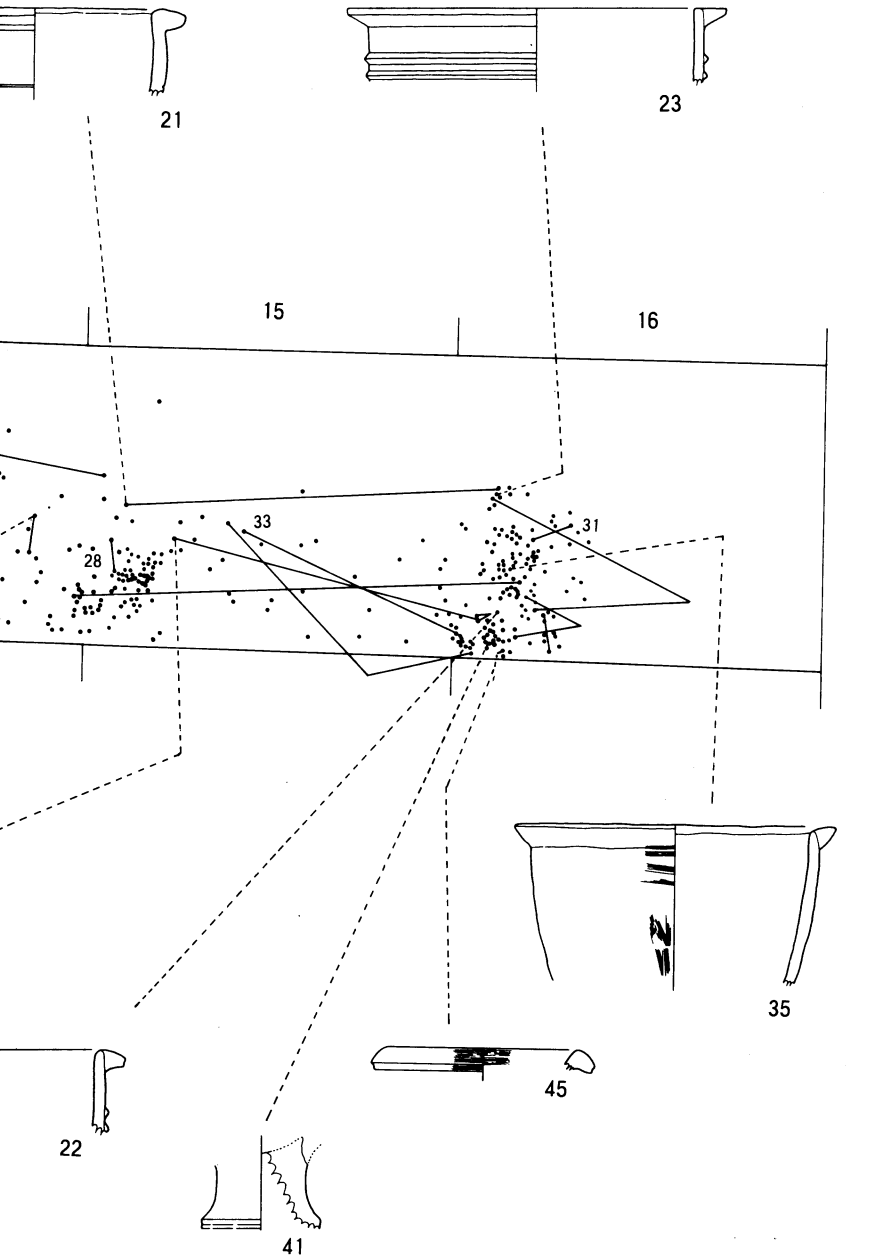

39
55
6
7
56
36

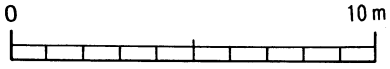


第27図　遺物出土分布図（1）


53
11
12
46
0
10 m


51
13
14
49
34
47
25
24





第28図　遺物出土分布図（2）

第３節　弥生時代の遺物

(1)遺物分布状態

弥生時代の遺物は西側でわずかに第Ⅵ層下半で出土したほかは第Ⅶ層を主として出土した。出土範囲は６区から16区にかけて広く出土し、１区～６区西半部は第Ⅶ層の遺物包含層が欠除していた。

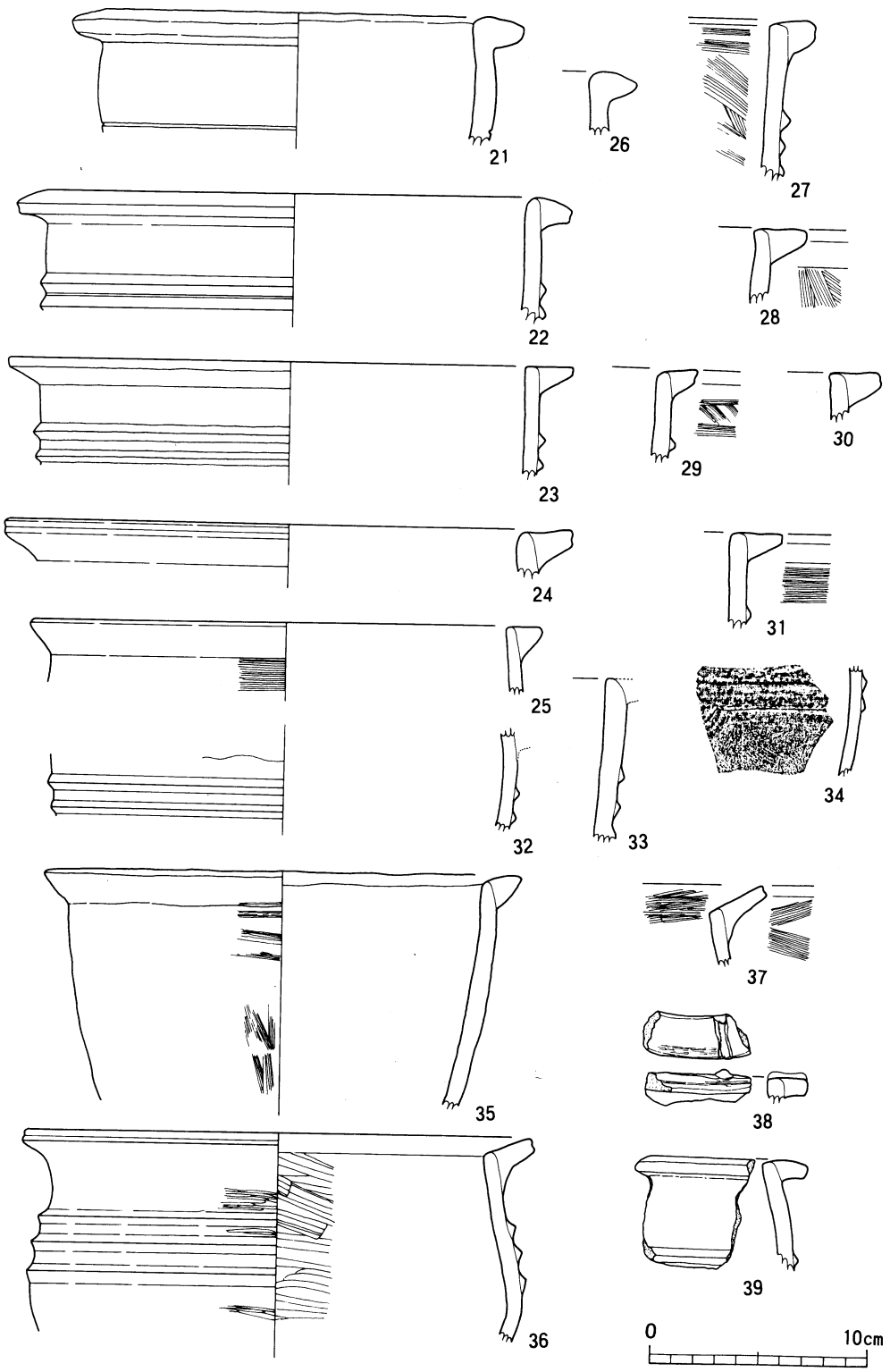
また遺物は全体に万遍なく出土しているのではなく、分布密度の濃い部分と疎になる区域が存在し、二ヶ所の集中部が認められた。西側の集中部は６区から溝条遺構を狭んで、10区までのもので、９・10区において接合関係がみられる。東側の集中部は14区から16区にかけて多くの遺物が分布しており、特に15・16区で接合関係が多く得られた。

出土した遺物には甕形土器、壷形土器、大型甕形土器、磨製石鏃、軽石製品などがあり、多量なものであったが、土器片は細片や胴部破片が多く、そのため図化できたものは多くない。

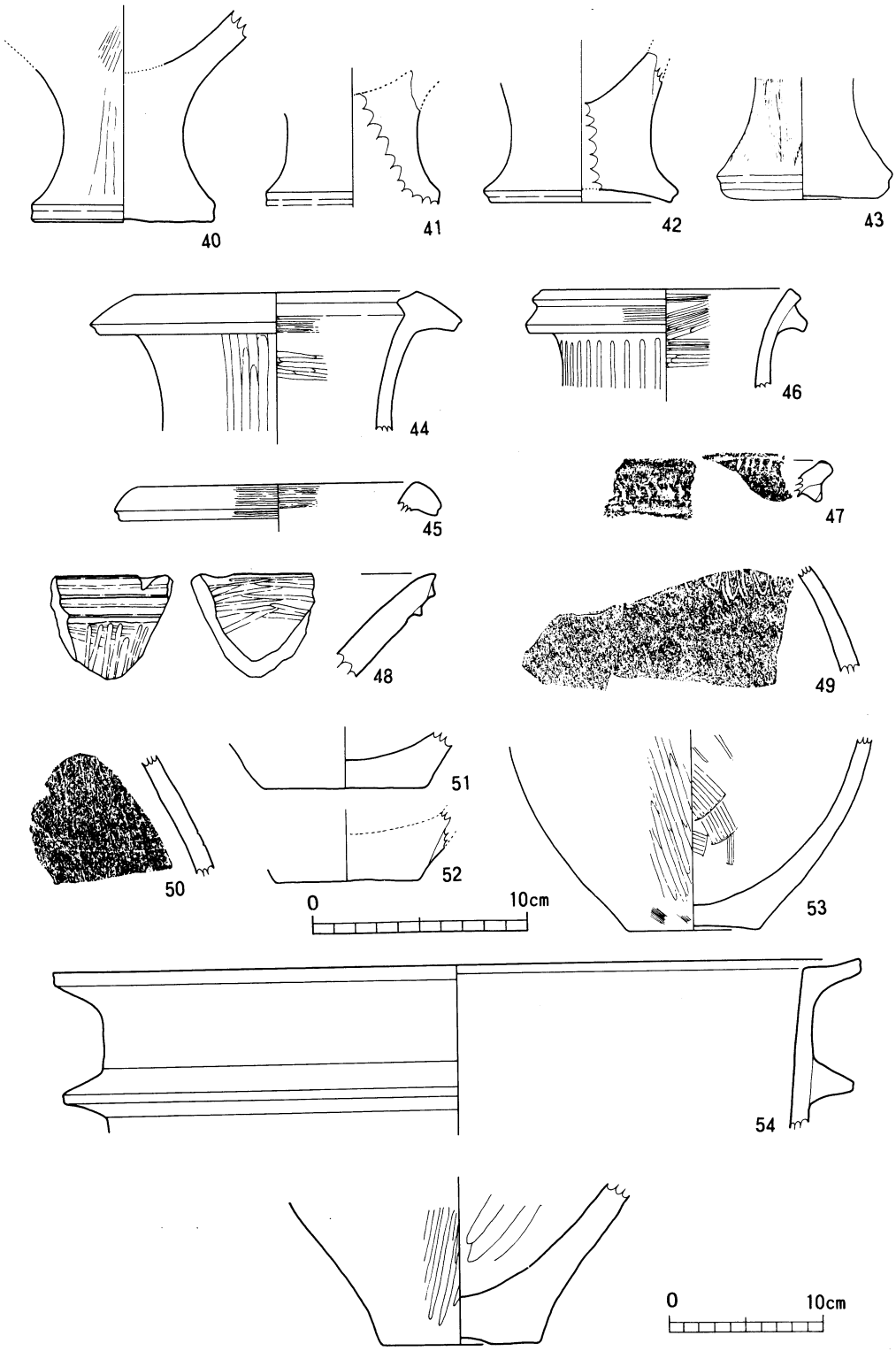
(2)出土土器

第29図21～39は甕形土器である。21は復元口縁径21cmで、口縁部は逆Ｌ字状に外反し、端部はやや丸味を帯びる。胴部上位には細い沈線を廻らしている。器面調整は外面がハケ目調整後ナデ、内面はナデ調整による。22は復元口縁径が約25cmであり、やや垂れ下がり気味の逆Ｌ字状口縁をもつもので、胴部上位に二条以上の三角突帯を廻らす。口縁端部はわずかに凹む。内外面ともナデ調整が施される。23は復元口縁径約26cmで、逆Ｌ字状の口縁上面は平坦であり端部も平坦に仕上げている。胴部上位には二条以上の三角突帯が廻る。24・25も口縁部は逆Ｌ字状に外反するものであるが、24は端部に凹線が廻り、25の端部は丸味をもつ。26～31は逆Ｌ字状になる口縁部であり、26のようにやや垂れ下がるものや、27のようにやや上がるもの、あるいは平坦になるもの等がみられる。32は胴部上位に二条以上の三角突帯が廻るもので、口縁は接着面で剥落している。33も同様に口縁は接着面で剥落している。34は甕形土器の胴部片と思われるものであり、三角突帯が二条認められるほか、最下の三角突帯からわずかではあるが「ノ」の字状に三角突帯が付けられている。小片のためその突帯がどういう構成になるか不明である。35は復元口縁径22cmを測り、口縁部は逆Ｌ字状に外反し、やや上向きで「く」の字口縁に近づく。胴部には三角突帯は付かない。外面はハケ目器整後ナデ調整、内面はナデ調整を行っている。36は胴部が張り、口縁部は内傾し逆Ｌ字状に外反する口縁は上がり、端部面は平坦で凹線が廻る。胴部上位には三条の三角突帯が廻る。器面調整は外面が幅の狭いヘラミガキ調整、内面はやや太いハケ目調整がみられる。37も口縁部は内傾し、「く」の字状に開く口縁部はやや長く、平坦状となる端部は凹む。器面調整は内外面ともハケ目調整である。38は逆Ｌ字状の口縁上面の平坦な口唇部に張り付け突帯をもつもので端部はまるくなる。甕形土器よりは壷形土器の口縁部である可能性が高い。39はやや垂れ下がり気味の逆Ｌ字状口縁をもつもので、胴部上位に三角突帯を廻らす。これ１点のみ色調は暗茶褐色を呈し、表裏両面及び割れた断面部はかなりローリングを受けている。

第30図40～43は甕形土器の充実した脚台である。40の底径は8.5cmを測り、底面は平坦であ



第29図　弥生時代の遺物（1）



第30図　弥生時代の遺物（2）

るが、中央部がわずかに凹む。裾部には凹線がはしる。器面調整は外面がハケ目後ナデ調整、内面はナデ調整による。41・42は胴部が接着面ではずれたものであり、42は上げ底状となる。43は表層出土のものであり、底面はわずかに上げ底状となり、底面からの立ち上がり部は丸味をもち、凹線状の沈線が廻る。外面に細いハケ目調整が施される。

44～53は壷形土器である。44は口縁径17cmで、口縁部は垂れ下がり気味に外反し、口縁内側に三角形状の突起を有する。器面調整は頚部外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキ調整である。45もやや垂れ下がり気味の逆L字状口縁をもつものである。46は復元口縁径が15cmで、外反した口縁下位に突帯を廻らし二叉状口縁を呈するものである。頚部にはヘラによる暗文が施されている。内面はヘラミガキ調整である。47も二叉状口縁を呈するものであるが、口唇部内側と口縁下位の突帯にヘラ状施文具による刻み目が施される。48は大きく外反する口縁部直下に二条の三角突帯を廻らす。器面調整は内外面ともヘラミガキである。49は肩部に櫛描波状文を施したもので、50は胴部に細い沈線を二条廻らす。51・52は平底の底部である。53はやや上げ底状の底部で、器面調整は外面がヘラミガキ、内面はハケ目調整である。

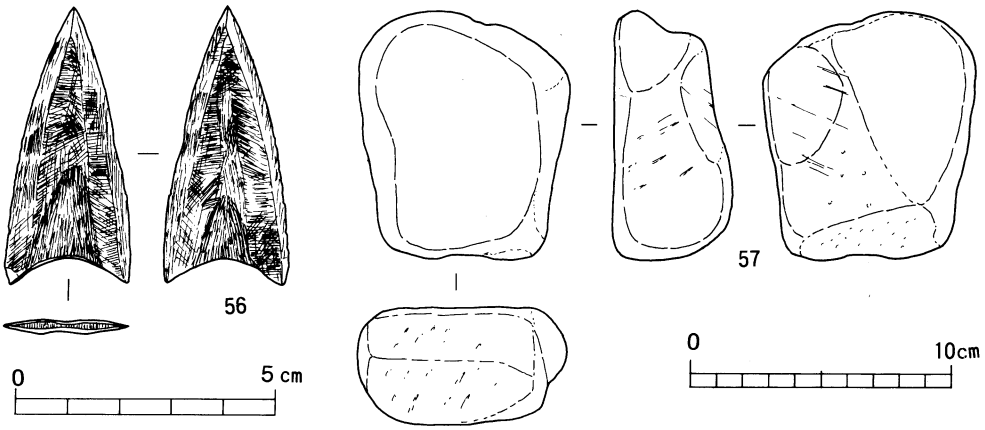
54は大型甕形土器で復元口縁径は53cmを測る。逆L字状に外反する口縁下位には突帯が廻り外面の器面調整はハケ目、内面はナデ調整である。55は大型甕形土器の底部と思われるもので底部中央部は凹む。外面はヘラミガキ、内面はハケ目調整が施されている。

(3)石器

第31図56は磨製石鏃であり唯一の石器である。長さ5.3cm、幅2.4cm、最大厚3㎜、重さは4.5gを測る。全体に入念な研磨が施され薄身である。研磨は平坦な中心面と両側縁辺が区別され、最後に着装のため表裏とも基部近くを凹レンズ状に仕上げて溝をつくる。基部は弧状のえぐりをもつ。石材は頁岩である。

(4)軽石製品

これも1点のみの出土であり57は、軽石礫で、部分的に磨いた痕跡が認められる。最大長は9.5cm、最大幅8.1cm、最大厚4.6cm、重さは115gを測る。

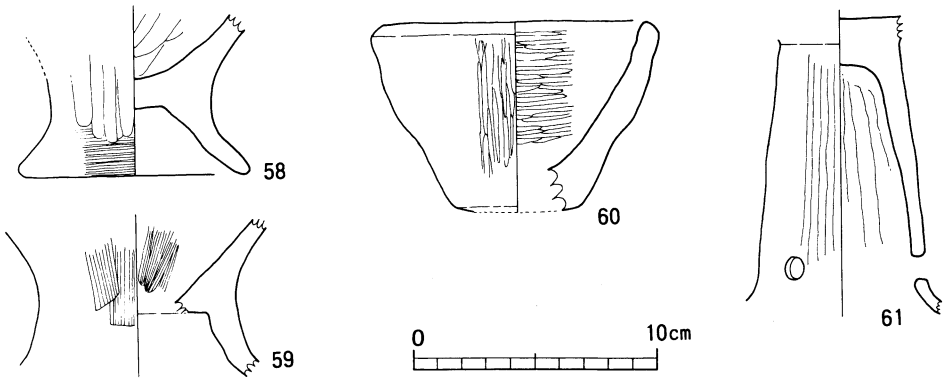


第31図　弥生時代の石器・軽石製品

第４節　古墳時代の遺物

表層から出土したものには古墳時代のものと思われる土器もみられた。

第32図58は甕の底部であり、脚台は大きく開き、端部は丸味をもつ。器面調整は外面の脚台下半は横ナデ、上半及び内面はヘラ状調整具によるナデが施されている。59も甕の底部であり、内外面ともハケ目調整が行われている。60は小型の鉢であり、復元口縁径は約11cmを測る。器壁はやや厚みがあり、口縁は内湾気味である。器面調整は、外面は縦方向、内面は横方向のヘラケズリである。61は高坏の脚部であり、筒部下位に三ヶ所の穿孔が施されている。



第32図　古墳時代の遺物

第５表　弥生時代土器観察表

石…石英，長…長石，角…角閃石，雲…金雲母

遺物番号	出土区	層	器種	胎土	焼成	器面調整 外面	器面調整 内面	備考	遺物番号	出土区	層	器種	胎土	焼成	器面調整 外面	器面調整 内面	備考
1	8・10	溝	甕	石・長・角・雲	良好	ハケ目	ハケ目		29	16	7	甕	石・長・角・雲	良好	ハケ目・ナデ	ナデ	
2	8	溝	甕	石・長・角・雲	良好	ハケ目	ハケ目		30	14・16	7	甕	石・長・角・雲	良好	ナデ	ナデ	
3	8	溝	甕	石・長・角・雲	良好	ハケ目			31	16	7	甕	石・長・角・雲	良好	ハケ目	ナデ	
4	8	溝	甕	石・長・角・雲	良好	ナデ	ナデ		32	9	7	甕	石・長・角・雲	良好	ナデ	ナデ	
5	8	溝	甕	石・長・角・雲	良好	ハケ目	ハケ目		33	15・16	7	甕	石・長・角・雲	良好	ナデ	ナデ	
6	8	溝	甕	石・長・角・雲	良好	ハケ目	ナデ		34	14	7	甕	石・長・角・雲	良好	ハケ目	ナデ	
7	8	溝	甕	石・長・角・雲	良好	ハケ目・ナデ	ナデ		35	16	7	甕	石・長・角・雲	良好	ハケ目・ナデ	ナデ	
8	8	溝	甕	石・長・角・雲	良好	ナデ			36	8	6・7	甕	石・長・角・雲	良好	ミガキ	ハケ目	
9	8	溝	大甕	石・長・角・雲	良好	ハデ	ハケ目		37	9・10	7	甕	石・長・角・雲	良好	ハケ目	ナデ	
10	8	溝	大甕	石・長・角・雲	良好	ハケ目			38	8	7	甕	石・長・角・雲	良好	ハケ目	ナデ	
11	8	溝	大甕	石・長・角・雲	良好	ハケ目	ナデ		39	6	7	甕	石・長・角・雲	良好	ナデ	ナデ	ローリング
12	8	溝	大甕	石・長・角・雲	良好	ハケ目・ナデ	ナデ		40	7・8・11	7	甕	石・長・角・雲	良好	ハケ目後ナデ	ナデ	
13	8	溝	壺	石・長・角・雲	良好	ミガキ	ナデ		41	16	7	甕	石・長・雲	良好	ナデ		
14	8	溝	壺	石・長・角・雲	良好	ミガキ	ナデ		42	16	7	甕	石・長・角・雲	良好	ナデ		
15	8	溝	壺	石・長・角・雲	良好	ハケ目	ナデ		43	表採	表	甕	石・長・角・雲	良好	ハケ目		
16	8	溝	壺	石・長・角	良好	ナデ	ナデ		44	9・10	7	壺	石・長・角・雲	良好	ミガキ	ナデ	
17	8	溝	壺	石・長・角・雲	良好	ハケ目	ナデ		45	16	7	壺	石・長・角・雲	良好	ハケ目	ナデ	
18	8	溝	壺	石・長・角・雲	良好	ハケ目			46	11	7	壺	石・長・角・雲	良好	ミガキ	ミガキ	暗文
19	8	溝	壺	石・長・角・雲	軟弱				47	14	7	壺	石・長・角・雲	良好	ナデ		
20	8	溝	壺	石・長・角・雲	良好	ナデ			48	表採	表	壺	石・長・角・雲	良好	ミガキ	ミガキ	
21	15・16	7	甕	石・長・角	良好	ハケ目後ナデ	ナデ		49	13	7	壺	石・長・角・雲	良好	ナデ	ナデ	
22	16	7	甕	石・長・角・雲	良好	ナデ	ナデ		50	16	7	壺	石・長・角	良好	ハケ目・ナデ	ナデ	沈線
23	16	7	甕	石・長・角・雲	良好	ハケ目後ナデ	ナデ		51	13・14	7	壺	石・長・角	良好	ナデ	ナデ	
24	15・16	7	甕	石・長・角・雲	良好	ハケ目後ナデ	ナデ		52	8	7	壺	石・長・角・雲	良好	ナデ		
25	14	7	甕	石・長・角・雲	普通	ナデ	ナデ		53	10	7	壺	石・長・角・雲	良好	ミガキ	ハケ目	
26	16	7	甕	石・長・角・雲	良好	ナデ	ナデ		54	8	6・7	大甕	石・長・角・雲	良好	ハケ目	ナデ	
27	14	7	甕	石・長・角・雲	良好	ナデ	ハケ目		55	8	7	大甕	石・長・角・雲	良好	ミガキ	ハケ目	
28	15	7	甕	石・長・角・雲	良好	ハケ目	ナデ										

第５節　歴史時代の遺構

表土を取り除いた第Ⅴ層上面で、歴史時代のものと思われる溝状遺構が四本検出された。これらの埋土からは遺物が全く認められず、時期を決定することが困難であり、歴史時代とした。溝状遺構は10区から12区にかけてほぼ平行にはしるものが三本、13区に一本検出され、西側から３・４・５とした。

溝状遺構３

三本並ぶなかで最も西側にあり、最大幅330cm、最小幅185cmを測り他と比較して最も幅が広い。また両側のラインも他は直線的に平行しているのに対し、これは数ヶ所で張り出し幅が一定していない。底面は丸味をもち、中央部は一段低くなっている。検出面からの深さは約43cmである。埋土は青灰色土層を主とし、下部底面近くは砂質が強くなり、底面は赤褐色を呈し硬質化している。これらのことから、溝状遺構３は水が流れていたことが推定される。溝の方向はほぼ南北方向であり、南側が若干深くなっており、北から南に水が流れていたと想定される。埋土中から遺物は全く出土しなかった。

溝状遺構４

平均幅約95cmを測り、近接した三本の溝のなかでは最も狭いものである。埋土は青灰色土層であり、底面は平坦である。南側が若干深くなっている。検出面からの深さは23cmである。

溝状遺構５

最大幅110cmを測り、溝状遺構４と同様に底面は平坦で、埋土及び方向も同一である。また南側が同様にやや深くなっている。溝状遺構４と約170cm離れた位置に所在する。検出面からの深さは26cmである。

溝状遺構６

13区で検出された。南側の幅は38cm、北側の広い部分は80cmであり、中央付近の深さは６cmである。中央部の残りが良好で、南側及び北側はわずかに痕跡が残る程度であり、北側は確認することが困難であった。埋土は暗褐色土層であり、埋土中から遺物等は認められなかった。

第６節　歴史時代の遺物

歴史時代の遺物はすべて表土層からの出土である。遺物は青磁、白磁、染付、土師質土器、備前焼等である。

１　青　磁

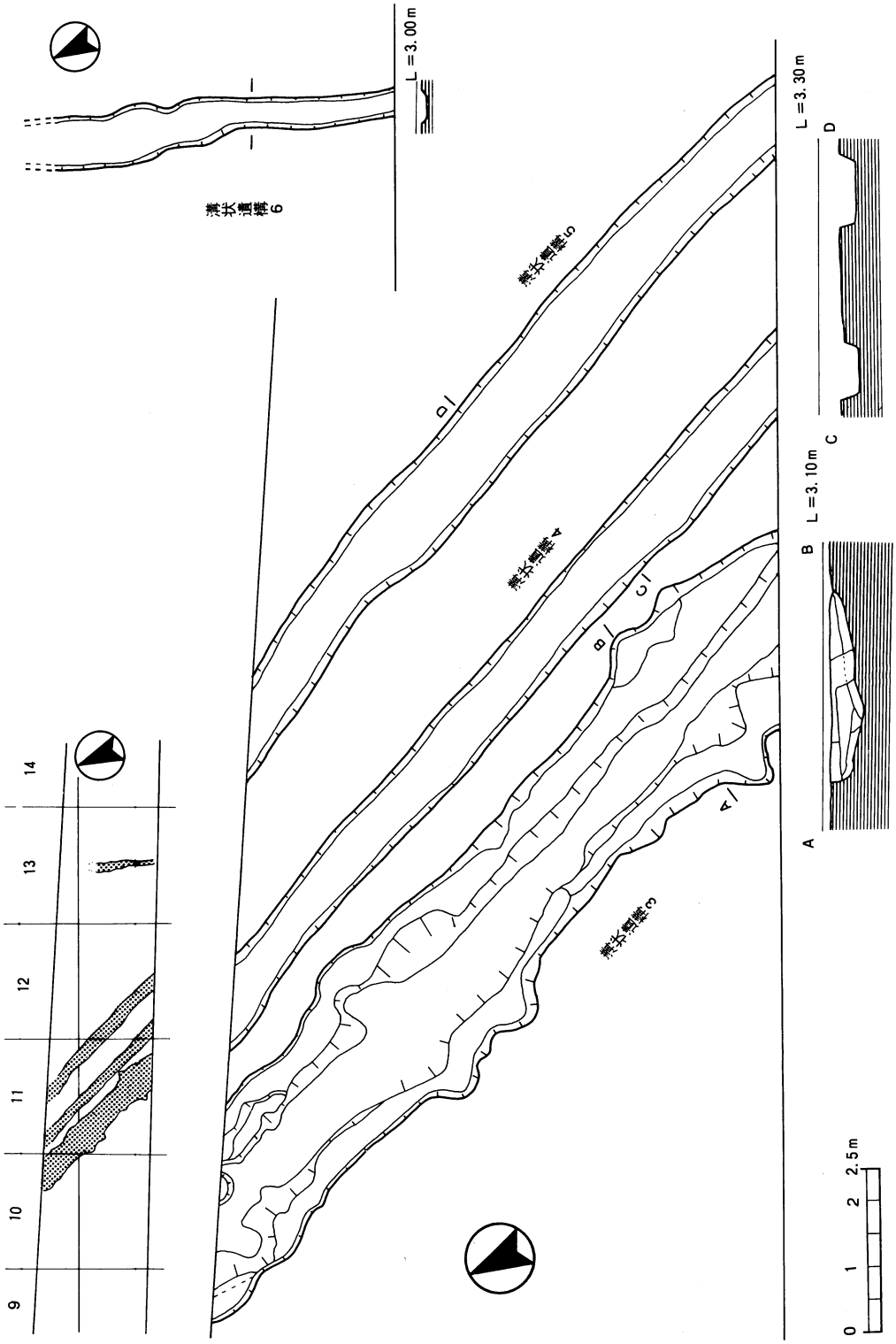
62は稜花皿口縁部片である。口縁部内面にはヘラ描線文を描いている。色調は青緑色を呈し、やや粗い貫入が入る。

２　白　磁

63は復元口縁径13cmを測る端反形の皿である。器高2.8cm、高台径7.8cmを測る。釉は完全に融けていないためかやや透明感に欠ける。無釉は畳付部分のみである。

３　染　付

64～74が染付である。これらは器形から65～67の碗と64、69～74の皿に分けられる。



第33図　歴史時代の遺構

64は端反の皿である。外面の口縁端部に圏線を１条、胴部に草花文を呉須で描く。見込みには口縁端部に圏線を１条描いている。

65～67は連子碗である。65、66が口縁部片、67が底部片である。65は口縁端部の内外面に圏線を２条づつ描き、胴部外面に点文（簡略化された花文）の連続文を描く。66も口縁端部の内外面に圏線を２条づつ描くが、胴部外面は梵字文の連続文を描く。67は見込みに２条の圏線を描き、その内部に点文（簡略化された花文）を同心円状に描き、外面は胴部に点文（簡略化された花文）の連続文を描き、高台際とその下位に２状圏線を描く。高台径は5.3cmを測る。65～67の上釉は青みを帯びるものである。

68は碗形の碗である。外面の口縁部には菱垣文様の圏文を描き、胴部には蕉葉文を連続して描く。見込みには口縁端部に２条の圏線を描く。上釉は発砲状態のままであり、表面はピンホール状となっており、色調もやや青みがかかる。

69～72は底部が碁筒底を呈するものである。69は外面の腰部に蕉葉文と２条の圏線を描き、見込みには２条の圏線と中央に十字花文を描く。外面にはピンホールがみられる。上釉はやや青みを帯びる。70は見込みには２条の圏線と花文を描く。中央部は上釉の上からさらに白土がのせられている。上釉は焼成が不十分なためか細かい発砲がみられる。また一部に貫入がみられる。71、72は見込みに人形寿字文を描くものである。71の外面には口縁端部と腰部の圏線の間に簡略化された草花文を描く。焼成が粗いためか内外面に粗い貫入がみられる。72は透明感のあるものであるが、大きな貫入がみられる。畳付けには目砂が付着している。

73は皿の底部片である。焼成時の熱のためか、見込み中央はややくぼんでいる。見込みに花文を描き、外面には唐草文を描く。上釉に細かい発砲がみられる。

74は稜花形の皿である。腰部はやや立ち上がる。見込みには線画とだみ染で山水文を描く。

４　土師質土器

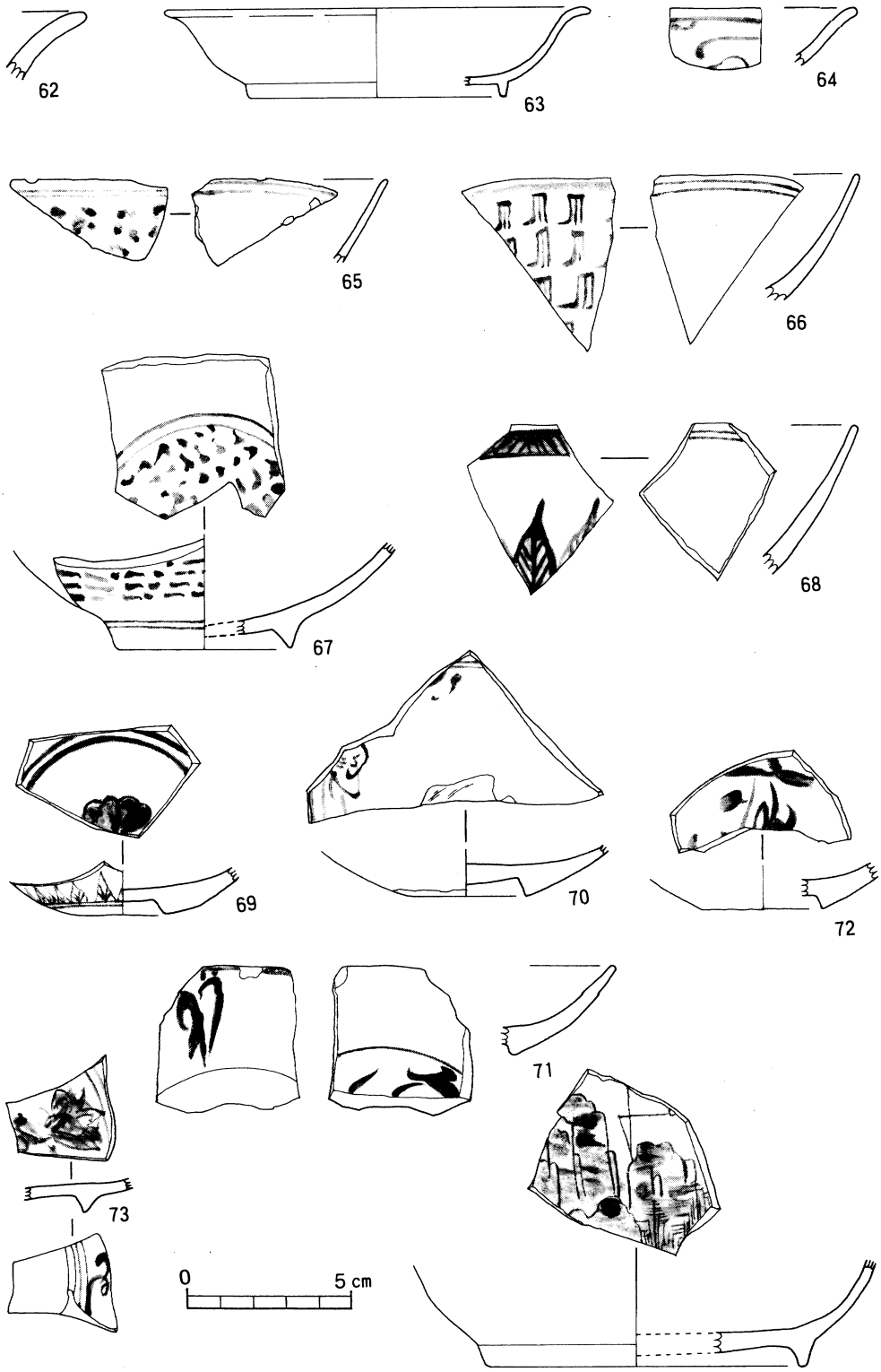
75～77が土師質の土器である。75は復元底部径20.8cmを測る盤である。口縁部はやや内湾気味に開くもので、口唇部は水平となり、張り付けによる取っ手状の肥厚部を有する。底部はあげ底で、ヘラおこしである。内外丁寧なナデ調整が行われており、外面茶褐色、内面明黄茶褐色を呈する。胎土に微細砂粒を含み、焼成は良い。

76、77は同一固体と考えられるものである。やや大型の甕形土器と考えられる。口縁部は直口で、肥厚する。外面は横位の刷毛目調整が施されている。ススが付着し、黒褐色を呈する。内面も横位の刷毛目調整が施されている。茶褐色を呈する。胎土に細砂粒を含み、焼成は良い。

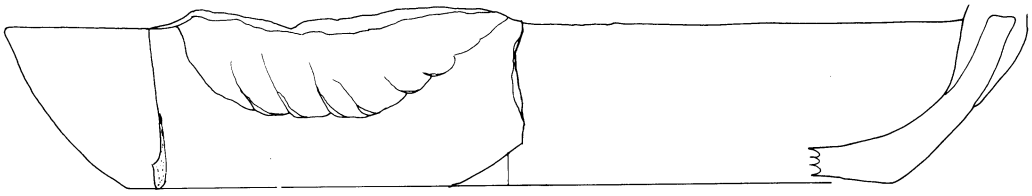
５　陶　器

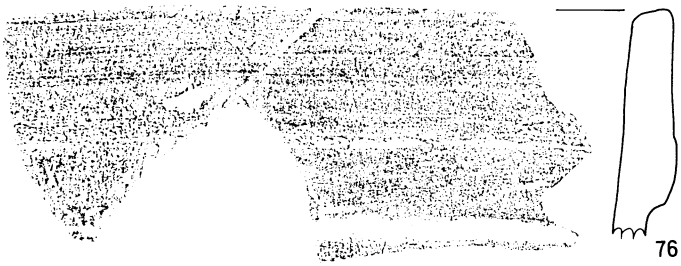
78は須恵質の陶器である。外面は格子目叩きを行った後、ナデ調整を施す。内面もナデ調整であるが輪積みの後が残る。内外灰茶褐色を呈し、焼成は良い。

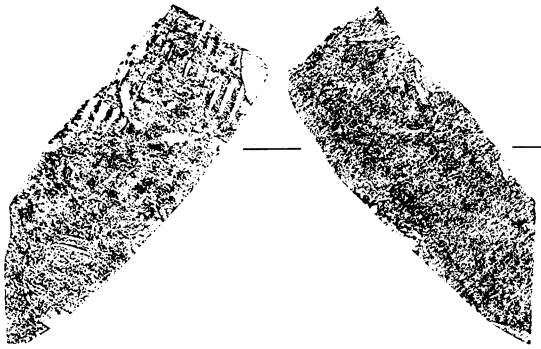
79、80は同一個体と考えられるもので、備前焼摺鉢の口縁部片である。口縁部下は外に張るため一条の稜線となる。色調は焼成が不完全なためか、口縁部が淡赤褐色、他の内外面は淡茶褐色を呈する。内部の条線帯は１束８本で底部から掻き上げている。

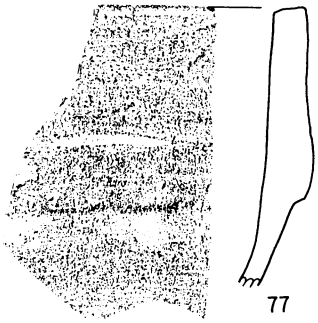


第34図　歴史時代の遺物（1）









0 5cm

第35図　歴史時代の遺物（2）

第７節　小　結

下伊倉遺跡は、弥生時代を主とする遺跡であり、多くの遺物が出土し、また、弥生時代の溝状遺構が二本検出された。調査面積は割と広いものであったが、実際は丘陵の縁辺部をトレンチ状に調査したのみであり、遺跡全体からすると狭小なものと言える。そのため遺跡全体の性格等について判断することはできないが、今回調査した部分について若干触れることによってその一端がうかがえよう。

溝状遺構について

検出された二本の溝状遺構はともに８区で確認され、両溝は近接した位置にある。その位置は丘陵の縁辺部にあたり、すぐ西側には肝属川の旧河川跡があり、それとほぼ平行しているような印象を受け、溝状遺構の性格を想定する上で重要な手がかりの一つとなろう。また溝状遺構２は、埋土の下部底面近くは砂質が強く、水が流れていた可能性が強いものであった。その方向は丘陵を廻るように西流する肝属川が流れる南側へと向かって深くなっている。

溝状遺構１と２は、その幅及び深さ等の規模が異っており、性格等の差に起因したものか、問題の残るところである。さらに二つの溝状遺構は南側で切り合い関係にあり、溝状遺構２より溝状遺構１の方が新しいもので時期が異なることが判明した。その時間差の基準となるべき埋土から出土した土器の比較は、溝状遺構１より出土したものが量的に少なく、同時に小破片のみであり比較資料とならなかった。

溝状遺構２から出土した土器は甕形土器・大型甕形土器・壷形土器があり、溝外から出土した土器とも接合関係が認められた。このことは弥生土器集中部である西側と同時期のものと思われる。

これらの溝状遺構は、全体の一部分であり、さらに南北に伸びているものと推定されるが、全体が把握された時点で性格等が明確になろう。

出土土器について

弥生時代の土器は、その遺物包含層である第Ⅶ層から大部分出土し、甕形土器・壷形土器・大型甕形土器などの器種がみられた。

包含層出土の土器分布は大きく二ヶ所の集中域を形成し、各々の集中域でのみ接合関係が認められた。西側の集中域は６区から10区と比較的広く、東側の集中域は14区から16区にかけてのものであった。西側集中域のなかには溝状遺構が所在し、溝状遺構２から出土した土器と、遺構外出土の土器が接合した。このことにより、西側集中域と溝状遺構２とは同時期の所産と判断されよう。以下出土土器について、東側と西側に区分して述べる。

西側出土の甕形土器は、逆Ｌ字状に外反する口縁部がわずかに上向きになり、「く」の字口縁に近づくもの（36）、あるいは「く」の字口縁を呈するものが認められ、底部はわずかに上げ底状となっている。壷形土器は垂れ下がり気味の口縁をもつものや、二叉状口縁を呈し頸部に暗文を施すものが出土している。

東側出土の甕形土器は逆Ｌ字状に外反する口縁部は、水平になるものからやや垂れ下がり気

味になるものが認められ、底部は上げ底状となっている。壷形土器はやや垂れ下がり気味の口縁をもつものや、二叉状口縁を呈し、口唇部と口縁直下の突帯に刻みを施すものが小破片ではあるが出土している。

これらの東側及び西側出土の土器は、いわゆる山ノ口式に該当するものと思われるが、東側と西側では若干の形態差が認められ、西側出土のものより、東側出土の方がより古い様相を示している。出土した土器は破片が多く不充分な資料であるが、仮に東側集中域のものを下伊倉Ⅰ、西側集中域のものを下伊倉Ⅱとして、各々の時期的設定をしておきたい。

さて、最近、山ノ口式土器の所属する時期について、論議が行われている。これまで、山ノ口式は弥生時代中期後半に位置づけられてきたが[注①]、王子遺跡の調査で瀬戸内系の脚部に矢羽状透かしを有する高坏及び口縁部に凹線文を施す壷形土器も出土し、後期前葉まで下るものもあるとする考えが出されている[注②]。こうした状況のなかで、瀬戸内系土器のありかたから山ノ口式の編年細分試案も発表されている[注③]。

これらを参考にして下伊倉遺跡出土の土器を検討すると、吉ヶ崎遺跡タイプと王子遺跡タイプの中間の位置に比定され、そのなかで下伊倉Ⅰは吉ヶ崎のすぐ後の段階に、下伊倉Ⅱは王子の少し前の時期に位置づけられよう。

今回調査した部分は遺跡全体からすると、わずかな面積であり、遺物自体も器形の全体を知り得るものはなく、今後改めて検討される必要がある。

また21のように、垂れ下がり気味に外反する口縁下位に、沈線が廻る中期前葉の入来式に並行するような土器も存在しており、土器の移動等や包含層自体の問題等今後に残された課題は少なくない。

注①　河口貞徳『山ノ口遺跡』鹿児島県文化財調査報告書７　1960
　　河口貞徳『新南九州弥生式土器集成』鹿児島考古15号　1981
注②　森貞次郎『弥生文化の発展と地域性－九州－』日本の考古学Ⅲ　1966
　　石川悦雄『宮崎平野における弥生土器編年試案－素描－』宮崎考古９号　1984
注③　中村耕治『弥生時代』鹿児島考古20号　1987

参考文献

・河口貞徳『入来遺跡』鹿児島考古11号　1976
・中村耕治『大隈地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県教育委員会　1984
・立神次郎『王子遺跡』鹿児島県教育委員会　1985

図版 1

下伊倉城跡を西上空より

図版 2

東側上空より

北側上空より

下伊倉城跡近景（東より）

下伊倉城跡（南より）

図版4

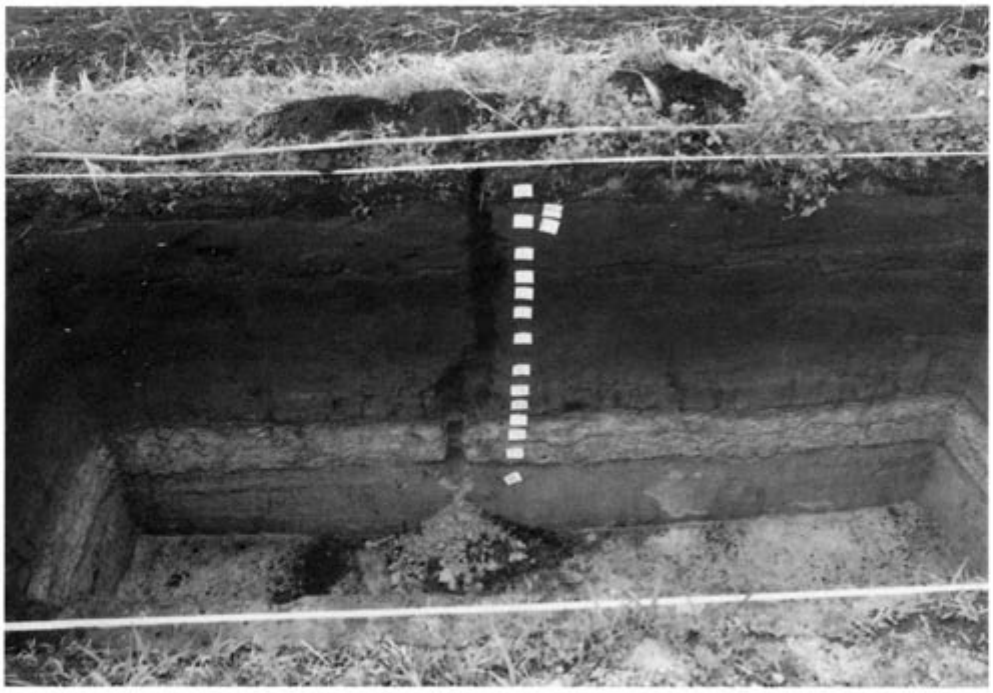
下伊倉城跡（増水時　東より）

下伊倉城跡（増水時　内濠）

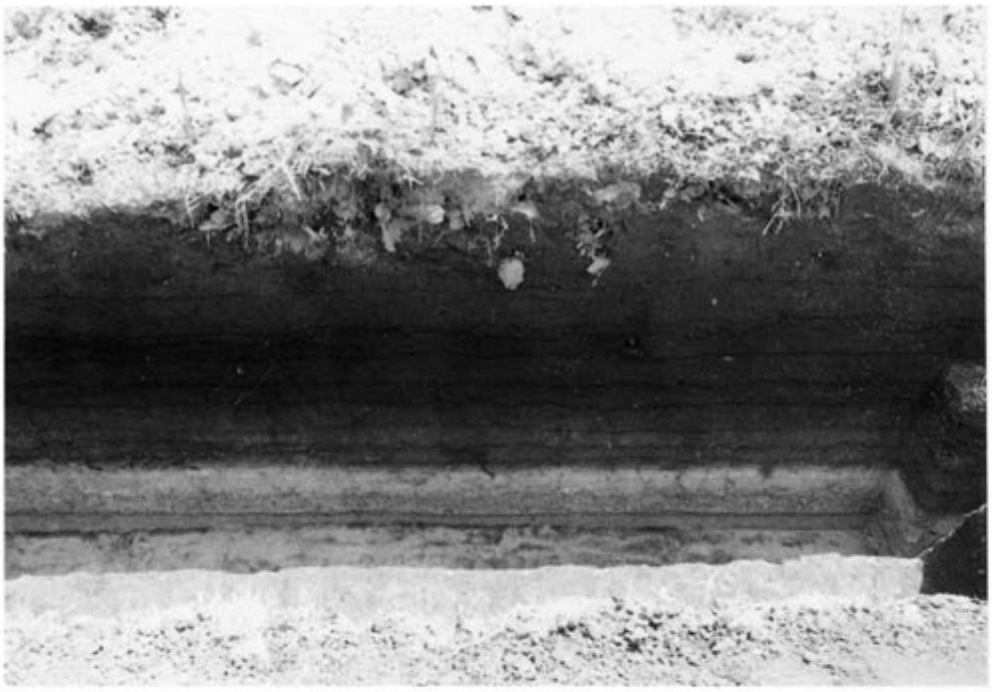
図版 5

確認調査風景

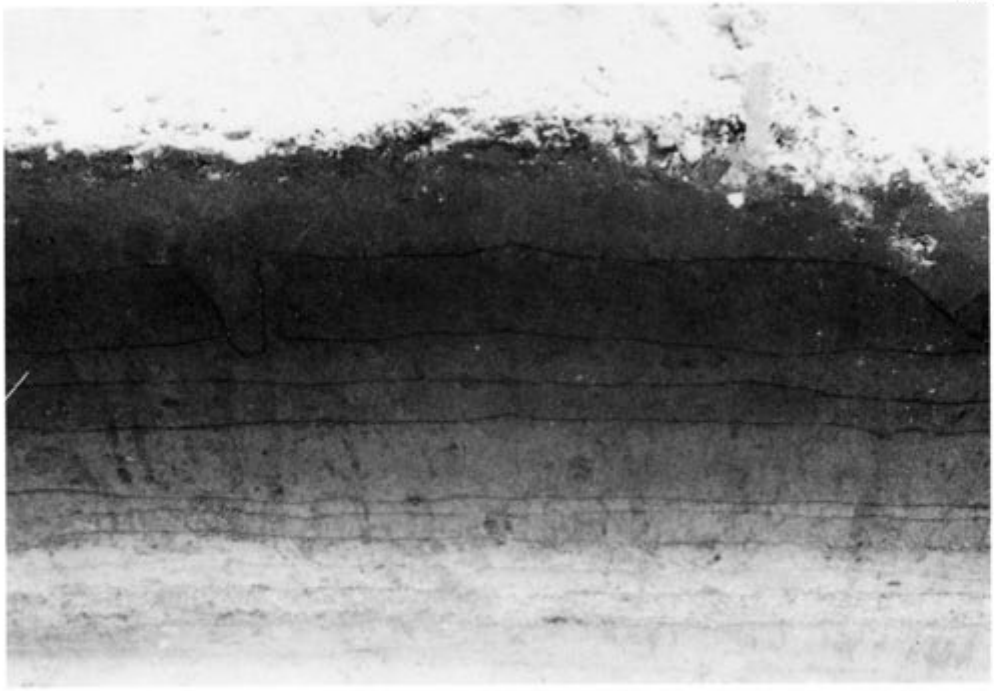
図版6



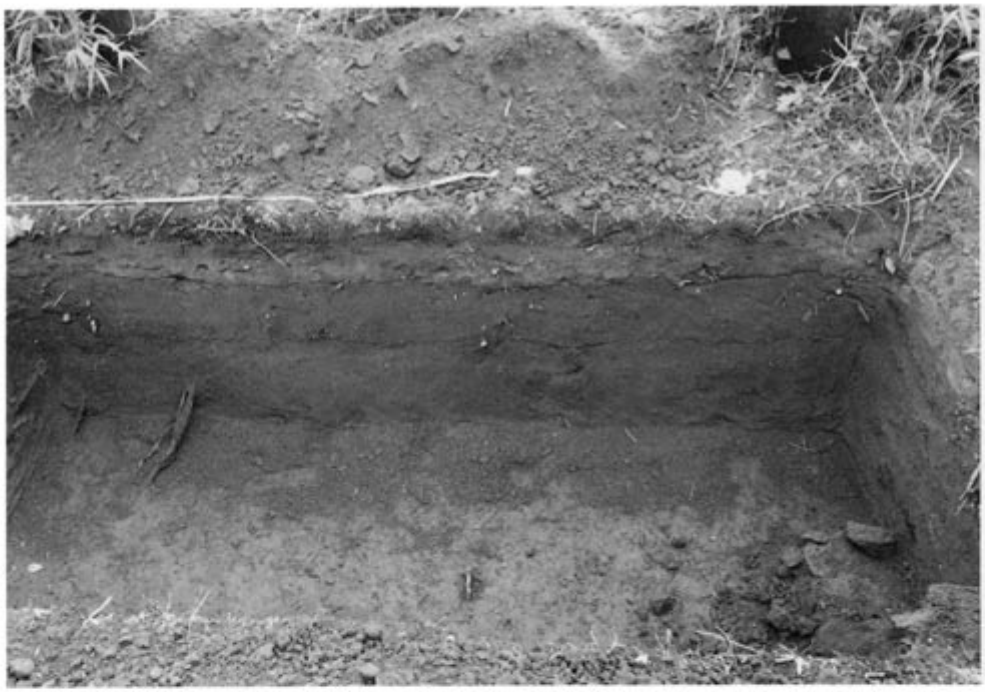
第15-Cトレンチ土層



第21-Cトレンチ土層



第23トレンチ土層



第29トレンチ土層

図版 8

第37トレンチ土層

塚土層

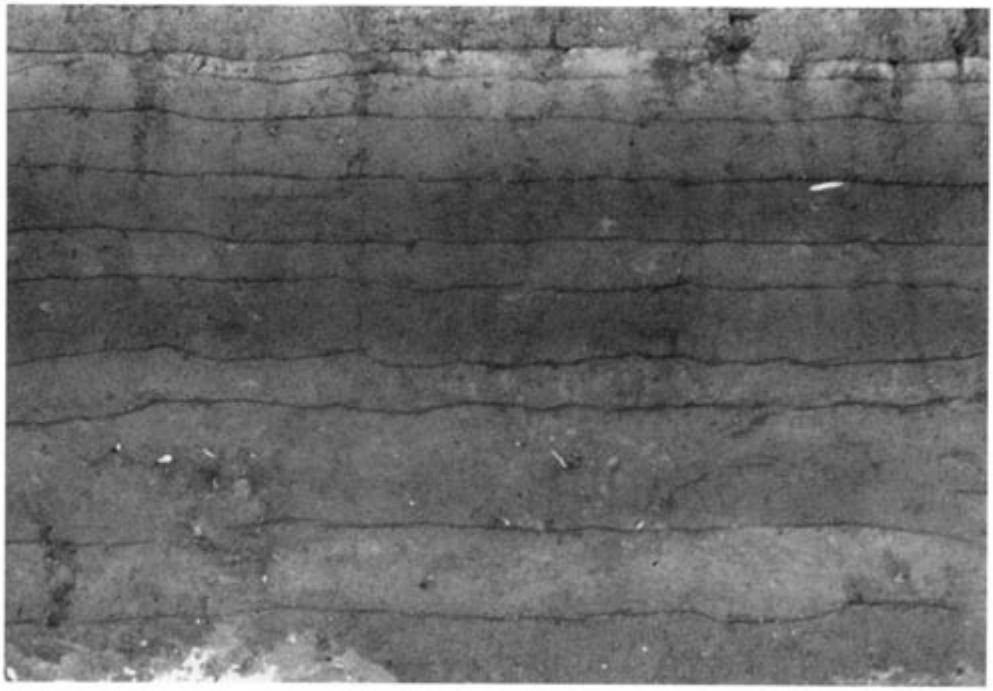
伐採風景

図版10

調査風景

調査風景

図版12



下伊倉城跡土層

溝1　確認状況

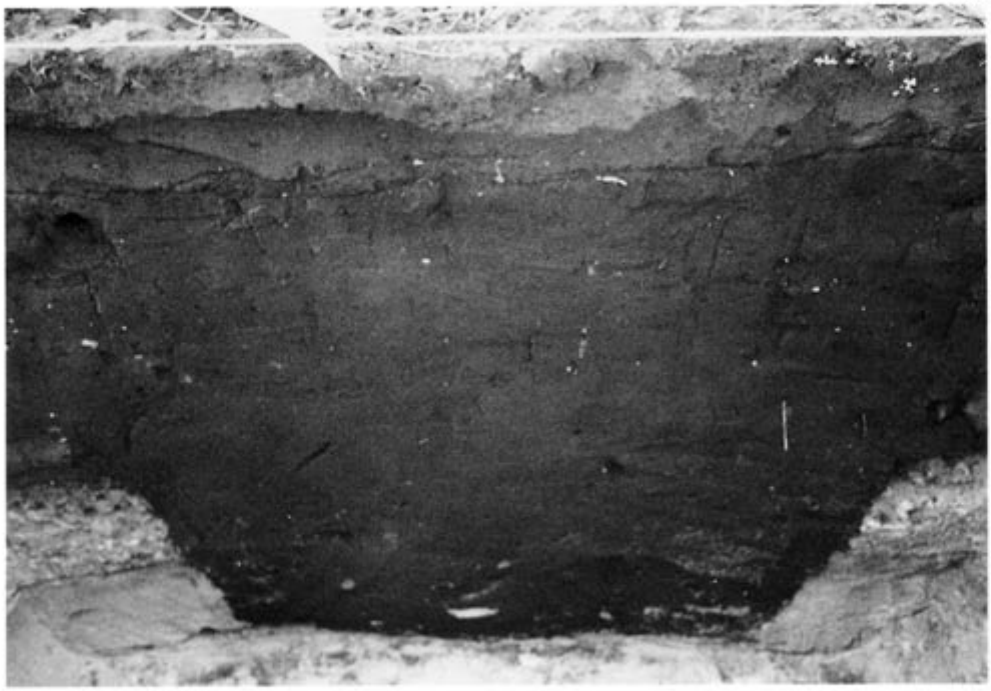
溝1　検出状況

溝2　検出状況

図版14

ピット群２　検出状況

古道検出状況



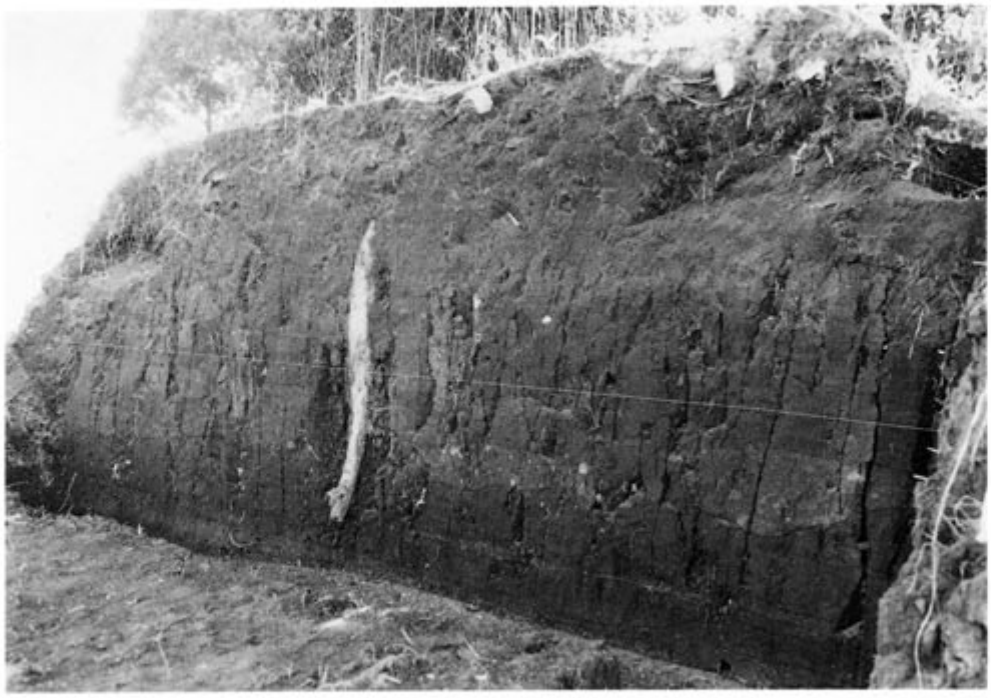
井戸状遺構断面

西側外濠断面

図版16

西側内濠断面

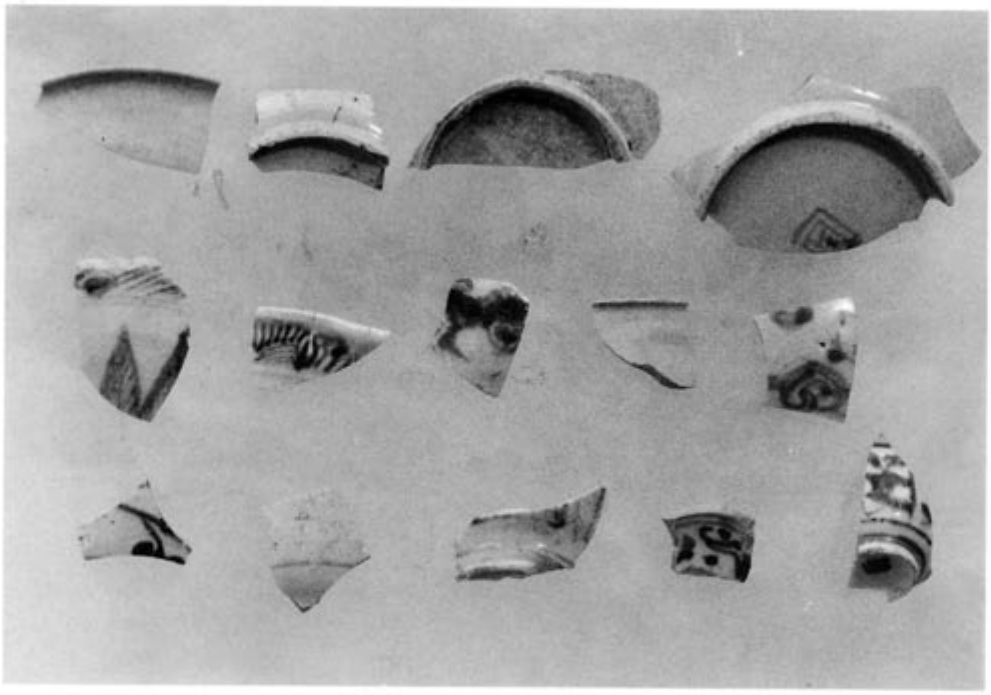
東側内濠断面



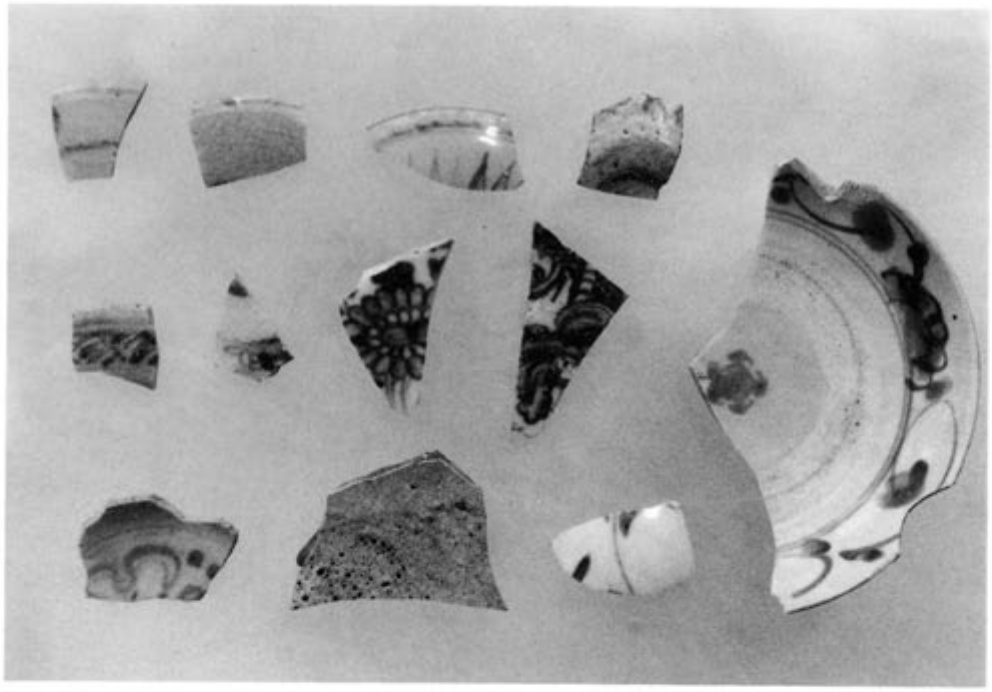
塚断面

下伊倉城跡出土遺物(1)

図版18



下伊倉城跡出土遺物(2)

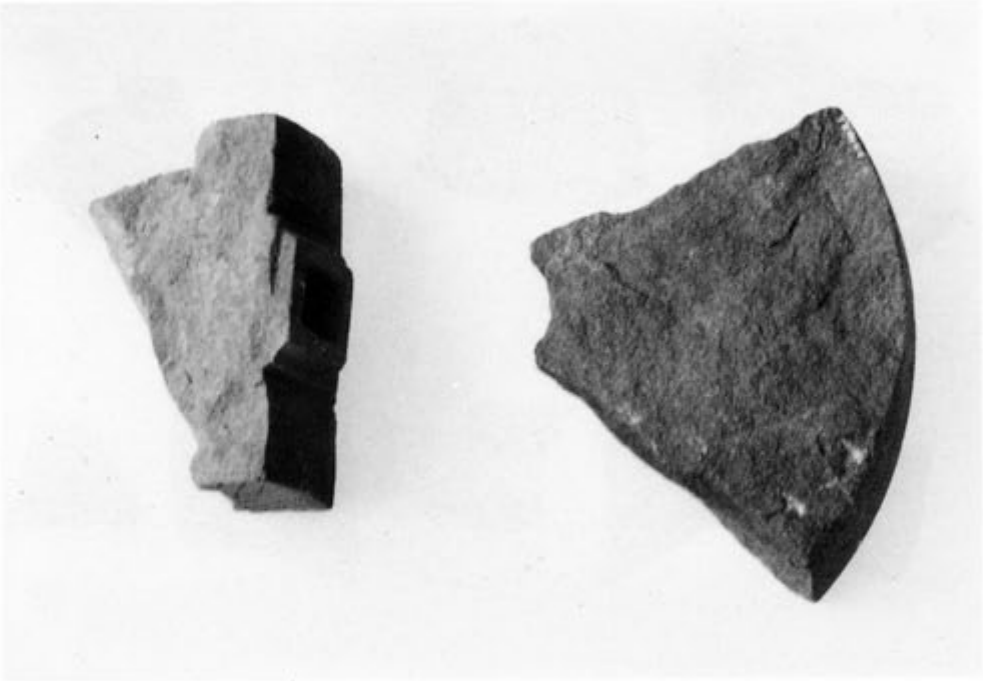


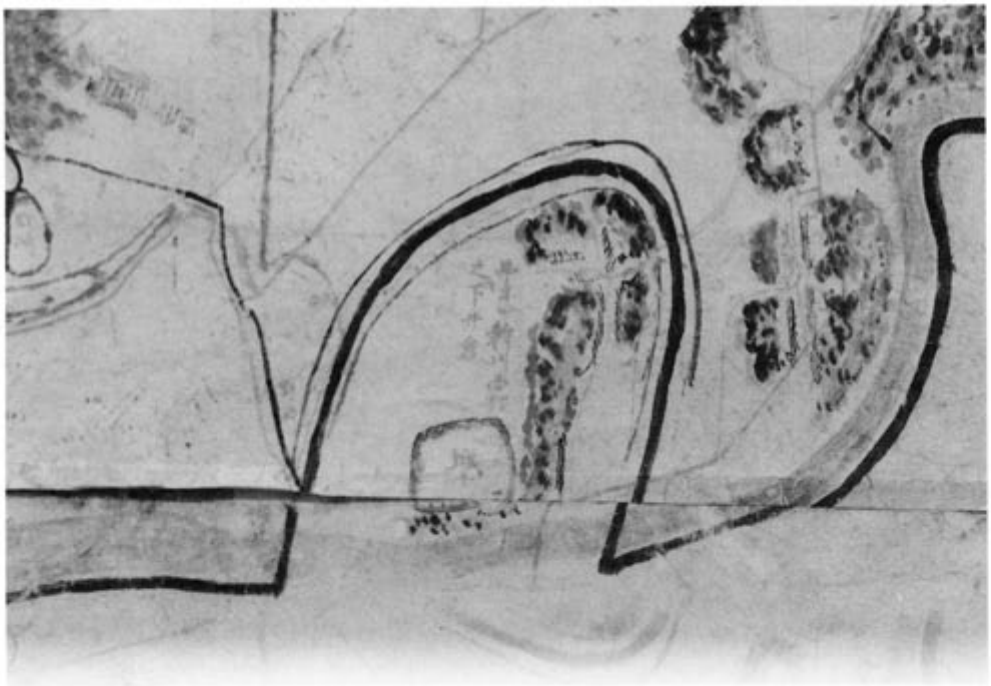
下伊倉城跡出土遺物(3)

下伊倉城跡出土遺物(4)

下伊倉城跡出土遺物(5)

図版20





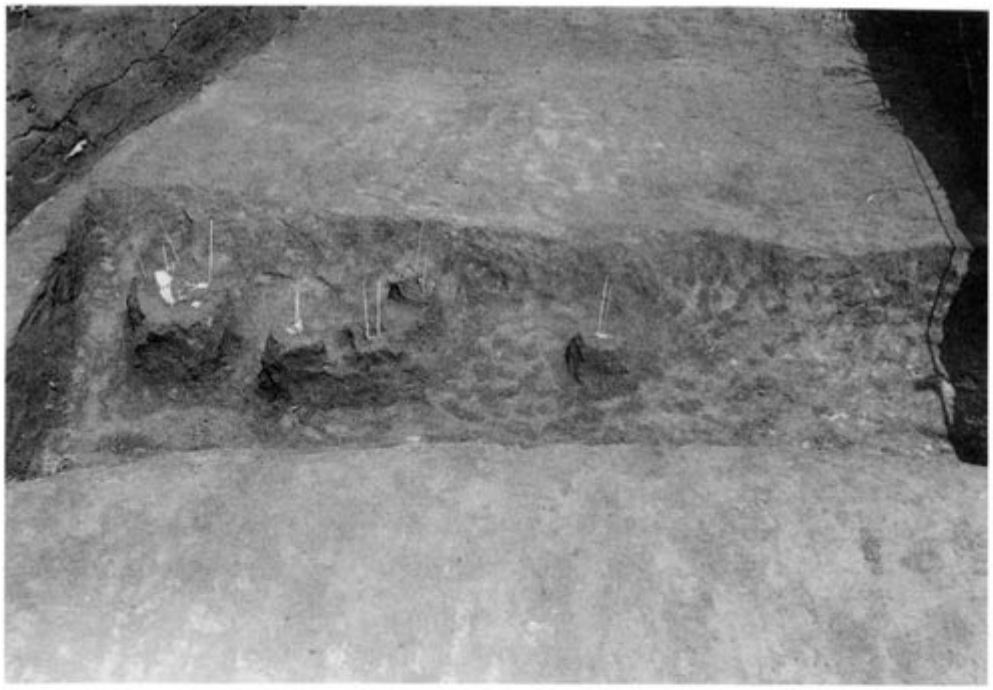
高山総繪圖（部分）

土層断面

土層断面

図版22

溝状遺構１検出状況

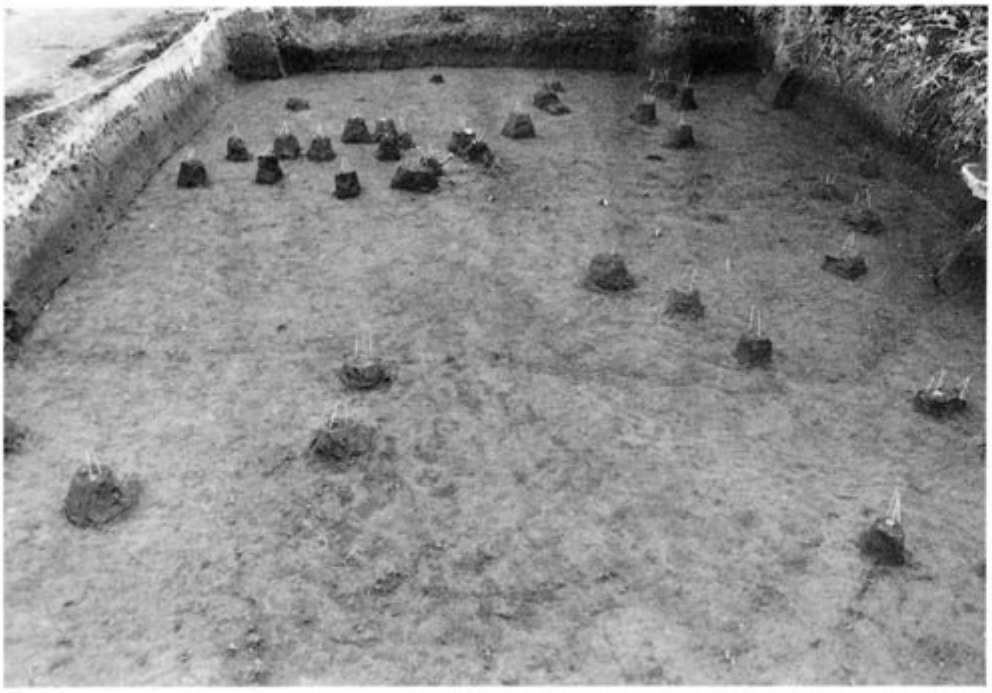


溝状遺構１内遺物出土状況

溝状遺構２遺物出土状況

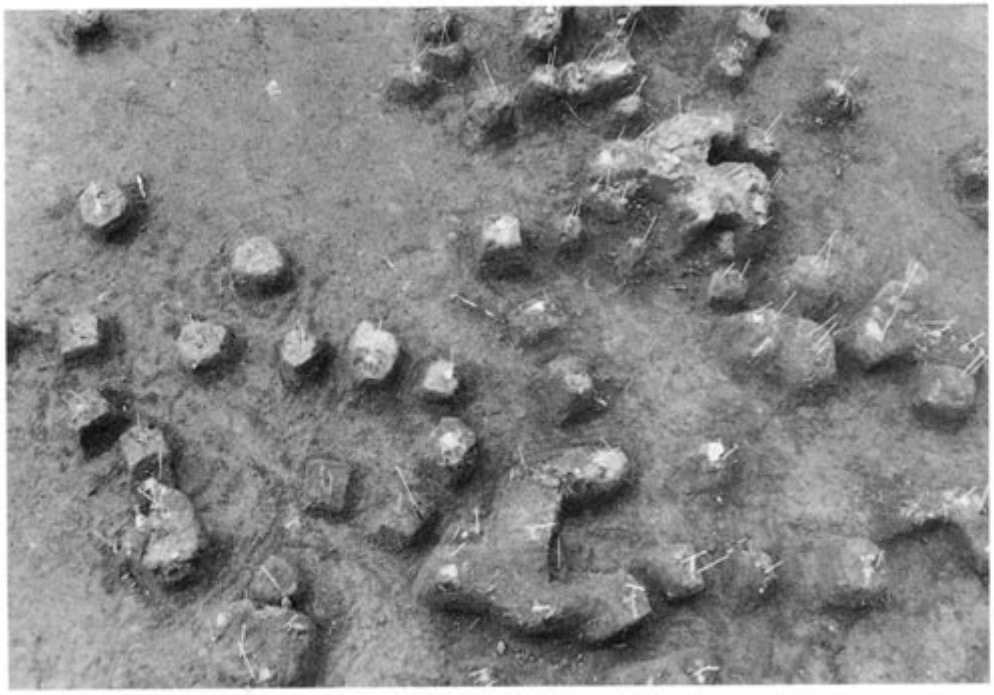
溝状遺構1.2掘り下げ状況

図版24



遺物出土状況

遺物出土状況

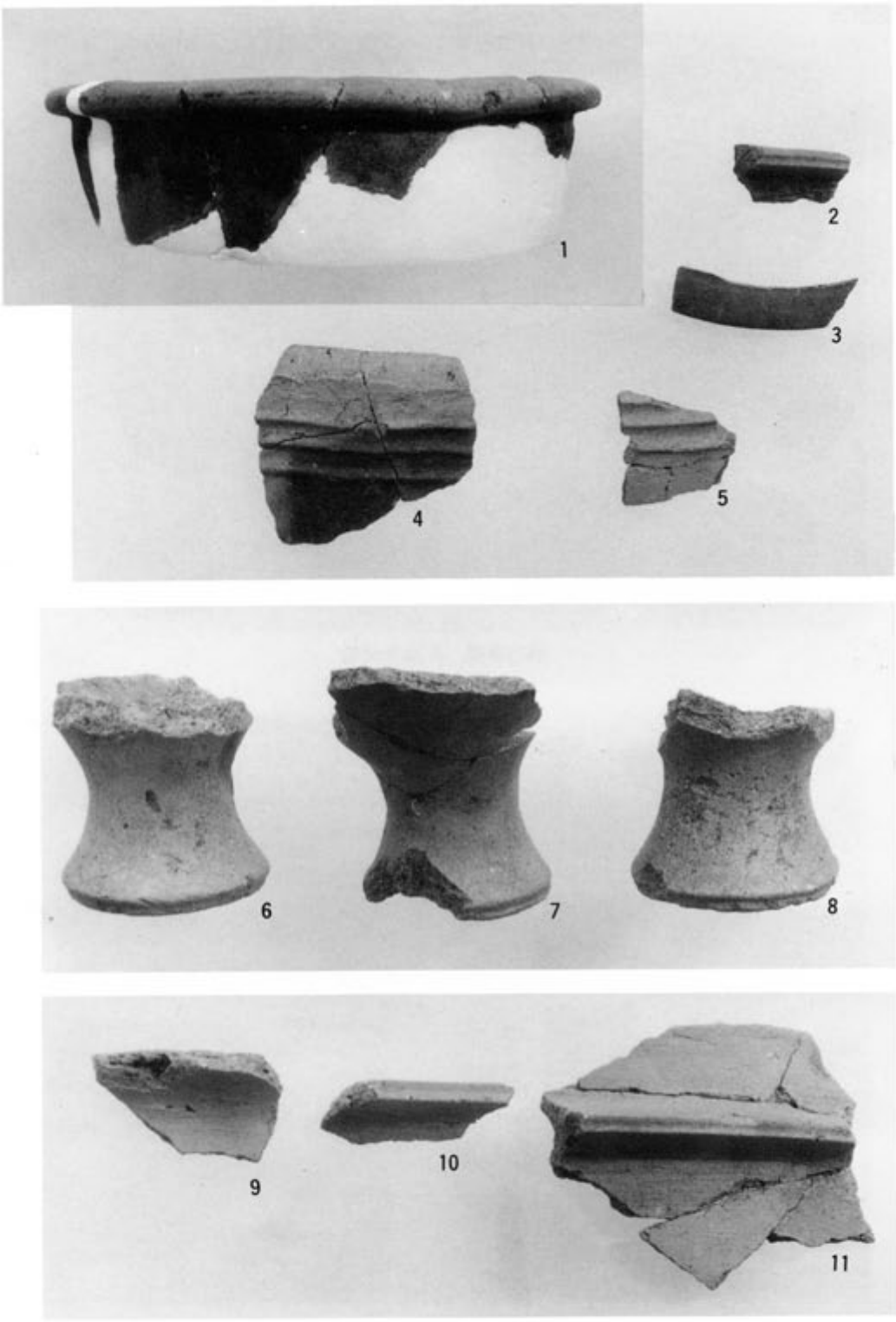


遺物出土状況

遺物出土状況

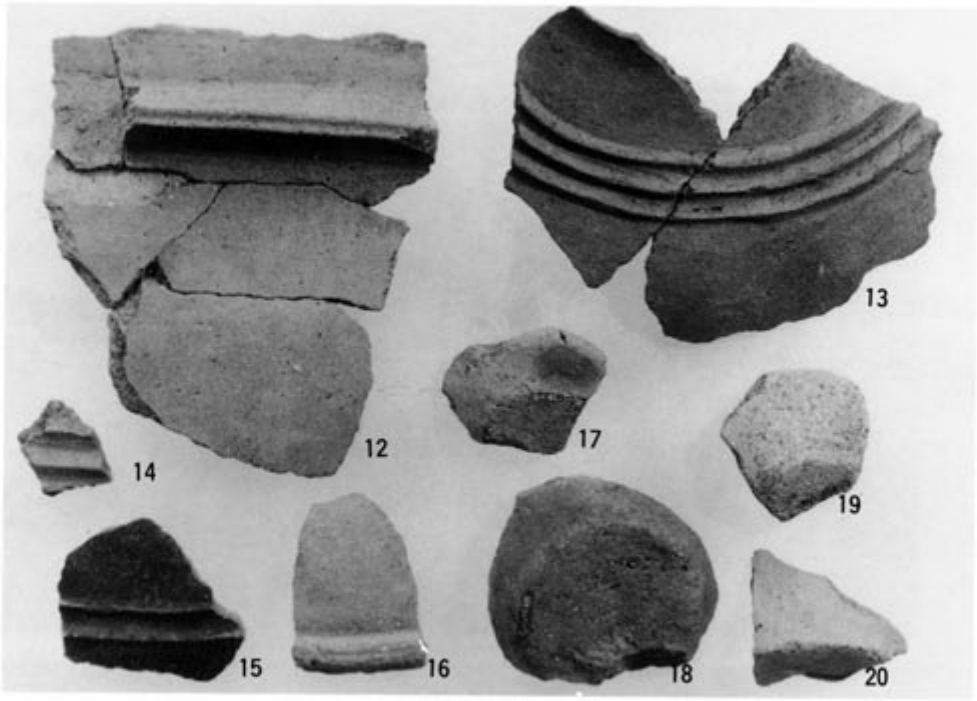
図版26

遺物出土状態

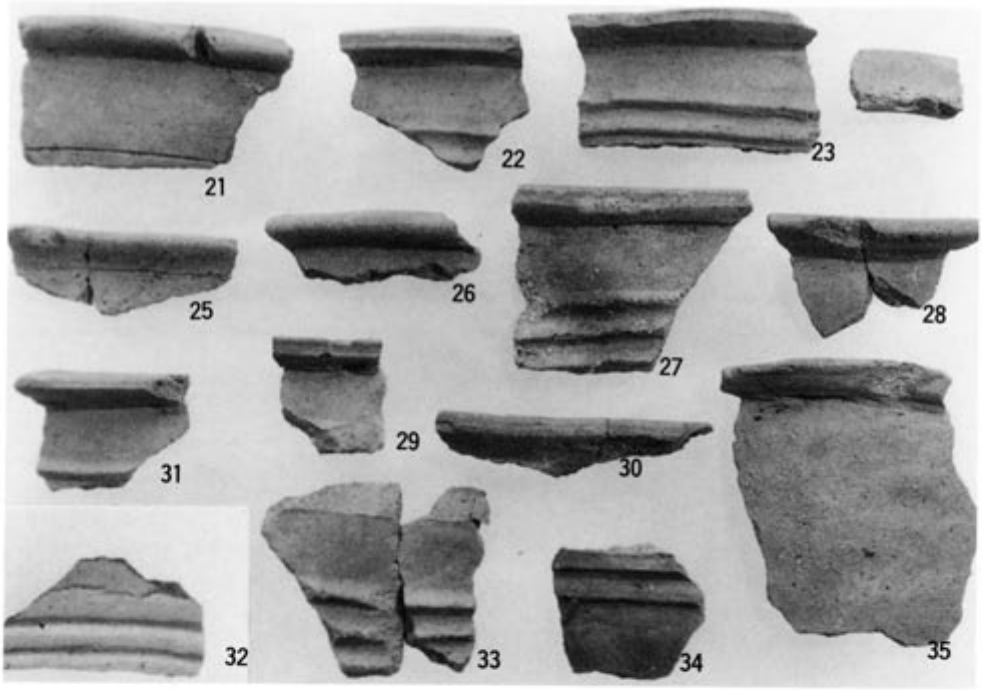


溝状遺構　2 出土遺物

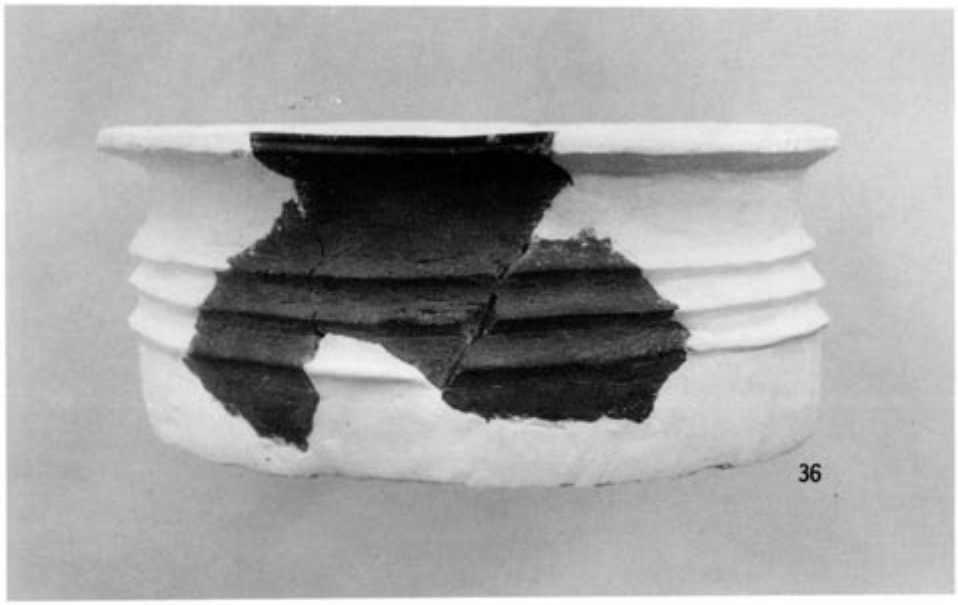
図版28

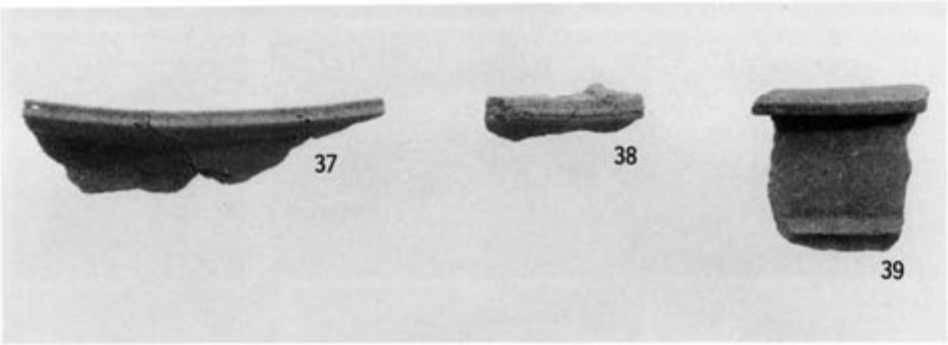


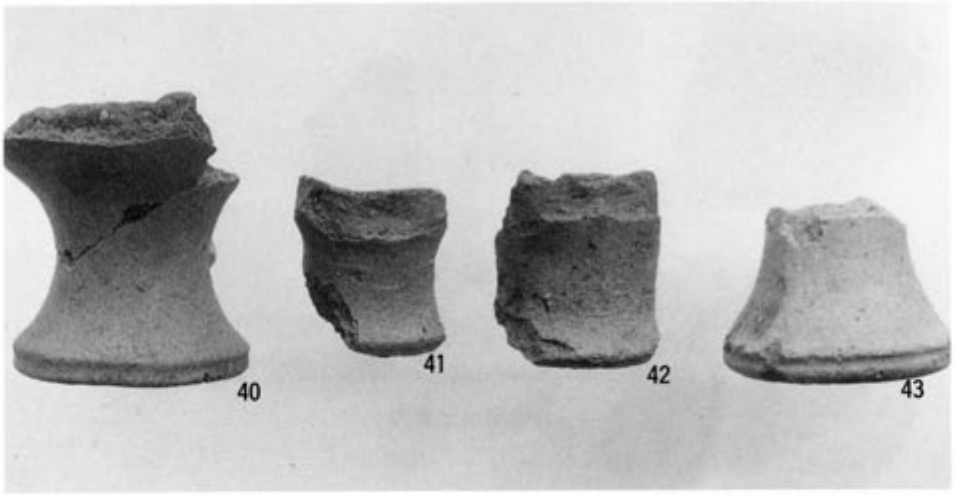
溝状遺構　2 出土遺物



包含層出土遺物

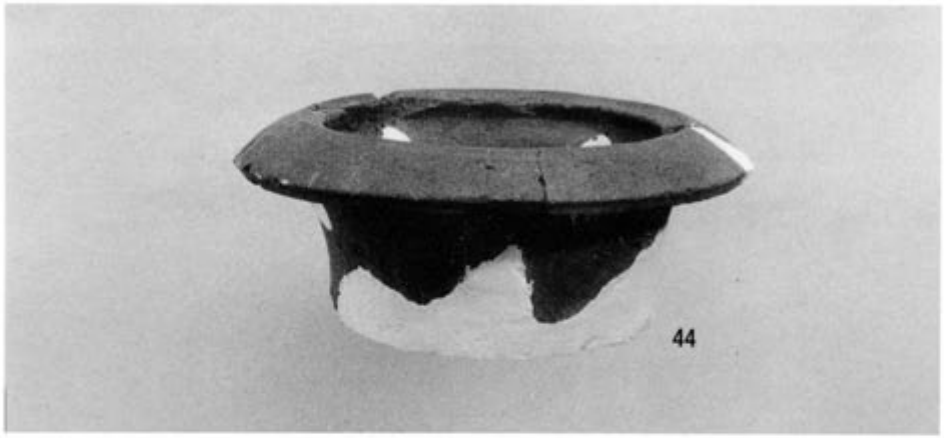


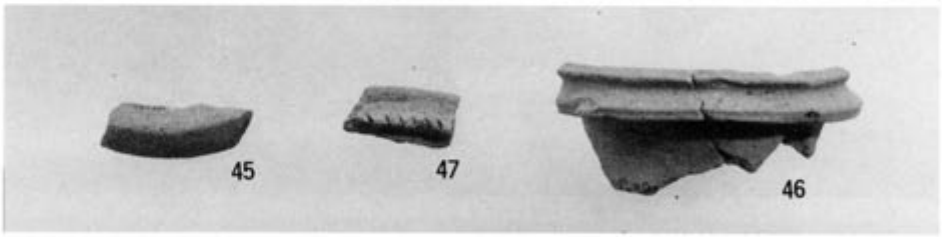


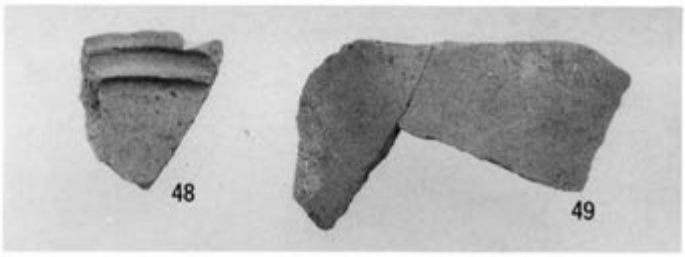


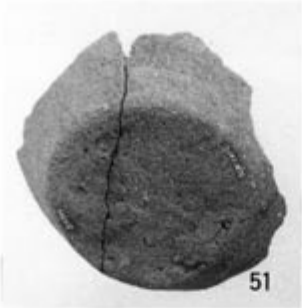
包含層出土遺物

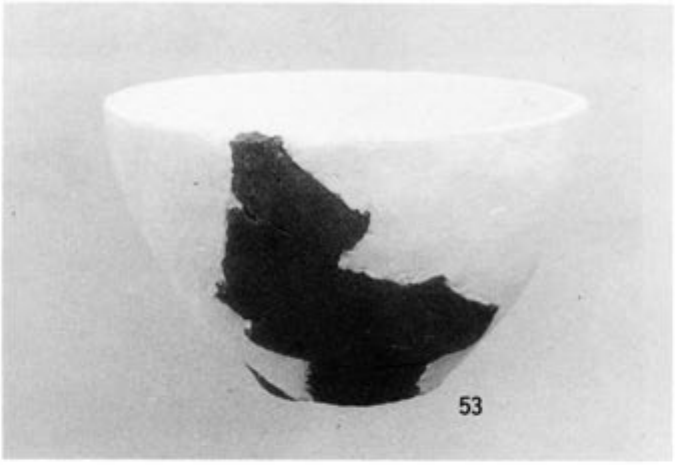
図版30



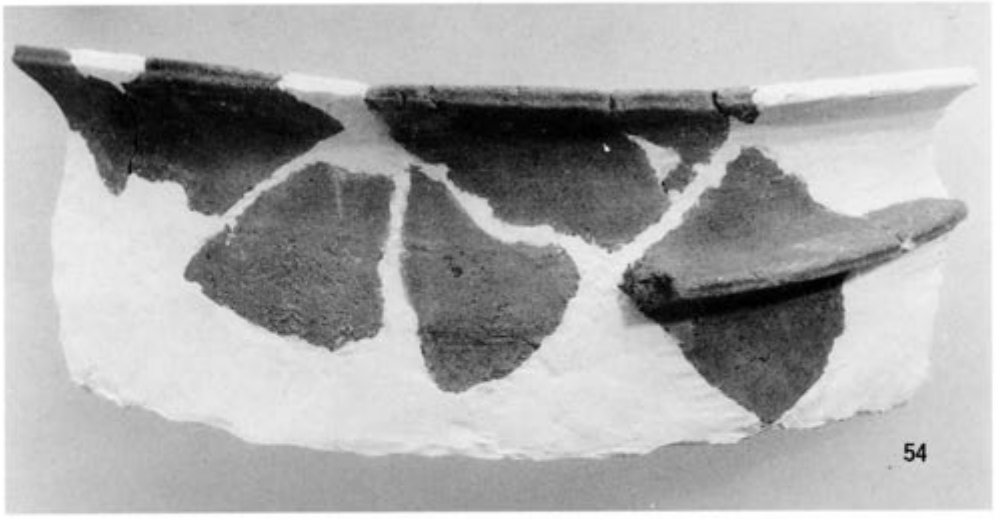


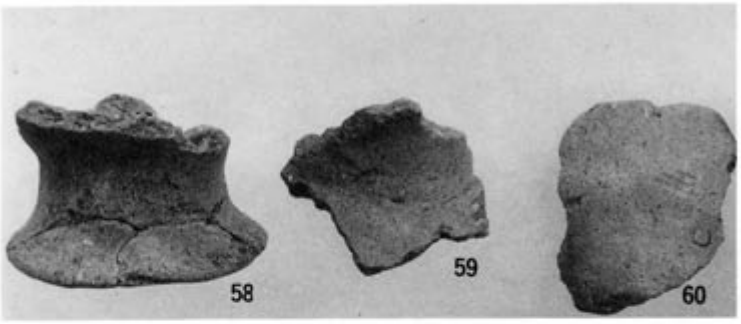


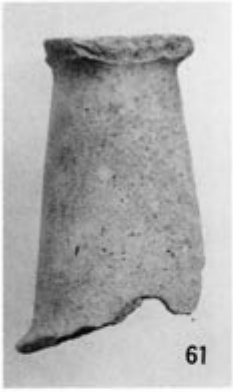




包含層出土遺物

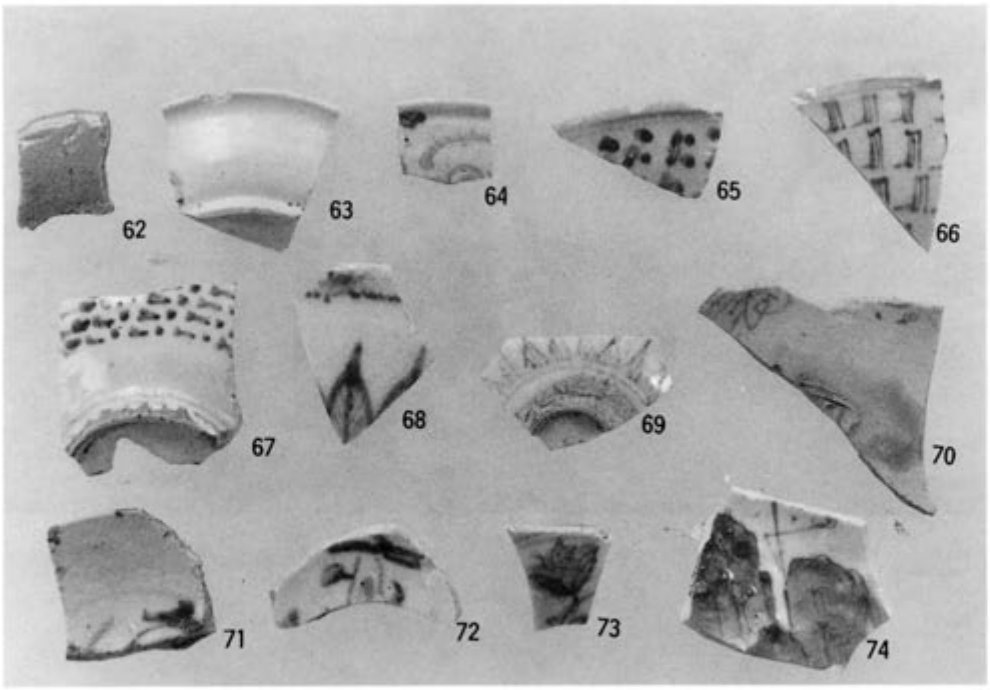


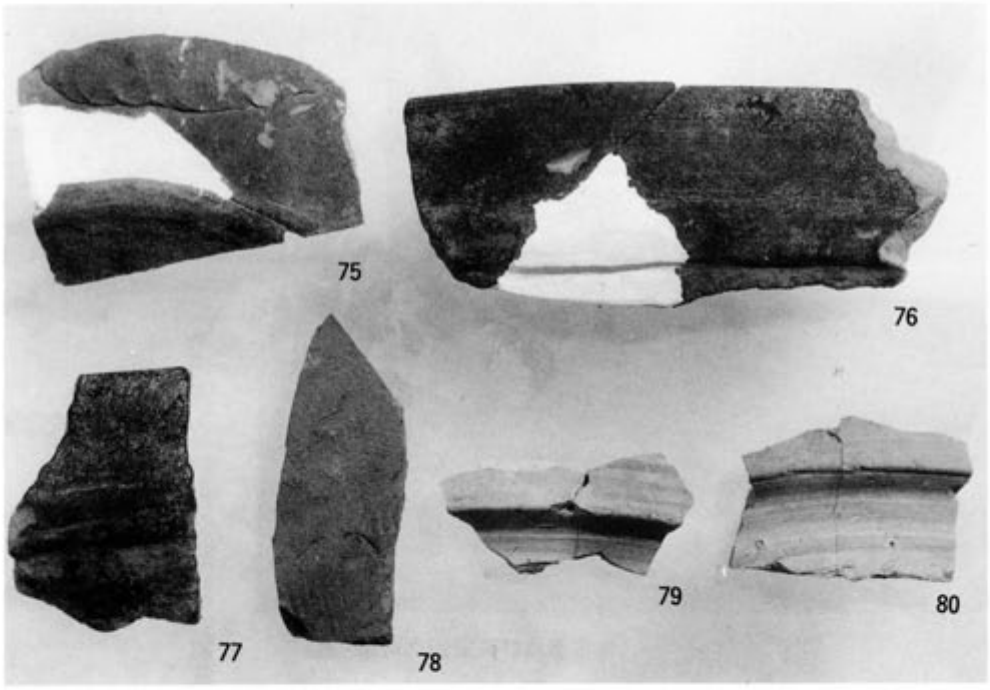




包含層及び表層出土遺物

図版32





表層出土遺物

東串良町下伊倉城跡にのこる石塔群

南九州古石塔研究会　　河　野　治　雄

一、現　況

1．所在地　鹿児島県肝属郡東串良町新川西字城ノ山

2．名　称　下伊倉城跡の中世古石塔群

3．形　態　五輪塔・宝塔及び五輪塔の殘欠

4．数　量　五輪塔　8基・五輪塔の殘欠2基分（空・風輪・地輪共に欠先）

宝　塔　4基　（相輪は大隅半島に多い形式をもっている）

何れも昭和54年（1979年）8月以後復原整備されたものによる遺存数量である。

5．石　質　全て凝灰岩（灰黒色）

6．銘　文　上記の石塔群中　五輪塔の一基に（火輪部）次の年紀・人物法名等の刻銘がある。

「永禄九年　閏八月九日　　（年号）

翻田　石□守　　（人名「鎌田・或は飯田と読んだものも有る）

道賢□冦門　　（法名）

7．年　代　上記の銘文により永禄9年（1566年）　戦国時代末期のころとする。

二、下伊（井）倉城址の古石塔群について

(1)　上記の石塔群は、下伊（井）倉城址の旧土塁の一隅につくられている改葬された集落の墓地の前に復原されているものである。傍らには東串良町教育委員会によって建てられた二本の標柱がある。一本には「史跡　下伊倉城外堀跡・昭和六十年四月十日建立・東串良町教育委員会」とあり、他の一本には「中世古石塔群（逆修塔）・昭和六十一年四月十日建立・東串良町教育委員会」（図版1参照）とあり、一面に「逆修塔・合戦にのぞむ武将が生前に自分のために仏事を営んで冥福を祈ってたてた石塔」と解説が加えてある。

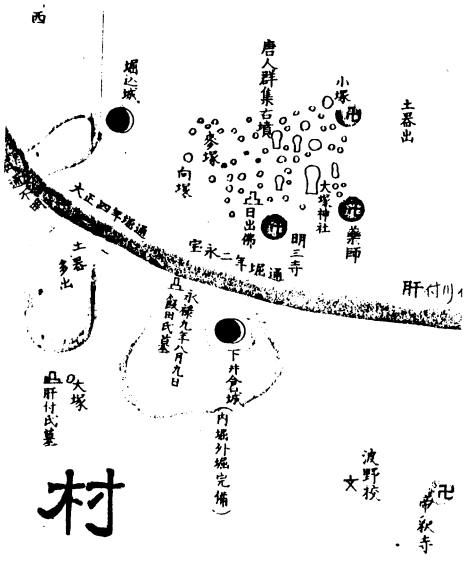
現存の石塔群は上記の如く12基復原され、脇に空・風輪や地輪を欠いた小型の五輪塔殘欠が二列に並べられている。（図版1参照）

之等の石塔群については、下伊倉　肇氏（町文化財審議員）の話によれば、昭和二十三年（1948年）ごろ肝付川の拡幅工事の際に、城の北西部にあったものを現在地に集めたものであるという。

旧西串良村の絵図面によれば、川岸近く「飯田氏墓、永禄九年八月九日」の記載があり、この墓のことでもあるという。当時は道路の脇にまだ大きな五輪塔もあったように記憶しているとのことであったが現在地には今はそれらしいものは見当らない。（114頁絵図参照）

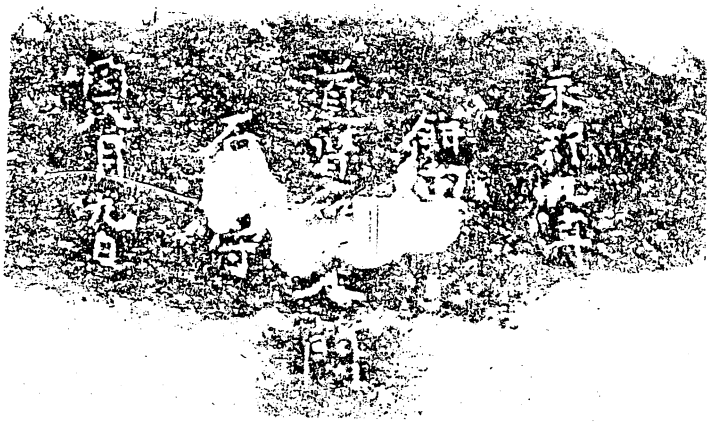
また、同氏が昭和五十八年十二月に作成した「下伊倉城略図」によれば、現在の残された城址の外堀土塁の北端に「五輪塔」図があり「コドラン墓」の墓塔のしるしが付されている。現

在の石塔群の所在を示すものであろう。聞くところによれば、僧侶の墓（無縫塔又は卵塔）らしいものもあって、改墓の時うめられたらしいとのことであった。「寺址」でもあったのかと想定もされる。



なお、昭和二十三年に移動された文等の石塔群は、現在のように復原されたのは、昭和五十二年から昭和五十四年ごろにかけて、南九州古石塔研究会の黒田清光（故人）や園田良賢氏等の調査研究がなされており、園田良賢氏の調査資料が残されている。それによれば「五輪塔は完形九基、内六基は時代的に古いものである。五輪塔の軒先きの厚さは13cmのもの六基、他は中央部が10cmで軒端が20cmである。時代は応永中期から戦国時代の後期ごろ」との推定がなされている。また、五輪塔一基を除いては銘はなく、五輪塔の一基に「永禄九年八月九日、鎌田石見守、道賢禅定門」の刻銘がのこされていると報告されている。（五輪塔の火輪部に示された拓影を参照）

「宝塔については、四基あり、完形である。ほぼ同形、同高であるが、代表的なものは、相輪高が52cm、笠石21cm、塔身22cm、基礎20cmである。相輪は宝冠形で、宝輪の数は６輪が多い。



塔身の首部高は3.5cmである。首部にはたての刻みがつけられている。総高は凡そ115cm程である。」と報告がよせられている。

(2)　五輪塔について

五輪塔とは密教のおしえによって、この宇宙を「地・水・火・風・空」の五要素から成り立っているという五大思想にもとずき、儀軌に示される五輪図をもとにして、宝珠、半月、三角、球、四角の形で象徴して五輪とよび塔形にしたもので、わが国で独自に発達した石製の塔婆である（次頁図と写真・図版１参照）それぞれ特徴をもった五つの形から合成された石塔婆である。五輪塔は本来は密教における最上の根本仏（大日如来）を表現したもので信仰の対象であった。後には供養塔や、

墓塔として用いられるようになったのは、その造立による善根功徳によって死者えの速やかな成仏を祈り（追善供養）、また自らの死後の為めに廻向することを願うもの（逆修供養）であったからである。従って五輪塔は五輪が一体とならねばその本質がうすれてしまうことになる。五輪塔は文字（銘）がないことが多い。それが本来の形といわれるが、銘文を有する時は造立の時期が明らかである。

造立の趣旨、造立者、被供養者等がわかるが、文字などがない場合でも、時には五輪塔の形態から時代を判定することは可能な時がある。特にその特徴は火輪（笠）に於てあらわれており時代が判定できるといわれている。空、風輪、水輪、地輪においてもそれは認められる。

下伊倉城址の在銘五輪塔
（年代は永禄九年）

さきの園田氏の報告で、五輪塔の軒先きの厚さや軒端の厚さについて特に記述されているのはそのためである。図で示したものは軒先き、軒端の厚さが同じであり、反りは少なく、軒端の下りは大体垂直であるが、下伊倉城址にあるものは軒先きと軒端の厚さの異りが目立ち、反りも大きいし、内側に入っていることがわかる。然し「永禄九年（1566）」の年代をもつことからそれ以後のものでなく、それ以前のものではない、残存するものもほぼ同時代のものということができよう。後述するように付近には多くの五輪塔、宝塔が残存しており、何れも同じ時代、同じ内容と考えられるものが多いことから、この在銘五輪塔はその点に於て、人名と共に極めて重要な資（史）料といえよう。

(3) 宝塔について

宝塔とは、図に見るように、基礎・塔身・笠・相輪から成っており、塔身には首部がつけられていることが大きな特徴である。宝塔は多宝塔ともいわれ、法華経の「見宝塔品」に示されている多宝如来が釈迦を招いて二仏併座したという説にもとずき「多宝如来に釈迦を招いて二仏併座したということからおこった。本来は「多宝如来全身舎利」を安置するものである。天台宗に於ては「法華経」を本経としていることから天台系の仏塔ともいわれている。真言宗に於ては大日如来をまつって「大日塔」ともよんでいる。従って天台宗・直言宗以外の宗派には用いられていない。この塔は地方色が強いものがある。大分県の国東塔などその代表であろう。

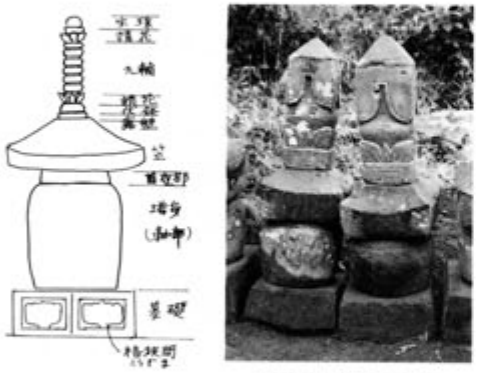
県内では加治木の日木山にある「仁治三年」「寛元元年」のものが最も古く代表的なものである。中には経塚の標識として建てられる場合も多い。薩摩半島においては図に示すような古式のものが多いが、大隅半島に於ては写真に示すような（下伊倉城址）特色をもつものが多い。例えば、相輪の形式は宝珠の代りに、宝珠と請花を一つにして冠帽状にしたものが多く之が特色といえる（宝冠的とよんでいる）。また、塔身首部にたての刻線を施しているのも特色であ

ろう。ことに肝付氏の勢力の多い所に見られることが多いことから、肝付氏関係のものとの見方もある。

下伊倉城址に残るものは四基で、高さは115cm～104cmと１ｍを少し超えるものである。相輪の宝輪は線刻のものが多い。

(4)　俣瀬橋畔の宝塔、五輪塔群

下伊倉城址の北側、肝付川に面したところは以前「別府ヶ城」とよばれた城跡があったという。それに関係するものかあきらかではないが、北西の俣瀬橋を渡った橋畔の水神社の前に、宝冠形の相輪をもった宝塔が九基あり、また、相輪が欠失し、塔身に菩薩像を刻し、背面と、背面に「𑖀（アン）」の梵字を刻したものがある。これは、串良川の拡張部分となる地点から移されたものといわれている。（『東串良郷土誌・県文化財調査報告書第34号　大隅国編』）



下伊倉城址の宝塔
（左図と大きく異なることがわかる）

之については「九基の完形の宝塔（相輪は宝冠形）と五輪塔四基がある。相輪高は46cm前後で、宝輪の数は４～６輪で、高さは凡そ100cm前後で、肝付一族の供養塔であろう」と推定をしている。

三、その他

唐仁大塚古墳の南、共同墓地附近の民家の畑地内にも「日高ドン」の墓と伝える宝塔・五輪塔篋印塔などの石塔群があり。

また、大塚古墳南東数百メートルの民家の宅地内にも「薬師ドン」などとよばれる宝塔群がある。

然し之等類似する宝塔・五輪塔群の何れにもその時代や人物をあらわす銘文は見当らない。これらは推定をゆるされるならば、何れも下伊倉城跡に残存する宝塔や五輪塔と関係するものと考えられることから、「永禄九年」という年号を中心に、その前後に於ける串良地域の領主たちの動向を検討し「餅田石□守」或は「道賢禅定門」などの人名、法名を手がかりとして問題の解決にあたる必要があろう。

四、「永禄九年」について

東串良郷土誌の249頁にはこの下伊倉城址の五輪塔銘を利して「鎌田石見守道賢、永禄九年八月」の納骨五輪塔が存在することでも」、肝付氏に大事件が起ったことが伺われるとのことがある。またこの年は肝付兼続の死去せる年である。

永禄四年～九年にかけて大隅半島は肝付・島津の対立したことは容易に伺えるし、多くの史資料が残されている。

然し之らは更に検討する余地があり、石塔銘文の解明は十分に検討を加える必要があろうと思われる。また、下伊倉城跡の石塔には納骨孔はなかった。

今後の研究課題であろう。

（『旧地雑録、後編２巻』『東串良郷土誌』）

俣瀬橋畔水神社前の宝塔群
（下伊倉城址の石塔（宝塔）と関係あると思われる）

「鎌田石見守」について

飯田氏とあり、拓影から「餅田」と認められる、何れであるかもう少し史料をさがしてみる必要があろう。「石見守」法名が「道賢」之等から探し求めることも必要であろう。

「石見守」については「旧記雑録後編」に「永禄四年の廻城合戦」の「殉国名藪中」に田命施の人々として「稲留石見守」の名がみえる。

五、なお近世の石祠が土塁の南山中に二基あった「文化十三年」のものである。「稲荷社」の信仰祠で「下伊倉奥（組）」のたてたものである。

一方、県指定の「唐仁古墳139号墳」の塚上に「五輪塔」の水輪残欠と思われるものがあった。

石祠もあったというが、以前所有者の西之園氏（高山町平後園）が自宅に祠るという

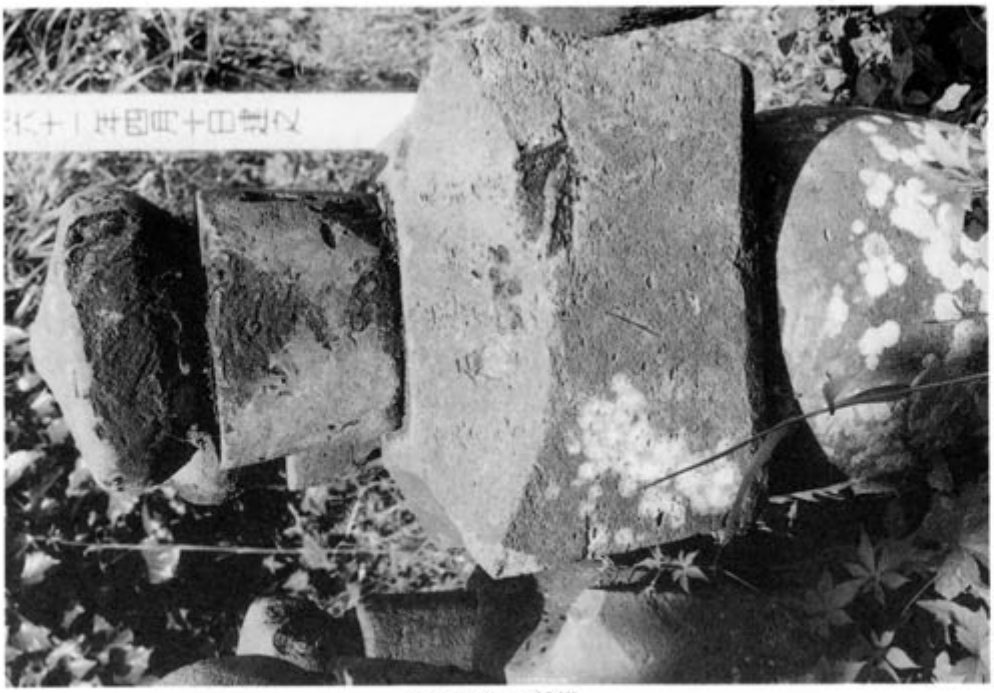
図版1

清掃前

図版2

清掃後

図版3



銘のある五輪塔

図版

火輪にある銘（拡大）

あ　と　が　き

一級河川肝属川が遺跡の北側をゆったりと流れており、太古の時代より幾多の氾濫を繰り返しながら、周囲の土地を肥沃し、多くの恵みを授けてきた。遺跡の周辺は多くが水田地帯となっており、確認、全面調査とも早期米の刈入れ準備及び刈入れ作業と重なり、発掘作業員の確保に難渋したが、無事調査を終了することができた。

昭和62、63年度に実施した調査の報告書刊行にやっとこぎつけられた。しかし、意を尽くせない部分も多く、本書を利用される各位において取捨選択しながら活用していただければ幸いです。

調査中は炎暑のなかで作業を進めていただいた地元の方々や、収納庫で整理作業を進めていただいた作業員の方々に感謝の意を表します。

発掘作業員

昭和62年度　外園袈裟吉、原田美代子、外園静子、下伊倉洋子、下伊倉祐子、東水流美代子、古城シズエ、田辺洋子、下伊倉カスミ、安部イトエ、外窪ケサヨ、外窪優子、内倉トメ子、米沢京子

昭和63年度　北園秀春、久保重則、古城利己、下伊倉祐子、外園静子、下伊倉陽子、原田美代子、杉木律子、有留弘子、倉ヶ崎京子、森園アツ子、新西サチ、今村タミ子、長野京子、川畑フミ子、今村マリ子、川畑アヤ子、鶴田アミ、伊倉タミ子、牧徳子、内門フサ子、山中ハツミ、坂元フミ、出水美奈子、平山美智子、下園シズ子、東水流ナリ、外園育代、原口モヨ、野元ノリ子、森園ミエ子、吉ヶ崎洋子、伊倉節子、門倉アツ子、瀬戸山八重、篠崎ノリ子、上掘ヒサ子、原口フミ子、園田レイ子、久保エチ子、久保サチ、園田マリ、森テル、角野ノリ、東水流ノブ、内みよ子、福元和子、平後園愛子、田辺ヒデ子、西之園良子、下園久子、福岡ナリ、富森冬子

整理作業員

昭和62年度　下畠節子

昭和63年度　松元雅子、行船順子、浜田幸江、宮岡雪子、竹下マリ子、高倉晴美、四丸久美、徳永美喜子、木田安枝、春山まり子、本多直子、野入満喜子、川畑明子、花田節子、岡村典子

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（50）

下伊倉遺跡・下伊倉城跡

1989年３月

発行　鹿児島県教育委員会
〒892　鹿児島市山下町14－50

印刷　株式会社秀巧社印刷
〒890　鹿児島市新栄町25－７